



始



特 237  
71

贈呈

熊本縣立人吉高等女學校著作



標準婦人文庫良書百種解説

人書を作り書人を作る



山鬼子三氏寄贈本



## 古人自ら語る

古い書物を読む。書中の人物、又は作者、生きて自ら語る。マールリンクに依れば、思うとき、あの世の人は其の思ひに呼び出されて眼をさます。讀書三昧、著者の靈亦生きて自ら語り出づるには非るか。古人の言新しく聞ゆるは嬉し。(後藤静香)

## 讀書の樂み

何が楽しいたつて書物を読むほど楽しいことはない。讀んでる間に人を考へたり、いろ／＼自然を眼に描いたり、折々は書物をさぢて了つて書いてある事から離れ、靜かな世界に引き入れられてものを考へる。要するに良書といふものは、讀んでるうちにいろ／＼なことを暗示させ、聯想させる。(小川未明)

## 序

健實なる讀書趣味を涵養することは、人生の價値を高め、生活の内容を豊富にする所以のものである。

由來我が國民は、之を歐米諸國民に比して一般に讀書趣味に乏しく、特に婦人に於て一層其の感を深くするものであるが、偶々婦人にして讀書趣味ありとするも、低級なる文學、卑俗なる社會記事等のみを耽讀して、國家社會の理解、婦人使命の自覺、高尚雅なる趣味の養成等に資するものに至りては、敢て之を顧みざる傾向を認むることは、洵に遺憾なことである。是には種々な原因もあるであらうが、一

般に學校も學生も眞の讀書趣味を養ふことに餘り注意しなかつたことも其の一つであつて、學窓を去ると同時に良書に親むことが薄くなり、次第に之を疎んじ、甚しきは遂に之と絶縁するに至るからであると思ふ。

言ふまでもなく、女子が自己の修養に努むるは、其の使命を果す上に極めて必要なことであるが、特に女子の天分である子女教育の大任を全うする上に於て最も肝要なことと思ふ。即ち其の修養の厚薄は直に子女に影響し、延いては我が國將來文化の消長に重大なる關係を有するものであるから、苟も女子教育の任に當るものは深く思を茲に致して之が善導に努め、卒業後も常に良書を愛好して終生修養を怠らぬ様にすることが最も大切なことと思ふ。是がよく行はれて居れば、それが自啓自

發の基調となり、自ら修めて思想堅實、意志鞏固、趣味高尚、人格純整の人となり個人を玉成すると共に内助の功を收め、子女教育の大任も全うし得ることと思ふ。

翻て現今出版界の實情を観るに、新刊圖書は日に月に其の多きを加へ汗牛充棟も嘗ならざる有様であるが、所謂玉石混淆で或は一局部に偏し、或は人を害し世を毒するものが無いとも限らないから、其の撰擇には深甚なる注意を拂はねばならぬ。然るに熊本縣立人吉高等女學校に於ては、創立十五周年記念事業として婦人の讀むべき良書の撰擇を企て、普く各部門に亘りて嚴選し、茲に標準婦人文庫良書百種を得、之に剴切なる解説を與へて卒業生書籍撰擇の指針となしたことは、意義深き企地洵に結構なことと思ふ。

固より其の撰擇標準に就ては、人各々見る所があつて、必ずしも之が理想的のものとは言へまいが、之によつて確に斯種の企に曙光を與へたことを信ずると共に、益々校内に讀書の良習慣を普及長養して指導の特色となし、此の記念事業が有終の美果を結ぶ様に努められんことを切望する。

聊か所感を述べて序文に代ふる次第である。

昭和六年二月三日

熊本縣教育會長 赤 星 典 太

### は し が き

一、我等の自己修養は、一生の大事業であつて、短い學校生活だけで完了するものでない。實社會に立つて、様々の体験を積んで、始めて我等の品性は熟成するものである。うら若き女性、師に別れ友に離れて、一度學窓を巢立つて後、日々の心の糧となり、終生の好同伴となるものは、書物を措いて他にない。ところで、女性が學校を出て家庭生活に入ると、その多數は殆ど書物を棄てゝしまふ。まして、他に嫁して後は、全く書物と絶縁する。これは本邦の家庭の事情に左右されるためでもあつて、あながち婦女子をのみ責めるわけにゆかぬが、折角女學校時代に相當讀書力を養ひ、又、讀書の趣味を體得しながら、さりとは情けない次第ではないか。成程、衣食住の所謂必要生活に汲々として、ゆとりのないその日その日を送らねばならぬのが、現代の主婦の實際生活ではあるが、この忙しい時間から、眞善美を求める所謂價値生活の時間を案出することは、只に自己の修養の爲めのみでなく、一家の幸福の爲め、子孫の爲め、最も必要のことではないか。

然るに、近來、印刷術の進歩に伴ひ、書物の出版はすばらしい勢である。東京、大阪の大新聞を始め、地方新聞に至るまで、毎日、新刊圖書の廣告で、相當廣い紙面を埋めてゐる。實に汗牛充棟も管ならぬ書物が、洪水のやうに押出されるのである。勿論これは、文運の隆昌を示すもので、喜ぶべき現象ではあるが、又一面憂ふべきものがある。何故ならば、此等の書物の中には、元より、著者が多年の勞苦から生れる好著もあるが、又、中には、内容が空粗であつたり、雜駁であつたり、又、隨分如何はしいものもある。眞に玉石混淆の有様である。ところが、此等粗惡な書物を作る者も、或は巧妙な文字を羅列してこれが宣傳に努め、或は新奇な販賣方法を案出して、盛に人の購買慾をそゝつてゐる。世の父兄や子女の迷ふのも無理がない。

さて、人生は短く、讀むべき書は多いのである。一方に於て各自が讀書の時間を工夫すると全時に、一方に於て讀むべき書物を厳選することは、現代生活上極めて重要な事項である。そこで、私は、かの英國のサー・ジョン・ラボツクの試みた One Hundred Best Books に倣ひ、若い人達の爲めに百種の良書を選定してみたいと念願した。これは私の宿望であつたが、

久しく實現し得なかつた。年々卒業生を送り出す毎にこの感を深くしたが、殊に今春三月新卒業生を出すに當り、この事は捨て置けない當面の問題として、私共の胸中に往來した。尤も、このやうな計畫を既に實施してゐる學校があるなら、その經驗なり効果なりを確めた上で、それに倣ひたいと思つた。然し私共の知れる限り、斯様な企は未だ耳にしなかつた。それ故、これを先輩に質し、同僚に計つて、烏滯がましくも、標準婦人文庫良書百種選定の計畫を立てた。これが本年一月のことである。

一、選定の目安は左の通りである。

- (一) 和漢洋を問はず、心の糧となる讀物、高尚な趣味の讀物、並に實用的知識の源泉となる讀物、但し特に婦人の讀物であり、同時に家庭の讀物として適當なもの。
- (二) 古きと新しきとを問はないが、多少でも時の節によつて精選せられたもの。
- (三) 可成單行本。
- (四) 高等女學校卒業程度までの力で理解し得られるもの。

以上の目安に依り、先づ、官廳、學校、圖書館等で、教育の實際に當つて居る方々、並に各

専門學藝の權威たる方々の教示を基礎とし、これに私共の私見を加へ、良書百種を選択して  
 假目録を作つた。更にこれに加除修正を施したものが本書所掲のものである。

三、さて、選定の實際に當り、豫想外の困難を感じたことは、明治・大正年間の出版で、夙に  
 好著の折紙のついた書物で、かの關東大震災の厄に遭つて以後絶版となり、未だ再版の見込  
 の立たないものが可成多いことであつた。又、修養や文學の方面は、大体恒久的生命ありと  
 認められるものを網羅することが出来たが、科學や、技藝方面は、現在に於て比較的良いと  
 思はれるものを採つたに止まり、恒久的價值のものを揃へることが出来なかつた。これは、  
 その方面のものは何れも日進月歩の性質のものであるが故に、止むを得ぬことと思ふ。又、  
 外國文學中には、近代劇の代表的のもの一、二を加へたい考であつたが、適當な譯書を得な  
 いので見合せた。尙、數理の方面も、應用的で面白いものを一、二加へたかつたが、この種  
 類の良いものは絶無であつた。こんな次第で、出来上つた目録を一覽すると、編者の私共さ  
 へ不満な點が尠くない。この補正は、他日改修の時機に俟つ考である。

四、この目録に載せた書物を一時に揃へるには、概算二百七十圓を要する（普及版等のあるも  
 のはそれで間に合せるなら、總額の上で十余圓を減す）。一時に全部を揃へることは勿論望  
 ましいことながら、これは普通の家庭としては容易でない。それ故、その人の趣味や資力に  
 應じ、毎月一冊なり二冊なりを購入してゆくと、嫁入時までには相當まとまつた冊數とな  
 る。これを嫁入文庫として持參し、嫁入先きの家庭文庫の基礎とする。更に買ひ足し讀み足  
 してゆけば、數年後にはいつしか本文庫が完成する。今日直に決心して五年計畫乃至十年計  
 畫を立てればよいのである。（後掲讀書手引草中「月五圓の書籍代」の條參照）

五、さて、目録が出来上つたが、只これを示すだけでは洵に不徹底の感じがするのであつた。  
 書名を挙げただけでその内容に觸れないのは、さながら佛作つて魂入れぬといふやうな不満  
 を感ずる。そこで一步進んでこれが解説を思立つた次第である。この四月から、公務の余暇  
 を利用してその仕事を進め、今回漸く完成を見た。先づ、一種の解説に充てる頁數をほぼ三  
 頁と限定し、その範圍内で、或は内容の概説なり、或は主要點の約説なり、或は讀了後の感想  
 なり、或は著者が執筆の動機なり、その顛末なり、或は著者の時代なり、環境なり、或は文  
 藝の著作ならば作家の人生觀なり、傳記なり、又、文壇に於ける地位なりを、必ずしも一定

の形式に據らず、自由に、且つ多様に、且多趣味に、これが紹介を試みることにした。要は、讀者をしてその著作の如何なるものかを知らしめ、全時に、他日機會を得て自らこれを讀まんと欲望を起させようとするにある。

六、この解説の中五十篇は、本年四月より十月にかけ約半歳に亘り、人吉新報並にその前身たる球磨日々新聞に連載した。今、これに多少の改修を加へ、その他の分五十篇を併せ、本文庫の目録に加へて刊行することとした。

讀者がこの解説に目を通して置くならば、他日原作を讀む時の手引となるばかりでなく、本文庫を一時に揃へて原作を一々讀了せずとも、解説の與へる知識だけで、手取り早くその書物に概通し、併せてその書物特有の風味を幾分なりと味ふことが出来るであらう。

七、本文庫を利用される婦人達に、尙一言望むことは、批評眼を以て讀書することである。凡そ不朽の名著ともいはれるものでも、時代時代に依つて、多少その解釋を異にするものである。これは、同一の書物でも、新しい時代には新しい時代精神、新しい見識で讀まれるからであつて、この意味で古い良いものは永久に新しい良いものとなるのである。又、どんな優

れた著者でも神でない限り、その思想や記述に多少の誤謬は免れぬのである。「悉く書を信すれば書なきに如かず」とは千古の金言である。どこまでも書に讀まれずに、書を讀む態度、即ち書を活用する態度こそ望ましいのである。

八、本書の刊行は、來る昭和六年が本校創立滿十五周年に相當するところから、その記念事業の一として計畫したのである。従て、書物の解説は、本校教師が總がかりで分擔したのである。國文學に屬するもの全部其他二種合計十六種は藤岡教諭これに當り、外國文學の中五種其他一種は五十嵐教諭これに當り、美術に關するもの四種は深川教諭これに當り、その他各教諭何れも一、二種宛を分擔した。修養、教育、法制經濟、保健衛生、及び社會に關するもの全部、其他合せて六十種は不肖の拙稿である。憾むらくは、不肖等の筆力鈍き爲め充分に原作の面影を寫すことが出来なかつた。又、短日月の間に稿を了へた爲め、種々手落ちの點が多いであらう。又、全く見當違ひの箇所もないとは限らぬ。然るべく大方諸賢の御批正を仰ぎたい。

九、本書の刊行に當り、本邦女子教育界の泰斗、賢母良妻の活模範、鳩山春子先生が、特に本



書の爲め、御近作の讀書訓一篇の轉載を許されたことを感謝す。  
尙又、熊本縣教育會長赤星典太先生が、本書の卷頭に執筆せられしことを深謝す。

昭和五年十一月三十日

熊本縣立人吉高等女學校長

小山鬼子三

### 標準婦人文庫良書百種解説

#### 目次

良書百種目錄……………	(一—一〇)
鳩山春子女史讀書訓……………	(一一—三)
讀書手引草……………	(三一—一三)
良書百種解説……………	(一四—三五六)
索引……………	(一—二五)

鳩山春子女史より學校長への書翰

拜啓 時下愈々御清穆奉賀候陳ば御懇書拜讀仕候處御丹誠相成候「標準婦人文庫良書百種目錄」は豫ねて私の理想と致居候婦人の使命、人格建設、遂行上に極めて有利なる媒介とも相成頗る有益なるものと考へ、右有難く拜受仕候私も其の中希望の物求め度存居候 (下略)

(昭和五年十一月二十九日)

標準婦人文庫良書百種目錄

熊本縣立人吉高等女學校選

番號	著者	書名	解説頁	冊數	定價	發行所
一	文部省編	明治天皇御集	一四	一	二・〇〇	三省堂
二	同	昭憲皇太后御集	一六	一	二・〇〇	同
三	簡野道明	論語解義	一七	一	三・八〇	明治書院
四	同	改譯新約全書	一九	一	二・五〇	米國聖書會社
五	常盤大定	增補訂正佛陀の聖訓	二三	一	一・八〇	博文館
六	トマス・アケムヒス 中山昌樹譯	基督に倣ひて	二五	一	一・五〇	新生堂
七	益本重雄譯	全譯天路歷程	二八	一	二・八〇	太陽堂
八	芳賀矢一	國民性十論	三二	一	一・八〇	富山房

九	德富猪一郎	昭和一新論	三五	一	六〇	民友社
一〇	山下信義	一事貫行	三八	一	六〇	新政社
一一	德富健二郎	竹崎順子	四〇	一	四〇	福永書店
一二	鶴見祐輔	母	四五	一	二〇〇	大日本雄辯會

### 二、教育

一三	小原國芳	母の爲めの教育學	五〇	一	二〇	玉川學院出版部
一四	上野陽一	兒童心理	五三	一	二〇	婦女界社
一五	東京市社會教育課編	玩具の遊び方と與へ方	五七	一	一五〇	實業之日本社
一六	ルッサー	改譯 エミール	六〇	一	二八〇	誠文堂
一七	エドモンドアミチス	クオレ愛の學校	六三	一	三〇〇	全

### 三、國文學

一八	植松安全	釋古事記	六六	一	四五〇	廣文堂
一九	佐々木信綱	增訂萬葉集	六九	一	三三〇	明治書院

二〇	金子元臣	枕草子評釋	七三	一	七〇	全
二一	興謝野晶子	新譯源氏物語	七五	二	八五〇	大體閣
二二	玉井幸助	更級日記新註	七九	一	一八〇	育英書院
二三	内海弘藏	徒然草評釋	八三	一	一五〇	明治書院
二四	和田萬吉	謠曲物語	八六	一	四〇〇	富山房
二五	島野幸次	校註奥の細道	八九	一	七〇	明治書院
二六	五十嵐力	新國文學史	九四	一	四〇〇	早稻田大學出版部
二七	樋口一葉	縮刷一葉全集	九六	一	三八〇	博文館
二八	幸田露伴	篇	九九	一	一〇〇	春陽堂
二九	夏目漱石	吾輩は猫である	一〇二	一	二二〇	大倉書店
三〇	國木田獨步	縮刷獨步全集	一〇五	一	三八〇	博文館
三一	條武子	無憂華	一〇八	一	二〇〇	實業之日本社

### 四、外國文學

三二	杉谷代水	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三三	中島孤島	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三四	坪内逍遙	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三五	全埃斯比	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三六	片山伸	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三七	中山昌樹	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三八	平田ホ	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三九	黒岩ゴ	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四〇	森太郎	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四一	佐藤次郎	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四二	永代知代	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四三	今泉治郎	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四四	若松子	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四五	田中友一	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三二	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三三	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三四	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三五	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三六	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三七	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三八	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
三九	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四〇	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四一	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四二	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四三	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四四	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房
四五	希臘神話及北歐神話	希臘神話及北歐神話	一三三	一	二・三〇	富山房

五、歴史傳記

四六	北垣恭次	國史美談	一七八	三	四・五〇	實業之日本社
四七	柴田親雄	國民西洋歷史	一八〇	一	三・三〇	富山房
四八	村上秀一	國民東洋歷史	一八四	一	三・三〇	富山房
四九	グアンルン	世界文明史物語	一八六	一	四・八〇	早稲田大學出版部
五〇	徳富猪一郎	日本名婦傳	一八九	一	一・五〇	主婦之友社
五一	常盤大定	釋迦牟尼傳	一九一	一	一・五〇	丙午出版社
五二	ロポルトン・ニコル	基督傳(柏井全集第四卷)	一九四	一	二・五〇	警醒社
五三	遠藤隆吉	孔子傳	一九九	一	三・〇〇	丙午出版社
五四	野邊地天馬	ワシントン物語	二〇一	一	一・五〇	丁未出版社
五五	内ヶ崎作三郎	リンカーン	二〇四	一	一・五〇	實業之日本社
五六	野邊地天馬	近世偉人物語	二〇七	一	一・五〇	丁未出版社

### 六、地理紀行

五七	小田	内通敏	我が國土	二二二	一	一〇〇	研究社
五八	二荒	芳德	皇太子殿下御外遊記	二二五	一	三五〇	大阪毎日新聞社
五九	山崎	直方	西洋又南洋	二一九	一	三三〇	古今書院
六〇	鐵道	省	鐵道旅行案内	二二二	一	三三〇	博文館
六一	櫻井	忠温	土の上水の上	二二五	一	二〇〇	實業之日本社

### 七、法制經濟

六二	大久保	靜平	婦人の法律と經濟	二二八	一	二八〇	實文館
六三	上杉	慎吉	憲法讀本	二三一	一	一〇〇	日本評論社
六四	穗積	重遠	民法讀本	二三三	一	一〇〇	全
六五	太田	正孝	經濟讀本	二三七	一	一〇〇	全

### 八、理學

六六	横山	桐郎	蟲の世界を探ねて	二三九	一	二二〇	大日本雄辯會
六七	納富	重雄	土	二四三	一	一八〇	三省堂
六八	全		水	二四七	一	二〇〇	全
六九	全		火	二五〇	一	二〇〇	全
七〇	龜高	德平	化學と人生	二五二	一	五八〇	實文館
七一	寶來	勇四	耶電氣讀本	二五六	一	一〇〇	全

### 九、保健衛生

七二	原田	隆婦	人衛生	二六〇	一	一八〇	博文館
七三	澤村	眞營	養學	二六二	一	四三〇	成美堂
七四	富永	哲夫	救急療法と應急手段	二六六	一	二五〇	富山房

### 十、体育競技

七五	雜賀	三省	女子体育學	二六八	一	三三〇	廣文堂
----	----	----	-------	-----	---	-----	-----

七六 人見 絹枝 戦ふまで 二七〇 一 一〇〇 三省堂

### 十一、軍事

七七 小笠原 長生 撃滅 二七三 一 一〇八 實業之日本社  
七八 櫻井 忠温 肉弾 二六七 一 一〇〇 丁未出版社

### 十二、社會

七九 永井 亨 社會讀本 二七九 一 一〇〇 日本評論社  
八〇 益富 政助 節約讀本 二八三 一 一〇〇 全  
八一 本間 久雄 婦人問題十講 二八七 一 二〇〇 東京堂  
八二 伊藤 悌藏 農村の娛樂及生活改善 二九六 一 二〇〇 養賢堂  
八三 松居 甚一 耶一人一研究の人々 二九九 一 〇八〇 新政社

### 十三、實業

八四 武藤 山治 實業讀本 三〇三 一 一〇〇 日本評論社  
八五 中村 康之 助工業讀本 三〇五 一 一〇〇 丸善

### 十四、美術

八六 相良 徳三 日本美術史 三一 一 二〇〇 イデア書院  
八七 相良 徳三 西洋美術史 三一 一 二〇〇 全  
八八 橋本 春陵 日本畫の描き方 三一四 一 一〇〇 崇文堂  
八九 三宅 克己 水彩畫の描き方 三一七 一 一〇〇 アールス  
九〇 紀尾井 龍母の爲の藝術學 三二〇 一 二〇〇 イデア書院

### 十五、各種技藝

九一 西島 芳太郎 婦人洋服裁縫大全 三二五 一 三〇〇 婦人之友社  
九二 山脇 敏子 母の手藝 三三二 一 一〇〇 婦女界社  
九三 婦人之友編輯局 毛糸あみもの百種 三三四 第二 二 三〇〇 婦人之友社

十六、音 樂

九四 兼 常 清 佐母の爲の音楽 三三六 一 二〇〇 イデア書院

十七、家 政

九五 富 山 房 編 日本家庭大百科事彙 三三七 三三〇 富 山 房

九六 赤 堀 峰 吉 赤堀日本料理法 三三九 一 三〇〇 大倉書店

九七 婦人之友編輯局 家庭で出来る和洋菓子 三四三 一 一〇〇 婦人之友社

九八 山 下 信 義 臺 所の改造 四四三 一 吾 新 政 社

十八、園 藝

九九 佐々木祐太郎 増訂花卉園藝(上卷) 三四八 一 五八〇 成 美 堂

一〇〇 富 樫 常 治 増訂實驗蔬菜栽培講義 三五二 一 五五〇 養 賢 堂

標準婦人文庫良書百種解説

熊本縣立人吉高等女學校著作

鳩山春子女史 讀書訓

書物は其の選擇をあやまらざれば、最も有益なる友人で愉快なる伴侶であります。誰が我愛  
讀する書物の如く、我に親切であり得ませう、我が欲する時には何時でも我が相手を勤め、幾  
度使用し、紙がばら／＼になるまで使用しても更に苦情を言はず、又他用に妨げられ數日之を  
顧みることさへせずとも、曾て不機嫌ならず、俄かに旅行に携帯せんとすれば直ちに我意に従  
ふ、何事に限らず萬事我欲する儘に我を悦ばせ、我好む儘に我を教へ、我を導き、我を慰め、  
我を勵まし、我が指定する事物に就て、我と語り總ての場合に於て些細の抵抗も反對もせず、  
我が心の友となつて我に適當の知識を授け、我を向上進歩させ、我自らを生き甲斐あるものに

せんと欲する我を助け、我をして孤獨の淋しさを感ぜしめません。

誰が我が愛讀する書物の如く吾に親切であり得ませう。書物は實に我が爲めに我が固守する獨特の意見にも同意して克己忍耐無我的從順を以て我が爲めに離れざる、永續的、親友であることを辭しません。我にして若し一朝不真面目に、時流に従ふことを事とし、不條理に傾き危険に陥る場合あらむか、書物なる親友は遠慮會釋なく、我を正し、我を戒むに於て憚ることなく、逆境に於て、困難苦痛に際しても、我に背を見せることなく、我が勇氣を鼓舞し、同情と慰安と獎勵の勞を惜まず、順境にして我が得意の時にも、我に追從煽動を試みることなく我をして自らの價值を知る爲めに我に自省を促す等、誰が我が愛讀する書物の如く我に忠實であり得ませう。

然しこれ皆書物を、精選したる時に限るのであります。萬一選擇をあやまつことあらんか、我を益する程度より一層烈しく我を墮落させます、それは昇るより下る方が容易だからであります。我が益友が我に向上せしむるより、一層惡友は烈しく我を墮落させますことを思ふ時、書物選擇の必要を痛切に自覺せしめます。

生きたる友人との交際に時間の制限があります。書物の友人はそれが抵抗も反對もせぬだけ、交際の時間も無制限であります、これは書物なる友人の感化力もまた無制限なる所以であります。

世の風教を害し、青年男女の熱血を燃えしめ、之を墮落せしむる書物の害毒を思ふ時、母の其子に及ぼす責任の重大なるに、戦慄を禁じ得ないのではありませんか！。

(昭和五年六月)

## 讀書手引草

### 四種の讀書家

#### 一、砂時計的讀書家

讀んでも讀んでも、底無し桶に汲む水のやうに、片端からぬけ落ちて、何一つ腦裏に残らない砂時計的讀書家。



## 二、濾囊的讀書家

精良な部分はすつかり推出してしまひ、あとには滓ばかり大事さうに残す濾囊的讀書家。

## 三、海綿的讀書家

よく吸収することは吸収するが、さて吐出す時には塵や芥がまざつて出る。洗濯用の海綿的讀書家、

## 四、鑛夫的讀書家

金剛石坑に働いて、岩石の間から珠玉のみをあさり集める鑛夫的讀書家、

これは英吉利の文豪コウルリツチの書いたものゝ大意を採つたものです。さて私共はこの四種の讀書家の何れに屬するでせうか。お互に考へて見ませう。

## 二種の讀物

書物には、一時的讀物と恒久的讀物の二種類がある。

一時的讀物には、一時的の價値しかない。例へば、旅行談や見聞記といふやうなもの多く

はこれである。たとひ一冊の書物にまとまつてはるても、著者が讀者に送つた長い手紙といふだけのもので、朝食前に眼を通す新聞の記事に類したものである。勿論讀者を引きつけるだけの力があらう。又讀者にとつても面白くもあらうし、又多少の参考にもならうが、要するに一時的のもので、讀んでしまへばあとは用がない。所で、本屋の店頭を飾る美しい澤山の書物は先づ此の種類に屬するものではなからうか。

恒久的讀物には、恒久的の生命がある。著者の身になつて考へてみる。我が一生は敢て短くはない。だがその一生の大部分は、食て寝て、平々凡々の中に送つてしまつた。然るにこゝに自分ならではの感知出來なかつた一事がある。自分の知れる限り今日まで誰もこれを發見した人がない。誰も考案した人がない。これだけは、自分の一生の記念として後世に残して置きたい出來ることなら大磐石に刻みつけて置きたい。かういふ眞剣な態度で著者が執筆したものなら、たとひそれは一枚の記述に過ぎぬものであつても、不朽の著作と言つてよい。「文は人なり」といふが、かやうな著述こそは、著者の眞人格を遺憾なく表現したもので、又後世を裨益する偉大な力がこもつてゐる。

以上は、英吉利の文豪ラスキンの所論を約説したものです。さて恒久的生命のある書物は、何處の國、何時の時代に於ても、まことに少いものです。價值ある讀物厳選の必要はこゝにあるのです。

讀者の側から考へてみませう。我々の一生は長いやうで短かい。この貴重な時間を何に費すべきでせうか。聖賢の教訓や偉人の体験を味ふことも出来ます。先達の創見を知り、藝術家の高潔な作品に親むことも出来ます。それなのに、裏店のお内儀さんの人身攻撃や、「稚小僧達」のくだらぬ世間話や、お三どんの井戸端會議に耳を傾けて、この貴重な時間を費してしまつたらどうですか。我々が標準婦人文庫良書選定の仕事を敢行した理由はこゝにあるのです。

### 精讀と多讀

書物の読み方には、精讀と多讀との二つの方法があります。

精讀とは、同一の書物を、繰返し／＼讀んで、一字一句の末まで意義を明確にする讀み方で、多讀とは、一字一句の字義には捉はれず、一篇の大意なり眼目なりをつかんで、比較的短い時間

間に澤山の分量を讀破する方法であります。

大体教科書は精讀主義、参考書や課外の讀物などは多讀主義で行くべきです。

アブラハム・リンカンは模範的の精讀家です。幼時彼の家庭にあつた書物といはゞ一卷の聖書の外には、パンヤンの天路歷程、イツツブ物語など、僅か數冊に過ぎなかつたのです。彼ははげしい勞働の余暇には濁した鹿が谷川の水を慕ふやうに、此等の書物を熟讀玩味しました。殊に聖書などは、反復して誦讀してゐる間に、すっかり全文を暗記したといふことです。米國の大統領になつた三十人程の偉人の中で、リンカン位低い學校教育を受けた人はなかつたのですが、このリンカン大統領が最も民衆を感奮させた大演説を試みたとは、實に驚くべきではありませんか。勿論彼の大演説は、彼の全人格の現れですが、この偉大な人格は、彼が幼時に精讀した數冊の良書の賜物であります。

多讀主義の主眼は大意を腦裡にまとめるにあります。でないと、コウルリツチの所謂第一種の讀書家のやうに、讀んでも讀んでも、片端からぬけてしまひます。

大意をまとめる一手段として、要點を書きとめることはよい事です。そして讀了後、家の人

や友達に發表してみることは、最も有效な方法です。それに依つて頭腦が整理されてゆくのですから、讀んだことの要領がまとまるといふ利益の外に、腦力の練磨といふ獲物までも授かるのです。

### 通俗な書物

高遠な眞理や、複雑な精緻な思想や情緒を、出来るだけ卑近に、單純に、簡素に記述したものが、眞の通俗な書物であります。學者や専門家は、とかく自己の思ふ所を適確に言ひ現さうと力める餘り、學者や専門家でなくては理解しがたいやうな、むづかしい書物を書き勝ちです。民衆教化の第一要件は、誰にでもわかるやうな平易な言葉を用ゐて、明快に話したり、書いたりすることにあります。アブラハム・リンカンの演説が民衆に大感激を與へることの出來たのは、實にこの點にあります。聖書が、世界の津々浦々まで廣く讀まれるのも、亦この點にあるのです。流石にこゝに氣のついたのは、福澤諭吉先生です。先生が明治の初年間に出版された澤山の有益な著述が、廣く讀まれたのは、當時の教育の低い婦人や子供にでもわかるやうな、極

めて平易な文章で書かれた爲めです。先生が本邦の民衆教化に成功された第一人者であつたことは故なきではありません。

我々が標準婦人文庫良書選定に當つて、惜しいと思ひながらも棄てた多くの書物は、通俗な書き方でないためであります。

### 百といふ數

書は萬卷を讀破すとは、支那人の大言壯語であるが、さて萬卷は愚か、一生かゝつても千卷を書きこなす事すら樂でない。ところで、此の忙しい世に處して、普通の人が、そんなに多くの書物の讀める筈もなく、又讀むにも及ばぬことである。寧ろ愁をすつと小さくし、百冊の良書を熟讀玩味するに若かない。昔から、「讀書百遍意自通ず」と言ひ、又「お百度参り」「百發百中」などと言つてゐるが、如何にも百は我々凡人にとつて親しみの深い數である。千とか萬とかは及びもつかぬが、百ならやつてみようといふ氣になる。事實、何事をやつても、百回反復を積めば相當の自信がつく、文も百篇作れば形が整ひ、歌も百首詠めばものになり、ゲ

ムも百回やればコツがわかり、謠も百番稽古すれば人前でうたへるものである。書物にしても古今の名著を百冊讀めば、ひとかどの常識家となることが出来る。

### 索引なき書籍

書籍を作つて索引をつけないのは、顔を描いて目鼻を入れないやうなものである。泰西出版の書物は、假令それが百頁足らずの小冊子であつても、必ず索引がついてゐる。本邦出版の書物は、内容もよく外形も整つてゐながら、惜むらくは索引がつかぬ爲めに、完備と云へないものか尠くない。私は、索引のない書物を見る毎に、著者の不用意と、出版元の無責任を思ふ。

### 書籍の品位

近來、頻りに、安價な普及版の出るのは、良書の普及上、元より喜ぶべきことではあるが、強いて價格を低くしようとの無理算段で、紙質や、印刷や、製本を悪くするのは、考へ物である。殊に、徒に頁數の多きを誇る所謂圓本式のやり方は、感心出来ぬと思ふ。寧ろ内容を精選

して、分量を緊縮し、手頃の形のものにして、印刷や用紙にも氣を付け、裝釘も堅固に、然かも高雅にしつらへたいものである。婦人文庫に加ふべきものは、用途が一時的でなく、永久的のものであるから、内容に權威あり、外形に品位を備へ、見て感じよく、讀んで疲れを覚えさせぬやうなものでなくてはならぬ。

### 書物の形状

大きな洋紙の両面に幾頁分かの版が一度に印刷されたものを、印刷所から製本部に送る。これを製本職工が折疊む。一折にすれば四頁、二折にすれば八頁、三折にすれば十六頁、四折にすれば三十二頁となる。

さて我國で最も廣く使用される印刷用紙の大きさは、四六判と菊判とである。四六判の全紙を四六全判といひ、二・六尺に三・六尺で、この大きさを三十二折すると、六寸五分となり、書物に仕上げの際周圍を裁つので四寸に六寸となり、所謂四六判型をなす。この二倍の大きさ即ち八寸に六寸を四六倍判といふ。菊判の紙は二・一尺に三・一尺で、之れを十六截すれば、

所謂菊判型で、大抵五寸に八寸となる。この大きさの二倍を菊倍判といふ。又、普通の菊判の半分の大きさを菊半裁といふ。書物の形状の名稱、四六判は四六判型、菊判は菊判型の意味である。菊判なる語の出所は不明であるが、全紙を十六に分けるから、十六片の菊花になぞらへて菊判といふのだともいひ、又初めて輸入された當時、その紙に菊の印があつたからともいはれる。

### 讀書の一事、貫行より慣行へ

をりく／＼に遊ぶいとまはある人の、いとまなしとて書讀まぬかな、と本居宣長が歎息したがさて、人が存外本に親まぬのは、昔も今も變りがない。殊に、終日を臺所で過す本邦の婦人にとりて、書見の余暇はないのが常である。暇が出来たら、など言つてゐたら、それこそ讀書の出来る日といふものは、一年に一日もないにきまつてゐる。それ故、どうしても余暇を作つて書見をせねばならぬ。そして、日々之れを貫行して讀書の良習慣を養ふべきである。一日三〇頁宛讀めば、月に九百頁、年に積つて一萬八百頁となる。標準婦人文庫良書百種の總頁數は四

萬九千百十五、その内家庭大百科事彙の分を除いて四萬五千二百三十三頁となる。假りに一日三〇頁宛讀むとすれば、四年二箇月間に立派に全部讀み終へることが出来る。

千萬の書も年經て怠らず

讀めば讀み得るものにぞありける

(宣長)

### 月五圓の書籍代

學校に在學すれば、月々授業料が要る。女學校を卒業しても、上級の學校に入つたと思つて授業料を納める積りで、良書を買ふことにきめる。月五圓の書物代、一箇年で六十圓、四年半かゝれば優に標準婦人文庫一揃ひが完成する。

## 一、明治天皇御集

(摘要) 修養の部 宮内省編纂 文部省發行 全一冊 菊判 和紙 和裝 二九〇頁

索引二四頁 大正十一年十二月 三省堂出版 定價二圓

(解説)

一、「年々に思ひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり」と仰せられて、一日の御休息も、遊ばされず、日夜國事に、御精勵遊ばされた明治天皇は、畏くも我々國民に、勤儉力行の活模範を、垂れ給うた。さて陛下が、唯一つの御すさびは、敷島の道であらせられた。繁劇な御政務を、みそなはせ給ふ御餘暇には、金玉の御製を、反古紙にお認め遊ばされたと拜承する。御一代に、ものし給うた御製は、幾萬といふ數に上ると洩れ承る。國を憂ひ、民を憐みあそばされた有難い大御心のほどは、御製の一つ一つに、伺ひ奉ることが出来る。陛下の御盛徳を、仰ぎまつり、御仁慈の御大心をしのびまつるには、御製を拜誦するに越したことはない。本集は元宮内省で編纂されたものであるが、修養の鑑として、普く國民に奉讀せしめんが爲、文部省が刊行したものである。

二、本集は全卷を上中下に分ち、明治十一年以前より同三十六年まで、二十數年間の御製四三七を卷上に、明治三十七年より同三十九年まで三ヶ年間の、御製六二八を卷中に、明治四十年より御崩御の年(明治四十五年)まで、六ヶ年間の御製に、英國皇子に贈りたまへるもの、その他臣下に下し賜へるものを併せて、六二二首を卷下に收めまつる。御製總計實に一六八七を算する。御集の原本は、次に解説する照憲皇太后御集の原本と同様に、木版であつて、漢字は行草體で、又假名は多く變體を用ひ、濁音點を附してないが、本書はすべて普通の活字に改め、濁音點をつけるなど奉讀に便利にし、又卷末には正確な索引が附けてあるから、上の句の五文字を知れば、容易に全歌をさぐり求める事が出来る。

三、(類書) (イ)縮刷版 内外書房 昭和五年版 定價五十錢 (ロ)謹解書 内田孝雄著 寶文堂出版 玉の御聲

「玉の御聲」は御製の謹解として最も良い書物であつたが、惜しくも關東大震災以後絶版になつた。現在求め得られるものは、佐々木信綱著東京朝日新聞社大正十三年出版の、「明治天皇御集謹解」全一冊である。菊判 洋裝本 定價二圓八十錢

## 二、昭憲皇太后御集

(摘要) 宮内省編纂 文部省發行 全一冊 菊判 和紙 和裝 二五六頁 大正十三年九月  
三省堂出版 索引十六頁 定價二圓

(解説)

一、陛下が折にふれ、事に當りてものし給うた數々の御歌は、御高德の現はれに外ならないが又我々國民に對する大きな御教訓である。日常、明治天皇御集と共に拜誦して、御高德のほどを仰ぎ奉り、併せて修養の指針と致したい、本集も亦明治天皇御集と同様に、宮内省で編纂せられたものを、國民教育の趣旨で文部省が刊行したものである。

二、全卷を上中下に分ち、明治七年より同二十二年までの十六年間の御歌四五―を卷上に、明治二十三年より同三十五年までの十七年間の御歌四八―を卷中に、明治四十年より御崩御の年(大正三年)までの八年間の御歌に、臣下や學校に下し賜へるものを加へて一六四首の御歌、並に御文章二十二篇、御唱歌二を併せて卷下に收めまつる。御歌總計一、〇九七を算す。唱歌は當時の華族女學校、(今の女子學習院)に賜つた。「金剛石」「水は器」である。

三、(類書) (イ)縮刷版 内外書房 昭和五年出版 定價五十錢 (ロ)昭憲皇太后御歌集

川流堂昭和四年七月出版 小形本 洋紙 半和裝八一頁 附錄昭憲皇太后の御聖徳 二〇頁 定價二〇錢

(ロ)は、宮内省編纂の前記の御集より、八百四十五首を抜き奉り、部類に分ち、句點を切り、振り假名を施す。携帯に便。

(ハ)昭憲皇太后御集謹解 佐々木信綱著 東京朝日新聞社大正十三年七月出版 全一冊 菊判 四五七ページ 洋裝本 定價二圓八十錢

## 三、論語解義

(摘要) 修養の部 簡野道明著 明治書院發行 全一冊 四六判 布裝 六九四頁 語句  
索引三七頁 大正五年四月初版 定價三圓八十錢

(解説)

一、我が國民の道德の中樞が、神道であることは勿論であるが、今日のやうな體系が大成され

たのは、種々の外來思想を取り入れて、能く採長補短の實を擧げた結果である。殊に孔子の教によつて愈々堅實性を加へ、その體系が整備したと見られる。さて論語は、孔子の言行を記したものである。孔子が弟子や時人に應答したり、弟子達が相ともに談じたところの語を記したもので、當時弟子達が各々記録し置いたが、先生が既に亡くなつた後なので、弟子達が相ともにあつめて論選したところから論語といふたのである。

論語が始めて我が國に傳來したのは、應仁天皇の十六年で、百濟の王仁が論語十卷と千字文一卷とを献上した。我が國に孔子教の傳つたのはこの時からである。爾來、論語は修養の寶典としてあがめられ、上は長くも歴代の帝王を始め奉り、下は普く庶民に至るまで、盛に之を誦讀し研究するやうになつた。かくて孔子の仁義教は強く國民の精神に注入されることになつたのである。

二、論語の註解には、古學と新學との二派がある。古學(又は古註)は、漢唐時代の儒者の註に據るものをいひ、新學(又は新註)は、宋の朱子の説を主とするものをいふ。何れも一長一短があるが、著者簡野氏は一派に走らず、よく兩者の長を採つて統一的解釋を下さうと力めた。

三、本書は、先づ章句の原文(漢文)を掲げ、之にかへり點、送り假名を施して、誦讀に便し、次に「讀譯」の項を置いて原文を邦文に譯し、「章旨」の項でその主旨を明かにし、「字義」の項で文句の解釋を施し、「直解」の項で教訓の趣旨を詳説し、「考異」の項で古來の解釋の異同を批判し、「餘義」の項でその他に説明や著者の考を附け加へてある。尙卷末に載せた「語句索引」は、語句の出處並にその意義を檢索せんとする者の爲に、設けたもので、誠に便利なものである。要するに、論語の註解や講義書は、随分澤山あるが、本書は最も穩健で、親切で、且つよく整つたものと云うてよい。

四、(類書) 論語全解 島田鈞一著 有精堂出版 全一冊 昭和三年二月初版 三六判 布装 四四八頁 附録白文論語三十頁 索引十五頁 定價一圓八十錢 「讀方」「字義」「釋義」 「参考」の順序に解説し、簡明で然かも要領を得てゐる。

## 四、改譯新約全書

(摘要) 修養の部 米國圖書會社出版 教文館取次 全一冊 四六判 布裝 六三〇頁



大正六年十月初版 定價二圓五〇錢

(解説)

一、新約全書は、舊約全書と並んで、基督教の聖典である。舊約全書は、基督出生前の、ユダヤの歴史的記述で、新約全書は、基督傳並に使徒達の教書を總括する。基督と離れて基督教はないのであるから、勿論基督教の眞髓は、新約全書中に、含められてゐる。

二、舊約とは、神と人との古い誓約の意味で、新約とは兩者の間の新しい誓約の意味である。舊約の時代の神は、畏るべき神様であつた。時々黎明を暗示する星は輝いたけれども、まだ此の世は暗黒の幕に包まれてゐた。ところが新約の時代に入ると、神は愛すべく親むべき天父になつて、夜が明けた気分になる。基督の出生によつて、悲しみが喜びとなつたのだ。新約は人類の上に、愛と信と望の訪づれを、持來たしたものである。基督の一生は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、の四人の弟子に依つて傳へられてゐる。これを四福音書と稱す。尤も弟子達が書いたというよりも、寧ろ聖靈が弟子達に宿つて書かれたといふべきである。マタイ傳は王としてのキリスト、マルコ傳は僕としてのキリスト、ルカ傳は人としてのキリスト、ヨハネ傳は

言葉としてのキリストを傳へるものであると言はれてゐる。新約全書には以上の四福音書の外、基督の死後に於ける使徒の傳道を記した使徒行傳、並にパウロの記したローマ人への書簡、その他合計十三篇の書簡、ヘブル人への書簡、ヤコブの書簡、ペテロの書簡、ヨハネの書簡、ユダの書簡及びヨハネ黙示録を收めてゐる。

三、聖書の邦語譯は、明治の初年から明治十九年までの間に出版された。新譯全書は明治二十二年に、舊約全書は同十九年に完成した。當時のキリスト教界の權威者によつて譯されたもので一種雅致ある文體であるが、通俗的でない憾みがある。それで一層文字を平易にし、文體を近代風に書き改めたものが改譯新約全書である。英米の聖書會社の計畫で、内外人の委員數人に依つて改譯を試みられ、大正六年に完成したものである。

邦譯聖書が盛に讀まれる様になつてから、キリストの眞精神が益々本邦人に理解され、神の觀念や、愛の精神が固有の國民道徳中に織込まれたのである。

四、(類書) (イ)民衆の聖書 山室軍平著 救世軍本營出版 全六冊 初版大正十年前後 四六判

- 1、マタイ傳餘師 上製 一圓五十錢 並製 一圓
- 2、マルコ傳餘師 上製 一圓 並製 五十錢
- 3、ルカ傳餘師 上製 一圓五十錢 並製 一圓
- 4、ヨハネ傳餘師 上製 一圓二十錢 並製 七十錢
- 5、使徒行傳餘師 上製 一圓二十錢 並製 七十錢
- 6、ローマ書餘師 上製 一圓 並製 五十錢

各書とも先づ筆者並に、内容について簡明な解説を施し、毎日一章宛読み味ひ得る様に章句を切り、各章の初に聖書の本文を掲げ、之に對して平明な解説を加へたものである。聖書の通俗的解説として最上のものである。

(ロ)新約聖書物語 三浦關造著 誠文堂出版 全一冊 初版大正十四年十月 四六判 布装 四八八頁 定價三圓(半價提供中)

若い人の讀物にとて、四福音書と使徒行傳の事實を歴史的に記述し、之に新約全書全部の事實を織りこみ、ローマ帝國の背景をも明かにして、キリストの言行と使徒達の事業をまとめた

ものである。全巻を第一部イエスの一生、第二部初代の教會に分つ。少年少女に限らず、成人にとりても、興味深い讀物である。

## 五、佛陀之聖訓

(摘要) 修養の部 常盤大定著 博文館出版 全一冊 菊判半裁形 布装 七九二頁

明治三十九年九月初版 大正十三年八月増補訂正 定價一圓八〇錢

(解説)

一、孔子の教が、本家本元の支那で衰微して、本邦で花を咲き、實を結んだやうに、釋迦の教も亦本土の印度に廢れて、本邦で隆昌を極めたのである。孔子の教の長所を遺憾なく吸収して本邦固有の國民精神を堅實にした我等の祖先は、亦佛教の精華をもとり入れて、本邦固有の思想を一層豊富にし、複雑にし、更に又一層の深みを之につけ加へたのである。

佛教は我等の祖先に、生死の問題を提供し、過去現在未來の關係を説明し、更に大悟歸依、慈悲、解脱涅槃などの教義を授けたのである。今日我等の用ひる平等とか教化とか、向上とか

精進とか、徹底とかいう言葉は何れも佛教から出てゐる。

二、さて佛教の教旨は、大乘小乗の二門に分ける。大乘は涅槃を説いたもので、佛教の始祖釋迦の眞精神を示してゐるが、その教の最も深遠な所を説いてゐるので、とても俗人には解し難い。そこで釋迦は更に俗人に對する方便として卑近な通俗な教を垂れた。これが小乗である。所謂因果應報を説き、地獄極樂を説き、現世に於て、善行を積むことが、やがて來世に於て幸福を得る所以なることを説いたのである。

三、佛教の教典は夥しい數である。經律論の三藏を總稱して一切經と言ひ、七千餘の卷數がある。本書は佛典の精華を抜いたものであるが、主として經典から拔萃し、少しく律部を交へてゐる。論部は全く除いてある。

四、本書の内容は、上篇阿含(アゴン)部、中篇方等般若(ハウドウハンニヤ)部、下編法華(ホツケ)涅槃、華嚴(ケゴン)部に分けてある。上篇は所謂小乘(セウジョウ)で下篇は所謂大乘(ダイジョウ)中篇は兩中間に位するもの之中乘と稱してもよい。

五、阿含部の特色は、極めて、實際的な點にある。方等部は、教典の數最も多く、多説多岐で

雜駁の觀がある。般若部は、大般若教六百卷の如き最も大量な經典である。一切を空として解説を説く。阿含經の所説と表裏の相違がある。法華經、涅槃經、華嚴經は佛陀の教訓の眞髓である。以上の三篇は何れも其立脚地を異にし、従つて其の見地を異にするが、各々その長所を有し、之に高下の差をつける事は出来ない。

本書は、以上の配列により、佛陀の聖典中の珠玉を網羅してゐる。

尙、附篇として釋尊小傳、印度佛教史、支那佛教史、朝鮮佛教史、日本佛教史を載せてゐる。何れも簡潔な記述である。

## 六、基督に倣ひて

(摘要) 修養の部 トマス・ア・ケムピス原著 中山昌樹譯 新生堂發行 全一冊 四六列

布裝 四四四頁 大正九年十一月初版 定價二圓

(解説)

一、基督教の靈的體驗を記録した書物は、少くないが、その中でも、聖アウグスティヌスの、

「懺悔録」と、トマス・ア・ケムピスの「基督に倣ひて」の二書は、殊に光つてゐる。この二書は、古今を通じての信仰修養書の、双壁と云つてよい。前者は、血のしたゝる様な信仰的苦闘と、その勝利の告白であり、後者は、徹底した信仰生活の、眞面目な、そして慎まやかな記録である。原著者トマス・ア・ケムピスは、十四世紀の末頃、ライン大平原に生れた。母は、信仰篤い婦人であつた。彼は、聖アグネス山の、修道院で、孤獨と沈黙のうちに、七十年に亘る修道院生活を送つたが、彼の内心には、神に對し、キリストに對し、燃える様な愛が潜んでゐた。又神を通じて、人に對する愛が、燃えてゐた。この白熱的の愛が、慎まやかな言葉となつて、表はれたものが、本書である。アウギュスト・コムトといふ學者が、本書を指して、己が靈魂に對する、「營養と慰藉の主要な日用の糧」と言うたのを見ても、本書が如何に、人心の琴線に觸れて、強い感動をかき起したか、わかる。基督教界の大偉人ルウテルも、ウエスレイも、本書の愛讀者であり、又有名なゴルドン將軍は、陣中常に本書を携へて居たといふ。

二、本書は、第一篇「靈的生命を保つための教訓」、第二篇「内的生活の教訓」、第三篇「聖餐に就ての聖訓」、第四篇「内心の慰安」の四部から成る。第一篇の冒頭に、「われに従ふ者は、暗き

中を歩ますと、主は言ひたまへり。これ、キリストの言にして、われら若し、眞に光に照らされ且つすべて、心の蒙昧より、救ひ出されんと願はば、主の生涯と行爲とに、ならふべきものなることを、教へたるものなり」とあるは、本書の趣旨を概括してゐる。

三、第一篇から、第二篇と讀みゆくに従ひ、讀者は、自己の靈的生命の動きを、直感するであらう。殊に、第四篇に到ると、著者その人の、眞面目な信仰の態度に、直面して、自づと頭の下るのを、覺えるであらう。キリストが、信徒によびかけて、『魂のうちに、主の語りたまふを聴き、主の口より、慰安の言を受くる魂は、さいはひなり。神のさゝやきを迎へて、世のさゝやきに、心をとめざる耳はさいはひなり』と言つた言葉を味つて見る。最後に、我等の希望と信頼とを、凡べて神にのみ置くべきを説いて、『われ汝を離れて、何處に福ひなることありしや。われは汝を離れて富まんよりは、寧ろ汝の爲に、貧しかるべし……汝は我が希望なり。汝はわが信頼なり。』と著者の所信を赤裸々に、告白してゐる。

四、著者トマスは、十五世紀の人であつたから、本書の中に盛られた思想は、可なり今日から見ると、縁遠い感じがする。殊に、來世にのみ思をよせて、現世と、現世の事物を、輕視する

調子は、到底現代人の、背き難い點である。然し本書が、著者自身の生活の、ありのままの描寫であつて、著者の崇高な人格の反映である點が、萬人の心に觸れる只一の理由である。原文はラテン語であるが、各國語に翻譯されて、聖書につぎて廣く讀まれるのも、これが爲めである。本書一卷には必ずや、現代人を深く反省させる力が、こもつてゐると思ふ、文体は韻文散文の中間体であつて、銀鈴の響きがある。中山氏の譯文流石によく洗練されて、原文の面影をうつすに足る。卷末の註解は、本文中に現れた聖書の字句の出典を示すもので、又頗る便利である。

五、本書の邦譯で信頼すべきものは、別に、基督教書類會社出版、日高善一譯のものがある、(定價金二圓)。惜しむべきは、目下絶版同様で手に入れ難い。

## 七、全譯天路歷程

(摘要) 修養の部

ジョン・バンヤン原著

益本重雄譯

太陽堂發行

全一冊

四六判

模造布裝

五〇七頁

昭和四年十一月出版

定價二圓五〇錢

(解説)

一、清教徒と云つて、英國國教の制定儀式に満足せず、カルビン主義の信仰を主張した團體が活動した十七世紀の英國に、文學者として最も傑出した二人は、ミルトンとバンヤンであつた。同じ清教徒でも、ミルトンは、當時の最も高い教育を受けた人であつたが、之に反して、バンヤンは、貧乏で無教育な鑄物師であつた。この二人は、何れも、不朽の宗教的作品を残した。ミルトンは、舊約全書にある人間の祖先の墮落の歴史を材料として、ラテン語張りの壯重な、典麗な、語句を連ねて、失樂園の名詩を作つた。バンヤンは、單純な平易な英語で、基督者の一生を偶した宗教小説をものした。天路歷程がこれである。原名はブリグリムス・プログレスと稱し、巡禮の天界旅行の意味である。バンヤンは國教の規定に背いて、勝手に傳道したので獄舎に投ぜられ、十二年間牢獄生活を送つたが、天路歷程は、實に彼が在獄中の作品である。

二、本書は二篇より成る。第一篇は一六七八年の作である。第二篇は一六八四年の作である。『私がこの世の荒野を歩いてゆく時、私は、或る洞穴に出會つたので、眠らうと其處に横になつた。眠るにつれて一つの夢を見た。』と、この物語は初まる。彼は、基督者といふ男が、一冊

の書を手にしなから、背には、罪といふ大きな重荷を負つて、滅亡市から立去るのを見た。基督者の目的は二つあつた。一つは自分の一生の罪と、それから来る恐怖の重荷を取去る爲めと、もう一つは、罪を取去つてから聖都にゆきたいのであつた。傳道者といふ男に道を教へられ、近所の人や、友人や、妻子達の、ひきとめる袖をふりきつて進んだ。

三、この旅は、十場面から成つてゐる。基督者の艱難や、迫害が、生ける繪のやうに、描いてある。苦痛や、恐怖や、喜悅や、平和や、誘惑などの、あらゆる経験が、生き／＼とした人物の態度や談議の中に織込まれてゐる。自己満足な俗才氏が出て来る。意志の薄弱な柔弱者が出て来る。口数の多い饒舌者が出る。忠實な信仰者が出る。その他数多の人物が、皆各々その特色を表してゐる。落膽の沼がある。美の殿堂がある。ものすごい陰氣な谷がある。虚樂の市がある。疑惑城がある。歡樂の岡がある。深い河がある。この河を渡ると天國、基督者と、道づれの有望者は、聖都にたどりついた。さて、門が開いて、二人が入らうとする時、二人の後から見ると、都は日輪の如く照り、街には亦黄金が敷きつめられ、その上を、往來してゐる人達には頭に冠を戴き、手には棕櫚の葉や黄金の堅琴を携へて、讚美歌を歌つてゐた、二人が入ると

門がしめられた。

私も中へ入りたかつた。かくて私の夢はさめた。これが第一篇である

四、さて私はまた夢を見る。私が横になつてゐる側へ老人がやつてくる。その老人が私に物語つた。滅亡市に残つた基督者の妻も、四人の子供達も、天の使ひの命令で、夫を戀ひ、父を戀つて、巡禮の旅に出た。

哀憐女が同行した。一行は楽しい旅路を續けた。女子供づれを犯さうとする悪黨も、大勇者の守りで無難。老練者の加入で、いよ／＼一行は力強い。謙遜の谷も無事、正直翁の力添へ、迷はしの地も通り過ぎ、色々面白い物語は、一行の歩みをはかどらせる。讀者の心はぐん／＼ひきつけられる。一行は深い河を渡つて天の音楽響く聖都へ着いた。物語はこゝで終る。これが第二篇である。

五、著者バンヤンは、無學者であつた。彼が最も愛讀した書物は、一卷の聖書であつた。今日から見ると、文章は古いが、當時としては、英譯聖書位平易で、通俗な書物はなかつた。彼はむづかしい本は讀めなかつた。彼は聖書一卷を精讀し耽讀した。

その結果聖書の精神は、彼の著作に横溢してゐる。文章は極めて單純で、記述の方式は拙であるが、基督の生命は、全卷に躍動してゐる。貧賤から身を起して、大統領となつたアブラハム・リンカンは、教育の低い點に於て、パンヤンと好一對であつた。リンカンの愛讀の書は、聖書と天路歷程であつた。そのリンカンが、最も基督の精神を發揮した偉人になつたことを思ふと、人を動かす力は、文字の末でないことがわかる。

六、天路歷程とは、支那譯から取つた名であるさうだ。邦譯としては、池享吉氏が、明治三十七年に前篇を、同四十一年に後篇を、出されたものが優れてゐる。但しこれは、全譯でない。全譯は、大正三年に松本雲舟氏の譯出したものと、本書とがある。松本氏のは、文章が流暢で読みよい。本書の譯者益本氏は、原文のゴツ／＼した文章を、そのまゝ表現しようと試みた。原文の特有の香をつけたいと苦心した跡を、認めることが出来る。

## 八、國民性十論

(摘要) 修養の部 芳賀矢一著 富山房發行 全一冊 四六判 紙裝 二五九頁 明治四

十年十二月初版 定價一圓八〇錢

(解説)

一、人には、皆夫々風貌や性質に特色があるが、民族にも亦、毛髪や皮膚の色に相違がある。英吉利民族には、英吉利民族の特色があり、佛蘭西國民には、佛蘭西國民の特色がある。我が日本民族には、亦日本民族の特色がある。勿論、我等は、他民族の特質を研究して、採長補短の實を上げねばならぬが、それよりも先づ、祖國々民性の特色を知つて、自尊心自負心を高かめねばならぬ。

さて、國民の性質は、その國の文化に影響し、政體、法律、言語、文學、藝術、風俗習慣等に、特色を現はすものであるが、又逆に、政體や法律や、言語や文學藝術や、風俗習慣等の文化の要素は、その國民の性質を形造る。しかも、民族の文化は、獨立して純粹に發達することはなく、必ず他の民族の文化と融合して發達するものである。

二、我が國は、早くから、支那の文化を受け、又支那を通じて、印度の文化を受けた。しかも今日の東洋諸國は、皆萎靡不振はないのに、獨り我が國ばかりは、世界列強國の一として世界の

大舞臺に雄飛してゐる。輒近、西洋文明輸入の効果も、亦著しく、本邦人の思想、感情の上に影響を及ぼしてゐる。さて、我が國の文化は、どんな風に、支那印度西洋の文化を消化したかそして、独自の文化を發展させたか。我等は、過去を知つて、將來を熟慮せねばならぬ。こゝに、國民性研究の必要がある。

三、本書の著者芳賀博士は、國文學の大家であつて、泰西の文藝にも通じてゐた。國文學史十講を始め、數多の著書があつて、該博な知識、豊富な思想を、輕妙な筆で表現された。本書は博士の名著であるばかりでなく、明治年間に於ける名著の一である。著者は、我國民性の特色として 一、忠君愛國 二、祖先崇拜 三、現世的實際的 四、草木愛、自然愛 五、樂天洒落 六、淡白瀟灑 七、纖麗纖巧 八、清淨潔白 九、禮節作法 十、溫和寬恕の十點を挙げ、豊富な實例と、趣味あふるゝ筆致とを以て、我國民性の美點を縱横に書き現してゐる。

國民性を論究した書物は、この他にも二、三あつて、相當浩瀚のものもあるが、何れも本書以後の出版で、本書の所説を基礎としてゐる。

## 九、昭和一新論

(摘要) 修養の部 徳富猪一郎著 民友社發行 全一冊 菊判 紙裝 一四四頁 卷頭八頁 卷末七頁 昭和二年二月初版 定價六〇錢

### (解説)

一、昭和の劈頭、皇室中心論者徳富蘇峰先生が、憂國の至情から、社會各方面に對して、言はんとする所を、極めて率直に、赤裸々に開陳した熱血の文字が、本書である。

二、著者は先づ、内外の形勢から大觀して、昭和の時代が我が帝國にとつて、容易ならざる時代であると斷言した。即ち、外には、列國が虎視してゐて、未だ百年の平和を期し難く、内には、民心不安、動もすれば惡化の弊が見える。

この時代をして、眞に昭和たらしむるには、偏に我が君臣の、同心合力に依らねばならぬと達觀した。

三、著者は言う、明治時代の大業の成就是、畢竟、明治天皇の盛徳に由來する。而して大正時代は明治時代に取得した一切を、實際に應用する時代であつた。然し、時恰も世界大戰に際會



した。此の間に處して、我が國は内治に、外交に、産業に、何れも香ばしい成果を收め得なかつた。その上、世界の大勢、四圍の情況の影響を受けて、經濟國難、思想國難の時代を招來した。帝國の現状は、内外にかけて、全く八方ふさがりである。我等は、此の情態を突破して、新局面を現出し、眞の昭和時代を實現すべき使命を有する。然し、これは決して、容易の業ではない。我が君民は、眞に一大覺悟を要する時代に際會した。

四、著者は、更に進んで、我が帝國の理想に論及し、文化的人道主義を以て、世界を統一し、世界の平和を確保するを以て、我國民の大使命とした。而して、昭和の文字は、實に此の理想のすべてを包有してゐる。

この大理想を實現して、昭和の國家を來らしめ、昭和の世界を來らしめんとせば、畏くも上に、聖天子明治大帝の遺烈に則り給ひて、身を以て國民を率ゐ給ひ、下に、忠良剛健な國民大御心に感激して、奉公の誠を表し奉るの外はないと、切言した。

五、著者は、皇族の御方々の、奉仕の大精神の御發揮を仰望し奉り、更に皇室の藩屏と稱せられた華族の猛省を促し、富豪の利己的態度を戒め、一般民衆の三大疾患たる、怠業氣分、依頼

心、雷同性を撲滅せよと警告した。

六、著者は又、明治時代統一制の餘弊として、社會百般が畫一、單調、無味、無色に陥せんとする傾向を指摘し、形式過重の惡傾向を戒め、物質精神兩方面の地方分權を唱へ、自由、自治の眞精神、奉仕の大精神の發揮を促してゐる。最後に、世間でやかましく言うてゐる人口問題や、食糧問題は、餘り心配に及ばぬと喝破してゐる。

七、著者は、本書二十五篇の文章を僅かに十一日間で書き上げたとは、驚くべき精力である。尙著者は、卷末に、「再讀して見ると言句が餘りに露骨である」と書いたが、我等も亦然か觀ずる。然しこれは、著者の愛國の熱誠の然らしむるところで、敢てとがむべきではあるまい。本書が刊行されてから、はや三年有餘になるが、帝國內外の情勢は、國民一同が、一層發奮を要するものがある。畏くも、聖上陛下には、日夜國事に精勵し給ひ、以て範を國民に垂れ給ひ、皇族の御方は、學つて奉仕の大精神を發揮し給ふにも拘らず、一般民衆の自覺が足りないのは遺憾の極みである。

八、尙著者は、本書の姉妹篇ともいふべき先著國民小訓（民友社出版、大正十四年一月初版、

菊判、二四〇頁、定價八十錢)を、併せ讀まれんことを希望してゐる。

九、一家の見識を以て、現代の弊を假借なく論評することにかけて、蘇峰先生と並ぶ人士に、大谷光瑞氏がある。同氏の著、帝國の前途(大乘社出版、昭和四年七月初版、菊判、一四一頁、定價六〇錢)を本書と併せ讀めば興味が深い。

大谷氏を以て蘇峰先生に比するに、創見に於ては一層の深みである。然し又、それだけ獨斷的であるを免れない。

## 一〇、一事貫行

(摘要) 修養の部 山下信義著 新政社發行 全一冊 四六判 紙裝 一八六頁

序文八頁 後章八頁 昭和三年九月改版 定價六〇錢

(解説)

一、芳賀博士著、「國民性十論」の解説で、紹介した通り、日本國民は、隨分長所の多い國民である。よく理解し、よく感激し、よく模倣し、よく同化し、又よく創案工夫する國民である。

然し又、かゝる長所の反面には、缺點も少くない。輕率で、上スベリで、依頼心が強く、經濟觀念に乏しく、狂熱的ではあるが、厭き性で、氣短かで、又負け嫌ひではあるが、姑息で、引込思案の所がある。殊に我等が、大に反省を要する一事は、持久力の缺乏、即ち粘着力の不足である。何をしても、花火的一時的で永續的でない。所謂、「三日坊主」であつて、折角發心しても、直ぐ止めてしまふ。此の點に於て我國民は、酒に類して餅に類せず、馬に似て牛の堅實味を缺いてゐる。

二、要するに、我國民性の最大缺陷は、意志の弱い點にある。所謂貫き徹す力が足らぬのである。石の上にも三年の辛抱が出來ぬのである。此の缺陷を改めるには、一事に全精力を集注して、あくまで頑張り通す力、即ち貫行力を養ふより外はない。我等は皆、一大決心を以て、この缺陷の矯正、即ち自己改造の一大事業にとり掛らねばならぬ。著者はその順序として、敢行に始め、慣行となるまで、全力をこめて、一事を貫行せよと主張してゐる。

三、一事を貫く意志の力は、萬事を貫く意志の力である。此の意志の養成は青年期を第一とする。各自は、善行の實踐なり、惡習慣の打破なり、自己の最も必要と感ずる一事を選んで、今

日より直に着手し、常作的に、永續的に、萬難を排して猛進、しその實行を期すべきであると、著者は熱誠に唱へて居る。尙、その實際方法として、同志が誓約して奨励すること、一事貫行星取表を用ひて、成績を反省することを示してゐる。

四、本書は、以上の所説に併せて、古今模範貫行者十五例を擧げてゐるが、その中には、青の洞門を開鑿した禪海和尚の美談も加へてある。

五、著者山下信義氏は、十餘年一日の如く、一事貫行主義を唱道し、自ら率先して、實踐躬行して居る熱誠の士である。大正七年九月、興文社から、舊版一事貫行の初版を出版して、その主義を詳論したが、關東震災後、絶版となつた。その後、同書の眞髓を約説したものが本書である。紙装二〇〇頁の一小冊子であるが、一言二句悉く、愛國の至情より出る熱血の文字である。青年期にある男女の、必讀すべき好著として推奨する。

## 一一、竹崎順子

(摘要) 修養の部 徳富健一郎著 福永書店發行 全一冊 四六判 布裝 八六五頁

附録順子の歌を合せて八九六頁 大正十二年四月初版 定價四圓五〇錢

### (解説)

一、竹崎順子は、文政八年肥後上益城郡津森村大字杉堂(熊本市東方四里)に生れた。父は矢島直明、母は三村鶴子、共に地方名門の出で、修養の積んだ立派な人物であつた。

順子には二人の姉と、二人の兄と、四人の妹があつて、順子は九人の同胞の眞中であつた。この一家は、實に、優性の好適例を示すものであつた。九人の子女中五人まで傑出した人物であつた。兄の源助(直方)は、横井小楠門下の秀才であつた。順子は本書の主人公である。妹の久子は、徳富一敬の妻、蘇峰、蘆花の母として、賢母良妻の實例を示した。次のつせ子は、横井小楠夫人として、内助の功を立て、その次の妹かつ子(すぎ子)は、最も社會的に活動した婦人で、又最も長命を保つた。ワシントン軍縮會議當時、八十幾歳の高齡で、世界の平和の爲め人道の爲めに、日本婦人を代表して、はるく米國に渡航し、大統領クリッヂを驚かせた女傑であつた。

二、この四人姉妹のうち、長年の順子は、體格が剛健で、氣立も素直で、母の片腕となつて、

よく妹達の世話をした。一番お轉變なのは、次の久子で、姉の順子を手古すらせ、いつも同胞喧嘩の張本人であつた。次のつせ子が一番伶俐で、病身ではあつたが、過ぎる程氣が利き、氣分の悪い時など、両親を心配させまいと、わざと厚化粧して父母の前に出た。一番おちつきのあるのが末のかつ子で、姉達がつてこ舞をしてゐる中に、悠々と髪を結ふて居たとのこと。たしなめる姉達を却てやり込めるので憎まれ者であつた。四人は何れも少女時代のこの特性を後年遺憾なく發揮したのである。

三、順子は十六才で、玉名郡伊倉町の名家木下家の二男律次郎(後年茶堂と改む)に嫁した。律次郎は、同地の豪家高崎家を繼いだ。新郎新婦は至極幸福であつた。十六の花嫁は、十三も年上の夫を、夫として、師として敬愛した。素直で快活な順子は、竹崎の家に、年経たヌシのやうに眼を光らす白髪のお須美婆さんから、數多い下男下女まで、すべての人を満足させた。お婆さんは翌年安らかに死んだ。夫の律次郎は元來山氣のある、小才の利く人であつた。順子が嫁ぐ前々年に、火災で邸宅が丸焼けになつたが、律次郎は此の損失を、一氣に取戻さうとて、酒造業を始めた。相場にも手を出した。結局すつかり失敗して、家屋敷も、酒倉も、田地も、

順子が嫁入の時、持参した一切の物まで、債權者の手に渡した。これから受難の生活が始まつた。主人は無断で家出をしたきり、一時行衛がわからなかつた。敗慘の律次郎は、大阪で一旗掲げようと志したが、結局これは思ひ止つて、二年振りに妻の許に歸つてきた。

四、夫婦は阿蘇郡山西村字布田に移住して、新生涯に入つた。粟飯を食つて、眞黒になつて開墾や、植林に従事した。それから間もなく、兄源助の勧めで、律次郎は始めて、熊本で横井小楠先生に會見し、直ぐにその弟子になつた。この會見は、律次郎の生涯に、一轉機を與へたものであつた。彼は全く山氣を棄て、直面目に修養した。熊本の横井先生の宅で會讀のある日は律次郎は布田から五里の道を、熊本に通つた。會讀は月に三回あつた。その日には順子は、夜が明けぬ内に起きて、食事を調べ、何くれと心つかひして、イソ／＼と夫を送り出した。夫が夜の更けるまで讀書する傍に、順子は足袋のつくろひをしてゐた。開墾の餘暇に夫は、近隣の子供に、手習を教へたが、順子も加勢した。布田の勤勞生活は、随分ときつかつた。でも順子は裏の山から薪木を取り、下の井から水桶を擔ひ上げた。夫に本當の修養をさせる爲めには身體の苦勞など何とも思はず、毎日楽しく働いた。

五、布田の勤勞生活は、十七年間続いた。夫婦が汗水たらして稼ぎ出した開墾の田畑を始め、家屋敷、家塾、その他一切の物をあけて、竹崎家の養子に譲り與へた。それで、律次郎が事業の失敗で、養家の財産を蕩なしにした過去の罪滅しとしたのである。これから夫婦は、伊倉の近くの横島に轉住して、農場の經營をした。新たに竹島家を興す意氣込みで勤勞生活を始めた。新しい農具を用ひ、新しい試みを盛にやつた。小楠先生の實學の精神を、實地に活用したのである。その間に時代は變つた。天下の形勢は急轉直下し、王政復古となつた。小楠先生を中心とした實學派が勢力を得た。夫は熊本藩の官吏となつて、藩政改革に當つたが、由來夫は人と協力して仕事をやることの出来ぬ性であつたので、その後官を辭して、日新堂と云ふ家塾を開いて、教育に従事した。この塾からは、數多知名の人士を出したが、その後塾が不振になつたので、斷然閉鎖して市外高野邊田に退隱して、餘生を送つた。

六、夫が六十六歳で他界してから、その志を繼いで教育者として立つたのが順子であつた。かやうにして熊本女學校を創立した。そして十八年間の永い間その經營に苦勞した。順子は明治三十八年三月八十一歳で安らかな死についた。二十八年前夫が最後の息を引き取つた高野邊田

の家で。

七、竹崎茶堂の後には、影の形に添ふやうに、順子がつき添つてゐた。順子は、その名の示す通り、温順な婦人であつた。小才子で終る性格の夫をして、堅忍持久させ、教育家として、又産業改進黨として、相當の働きをさせたのは實に順子のやさしい氣立と、ねばり強い力とであつた。夫が貫行し得なかつた育英の壮志を大成させたのは、順子の人格の力に外ならなかつた。八、著者徳富健二郎氏は、順子の甥である。彼は日本婦人の典型として最も深い愛敬の情を順子にさゝけた。あの男まさりの矢島樹子さへ、姉の順子をば『私の一生中最も感心した婦人です』と讚美した。

## 一一一 母

(摘要) 修養の部 鶴見祐輔著 大日本雄辯社發行 全一冊 四六判 布裝 五五〇頁

卷頭二二頁 昭和四年六月初版 定價二圓

(解説)

一、昨年の六月初版刊行以來、重版又重版、未だ一ケ年にもならないのに、既に數十版を賣盡して、昭和讀書界の人氣を獨占した觀があるのは、本書である。

二、著者の狙ひ所は、日本婦人の絶大な母性愛を描き出すにあつた。著者はかう言つて居る。世界に國は多いが、日本婦人程心情の美しい女性はない。凡そ一切の偉大なものは、悲しみと苦しみのうちから生れ出るが、日本女性の精神美は、永い間苦しみぬき、なやみぬいた結果である。二千五百年來の涙の結晶である。

三、我等が、この世に生を受けた以上は、誰一人このまゝ死んで行きたくない、何かの足跡を残してゆきたい。その一番大きい痕跡は、ある個人の胸に、自分の人格を刻み込んで死んでゆくといふことだ。烙印のやうに、自分の姿を人の胸に焼きつけて死ぬことだ。

この人格的烙印の最も深いものが、母が子の胸中に焼きつける烙印である。母が子を思ふ情操には、利害も虚榮もない。純情な愛そのものである。母性愛あるのみである。

四、日本の女性には、色々の缺點がある。これは、日本婦人が自ら矯正してゆかなければならぬ。しかし同時に、日本の女性は決して失つてはならない多くの、美しい、清いものを持つてゐる。その雌きの一つは母性愛である。清く、正しく、賢く、而して強く、優しい母としての日本の女性が、これ迄の日本を作つた力だ。さうして又、これからの日本を新しく創造する力である。

五、著者は、以上の見地から、理想的の日本婦人大河朝子を書いた。熱海の木細工屋の娘に生れた朝子は、奇しき運命で、銀行家大河澄男と結婚した。新家庭には、玉のやうな子供も恵まれた。然し詩人肌で、派手好きの澄男は、内気で地味な朝子から段々と離れた。結婚後六年目に、二番目の子供が生れて、朝子は二人の子供の世話に追はれて、自然朝夕の身支度を、怠り勝ちになつてくると、澄男の眼には、彼女の缺點が次第に見えてきた。貧しい家庭に生ひ立つた朝子には、ともしれば、さびしい影がつきまとつた。折角賑やかな氣分で外から歸つてきても、内氣な朝子は笑顔を忘れることがあつた。

六、殊に澄男の不満に感じたことは、低い教育しか受けない朝子が、外國の文藝を理解せず、澄男のユトモア(上品な滑稽味)がわからないことであつた。澄男は外國留學の間に、英吉利民

族の文化にふれて、その民族獨特なユーモアを多量に持つてゐた。ユーモアの眞味のわからぬ朝子は、時として夫の言葉を皮肉と間違へて、沈んだり、冷笑かされたかと思つて、怒つたりした。それが又澄男には、堪らなく淋しかつた。家庭に不満を感じる男子の足の向く所は、きまつてゐる。歸宅が遅くなる、家を外にする。此の間に朝子に對しても色々の誘惑があつた。夫婦の性格の矛盾の爲めに、悲劇を生まんとした。けれども、零落のうちに生び立つた朝子には、人の心の表裏を読む鋭敏な直覺力があつた。彼女の内面には、驚くべき辛抱強い執着力が潜んでゐた。朝子は悲みぬいた。反省した。そして、賢明な彼女は、自分の缺陷に氣がついた。子供の時から、何不足なく暮して、人生を徹頭徹尾明るいもの、軽いものと解してゐた澄男は、一見豪放な男であるが、堅實味がなかつた。無やみに人を信じ、それからそれと氣が移つた稚氣滿々の駄々つ兒なのだ。朝子は此處に氣がついた。朝子は、二人の子供の母であるだけでは、濟まなかつたのだ。夫に對して、偉大な母性愛を振起せねばならなかつたのだ。『早くお母様にお別れになつた澄男さん、その澄男さんの爲めに、本當のお母さまになるのが、私がつとめであつたのだ』

七、朝子はすつかり心を入れかへた。夫は改心した。夫婦の愛は復活した。三番目の子供が生まれた。けれども、困難はつぎ／＼と襲來した。事業に失敗した澄男は、朝子と三人の愛兒とを残して死んだ。

零落、生活難、教育難、商賣の盛衰、朝子はなやみぬいた。生計がやつと安定して、子供等の將來に光明が輝やきそめた時、朝子は病床に臥した。三人の子供に守られながら、絶大の讚美と感謝と哀惜の情を受けながら、三十三歳を一期として永い眠についた。

朝子の一生は涙の一生であつた。苦惱の一生であつた。して又勝利の一生、歡喜の一生であつた。尊い深い母生愛の一生であつた。

八、以上は母の梗概である。着想、技巧、筆致何れの點から見ても、稚氣を脱しない本書に對して、文藝的價値を求むるは酷である。本書の生命は、理想の日本婦人の、生き／＼した表現そのものにある。

### 一三、母の爲めの教育學

(摘要) 教育の部 小原國芳著 玉川學園出版部發行 全一冊 四六判 布裝 上卷三〇七頁  
 下卷三三六頁合本 大正十四年七月初版 昭和五年二月改版 改正定價二圓五〇錢

(解説)

一、教育の仕事は、家庭と學校と社會の三つの力を協はせねばならぬが、中にも家庭は、教育の源である。父親の力も大事だが、しかも、母親の力は、最も偉大なものである。偉らい母親の子供は、必らず偉いとは限らぬが、少くとも、偉人の母は偉人である。父親の力も、勿論偉大であるが子供のよしあしは、多く母親と並行してゐる。著者はこの見地から出發して、教育者として、母の責任の、重大であることを説き、『母になることは易いが、母たることはホントに難い。母たる責任、母たる義務を果すためには、色々の準備が必要である。その準備なしには、母となる資格がない』と言つてゐる。

二、かくて著者は、結婚前の教育を説き、結婚の第一條件を愛としてゐる。坊やから、まだ見ぬお父様とお母様へ、と題する手紙の初に『純潔な愛の上に立つて結婚して下さい。』と云うが

愛の公式です。お母様はお父様に、お父様はお母様に、自己の全部をさへけて下さい。』と叫ばせてゐる。それから、胎教の必要と事實を認め、妊婦をいたはることは、家族一同のつとめであることを、主張してゐる。『健やかな身体を下さいね。わるい遺傳や、低能の頭を頂くやうじや生んで下さらぬ方が餘程幸福です。』坊やはまだ見ぬ兩親に對し、こんな要求をしてゐる。

三、それから、教育の理想論に移り、片輪だらけの従來の教育を批判し、人生の絶對理想である眞善美聖の四價值と、健と富との手段價值と、合せて六方面の教育を主張してゐる。これが著者の所謂全人教育である。著者はこの順序で、先づ、眞の教育を説き、知育の材料として、傑れたものを豊富に與へよと唱へてゐる著者が現に關係してゐる小學校では、各教室に、少くとも百冊の本を用意してゐると、言つてゐる。『學級には學級文庫、學校には兒童圖書館、家庭には家庭文庫、町村には町村圖書館を作つて頂きたい。何等、魂の糧、勉學の材料を與へずに、勉強しろとは無理な注文である。……但し、圖書館や、文庫を作る時、本の選擇にはウント注意して頂きたい。日本の本の七八割は、有害な本だと思つて下さらば間違ない。』そして、圖書の種類としては、



イ、童話、傳説、神話  
 ロ、童謡、詩歌

ハ、外國文學の傑作(兒童化したる)

ニ、國文學の傑作

ホ、歴史物語、偉人の傳説、戰爭文學

ヘ、地理、旅行記、地圖、地球儀

ト、趣味ある博物、化學、物理、科學者の傳記

チ、科學工藝—現代文明に關する寫眞

リ、音樂、美術(繪畫、彫刻、建築)に關する手引、肖像寫眞、畫(集)

ヌ、兒童化する經典物語、宗教上の偉人の傳記、宗教文學

ル、辭書類、言海や辭林をはじめ各種の辭典を擧げてゐるがこれは確かに卓見であると思ふ

四、以上を以て上巻を終り、下巻には、善の教育、美の教育、聖の教育、健の教育、富の教育

及び學校論を收めてゐる。最後に、著者は世の母に對しその子供を、清い、貴い、正しい愛の

中に、賢く、強く、大きく育てんことを希望してゐる。

五、由來、教育の本といへば、固苦しい、乾燥無味のものが多いが、本書はまことにわかり易くて、多趣味で、そして全卷到る所、新しみを見出す。著者小原氏は、東京玉川學園で、新しい教育に従事してゐるが、本書に現れた新主張は、すべて著者獨特の創見と、體驗に基くものである。

六、本書には、巻頭のみレー筆「歩みそめ」を始め教育にちなんだ名畫の、寫版十葉をはさんである。又各項目毎に、よい參考書を數多く擧げてあるから、對照上實に便利である。又表紙に掲げたベスタロッターの「搖籃を動かすものは、世界を動かす」を始め、幾多先哲の教育に關する金言を、挿入してあるのも嬉しい。

## 一四、兒童心理

(摘要) 教育の部 上野陽一著 婦女界社發行 全一冊 四六頁 布裝 二二〇頁

大正十二年十一月初版 定價一圓二〇錢

(解説)

一、子供をよく育てるに、最も大切なものは、愛であるといふことは、勿論である。さて、その愛が合理的なものでないと、子供の爲めにならぬ。本邦の母親が、美しい母性愛に富んでゐることは、普く世界に認められてゐるが、さて、母親達が、果してその愛情を、科學的の立場に立つて、合理的に、發揮してゐるであらうか。果して、子供の心をよく理解して、最も子供に適當した愛をしてゐるのであらうか。母親の勤めとして、先づ第一に、子供の心理をよく知らねばならぬ。

二、母親の中には、子供は大人の小さいものであると、考へてゐる者が、相當に多い。それで子供を扱ふには、大体大人と同じ様でよいと、考へ勝ちになる。勢、ませた行儀作法を強いたり、過大な要求をしたりする。母親たる者は、先づ子供の身體の發育や、精神の發達の實際をよく心得て、それに順應した指導をせねばならぬ。

三、子供は五六歳位になると、いろ／＼の疑問が起る。それは、兒童の心に知識慾が、きざしてきた爲めである。その疑問を、母親は、如何に處置したらよいか。この場合、母親の答は、

兒童の心に、先入主となるから、餘程氣をつけねばならぬ。若し誤つた答をすると、後でこれを直すのに容易でない。多くの母親は、目前の仕事にばかり、氣をとられて、自然子供の質問を、うるさがつて、體よく之を撃退してしまふ。それでは、折角きざした知識の芽がしぼんでしまふ。

四、今與へたばかりの玩具を、子供はすぐこわしてしまふことがある。これは子供が、その玩具のからくりを知りたいので、又は、自分の手で、組立て直して見たいので、自然こわしたのである。母親の多くはこの場合子供を叱かつてしまふ。そして知らず／＼の間に、子供の心にきざした工夫創造の慾望の芽を、つんでしまふ。

五、五六才の子供は、平氣でうそを言ふ。子供には自分の経験と、空想との、別がない。だから聞いたことや、自分の頭に浮んだことを、直ぐ自分の経験にしてしまひがちである。學校の歸途、野原を通ると、向ふから他の學校の先生が来る。洋服や帽子が似てゐる所から、すぐあれは他校に轉任した〇〇先生だと早合點する。近寄つて見ると、全く別人であるが、そんな事には一切かまはず、〇〇先生にしてしまひ、その先生が、言葉をかけたり、お菓子を呉れたり

したことに想ひ込む。歸宅すると、今日は途中で、〇〇先生に會つて、お菓子を頂いたなどと平氣でうそを言ふ。さて母親はこれを如何にあつかつたらよいか。

六、要するに、児童心理の心得のない婦人は、母親たる資格がないのである。児童心理を書いた本は、澤山あるが、本書は誠に、平易な明快な文章で、よくわかる。著者上野陽一氏は、知名の心理學者で、多くの著書がある。本書は、母親の爲めに、子供の心理の概要を、思ひきつてわかり易く書いたものである。本書は、第一章 児童心理の起つた由來、第二章 何故児童研究は必要か、第三章 子供の身体の發達について、第四章 子供の心、第五章 良い習慣をつけるには、第六章 異常兒、の順序で、手際よく児童心理の一般をまとめてゐる。子供の身体の發達の條には、各種の遺傳説を、簡明に紹介してある。又、本書の主要部ともいふべき、子供の心の部には、子供の讀物について、童話、童謡及び理科一般に亘つて、良い書物を紹介してゐるが、これ等は、本書の特色である。尙、本書は、母の友叢書の第四編であるが、本叢書はすべて、ポイントの新活字を用ひ、漢字は略字を多く用ひてゐるが、これも新しい試みである。

## 一五、玩具の選び方と與へ方

(摘要) 教育の部 東京市社會教育課編 實業之日本社發行 全一冊 四六判 布裝 二〇四頁  
大正十五年三月出版 定價一圓五〇錢

(解説)

一、おもちゃといふ言葉は、大人の世界では、極めて軽い意味に使はれる。おもちゃの様だといへば、つまらぬものを指し、人をおもちゃにするといへば、侮辱の意味になる。けれども、子供の世界では、玩具ぐらい重要なものはない。子供にとつて、玩具が、如何に眞面目で、嚴肅なものであるかは、子供が、玩具を持つて遊んでゐるところを見ればわかる。子供は、決して大人の所謂たはむれの心持ちで、玩具を弄んではゐない。子供は、全我をそれに没入して居る。子供にとりては、玩具こそは、生活の糧で、身心の發達土、缺くことの出来ない貴重な教科書であり、理科實驗機械であり、又美術品である。これで、子供の注意力や、推理力や、創造力や、忍耐力や、審美感情が養はれゆく。

二、それ程玩具は、大切なものであるのに、世の母親の多くは、玩具の選び方や、與へ方につ

いて、随分無關心である。選び方について、先づ考へるべきことは、子供の年齢や、性質や、男女の別に、よく適應してゐるか否かと、いふことである。又、季節によつて、適當のものを考へねばならぬ。又、都會の子供に與へるものと、田舎の子供に與へるものと、自ら相違がなくはならぬ。又子供の心身の發育に應じて、子供が自力で、組立てたりする様に考案したものを、與へねばならぬ。出來上つた玩具を、與へるよりも、寧ろ、製作用具と、材料とを與へて、自由に創造させる様に、導かねばならぬ。それから、衛生上の立場からも考へねばならぬし、又經濟上の立場からも考へねばならぬ。

三、獨逸に留學した我が陸軍の某將校が、下宿屋の細君の好意に報いる爲めに、その家の子供に玩具を買つてやつて、細君からどなりつけられて、危うく下宿を斷はられる程の失敗を演じたといふ話がある。獨逸では、子供の玩具を選択することは、母親の重大な責任である。他人が勝手に、玩具を與へることは、その家の家庭教育を、破壊することになる。子供は、新奇な玩具を好むから、新しいものを無闇に與へると、子供の浮薄性を醸すことになる。玩具が壊れると、子供自身に修理させ、修理が出來なくなると、之を分解させて、その材料で、別な玩具

を作らせる。この様に一定の計畫を立て、やつてゐるのに、横合から邪魔をされたから、獨逸の母親が、眞赤になつて怒りたてたのは、無理がない。我邦の母親にも、これ位の見識があつて欲しい。

四、本書は、先年、東京市社會教育課が、玩具選定の見識を高かめる爲めに開催した玩具展覽會の附帶事業として、出版したもので、玩具に對する斯道大家の理論と、一般から募集した實際上の經驗とを、輯めてゐる。理論の方面では、倉橋惣三氏、高嶋平三郎氏、關寛之氏等知名の學者の意見を收め、實際方面では、世の愛子家達の、貴重な經驗談十二篇を、收めてゐる。尙、子供と、玩具を歌つた狂歌、俳句、詩など八篇を載せてゐる。附録として卷末に掲げた、關寛之氏の『玩具のしるべ』は、一般家庭の爲めにとて、玩具に關する注意を、簡約したもので、要領を得てゐる。要するに本書は、諸家の玩具に關する雑多な意見や、經驗を集めたもので、元より、系統的にまとめた記述ではない。世の母親が本書中に提供された諸材料を精讀し、考案を練り、夫れに基いて我家の兒童教育に適應した計畫を、立てられたなら、子供達の將來は誠に仕合せである。

## 一六、改譯エミール

(摘要) 教育の部 ルツソウ原著 三浦關造譯 誠文堂發行 全一冊 四六判 模造布裝  
四九四頁 大正十三年五月初版 定價二圓八〇錢(中價提供中)

(解説)

一、本書の著者ルツソウは、十八世紀の初スイツルに生れた。元來彼は、文學者肌の人で、哲人でもなければ、又、教育學者でもなかつた。彼は、自然を以て理想とした。當時の教育が宗教を根柢として、人爲的機械的であるのに對抗して、新教育主義を唱へた。所謂「自然に還れ」とは、彼の叫聲であつた。本書は彼の主張を、遺憾なく表現したもので、教育小説と云つてもよい。

二、本書の巻頭に、彼は、かう言つて居る。「創造者の手によつてつくられる時、すべて物は立派だが、さてそれが、人の手に渡されると、飛んでもない醜惡なものになる」と、けだし人は、自然に善美な本性を有するから、教育の手段は、これを害はず、自然にこれを助長し、發達させるものでなくてはならない。教授に於ても、訓育に於ても、自然のまゝであれと唱へ、

兒童の本性に立脚して、實物教授を施し、且つ情意の發達を自然的ならしめよと主張した。これが全卷を一貫する彼の教育思想である。

三、エミールとは、彼の理想の人物の名である。第一篇幼時期は、誕生から五歳までの教育である。エミールは、清新な草原の曠がつてゐる田舎で育てられる。冷水浴、素足、無帽、すべて自然のまゝに扱はれる。一人の師父が、エミールの自然的發達を助ける。

四、第二篇は、五歳から十二歳まで、エミールの感覺を働かせて、外物を知らせる。だが決して不慮なむづかしいことはさせない。此間に、確實なものをつかませる。まだ想像力は働かない、物をありのまゝに見る。何をするにも、機敏で快活で、年にふさはしい活力にみなぎつてゐる。

五、第三篇は十二歳から十五歳まで、智育時代である。

エミールは、自然の研究に、知覺や推理力を向け、幾何學や天文學や地理を學ぶ。書物から學ぶのではなく、實地の觀察から、自力で學ぶのである、概括力がつく。想像力も働くが、危険に走らない。體力、個人道德共に自然に發達し、社會の惡風にふれず幸福な生活をする。

六、第四篇は、十五歳から二十歳まで、歴史を學び、宗教を知り、社會を理解し、同情心の發達を見る。此時期に、理想の婦人ソフキーに會ひ婚約を結ぶ。第五篇は、エミールの配偶者たるソフキーの生ひ立ちから、成人に至るまでの教育を説く。ソフキーは、溫和善良で情の濃いとやかな娘で、エミールと等しく、自己の理性の承認する神を信仰する。清らかで、快活な生活を送り、夫の相談相手として信頼され、又夫の慰藉者として、充分な美質を保有する。蓋しルツソウの女子教育論は、ソフキーに表はれてゐる。

七、教育學說として『エミール』を批評するなら、隨分矛盾が多い。當時の教育が、人間の本性を無視した人爲的のものであり、當時の社會が腐敗して、純潔清新味を缺いてゐたことを思へば、自由主義を振りかざして起つたルツソウの主張は、堂々たるものであつた。果然、彼の新思想は、教育界に革新をまき起した。彼は『エミール』を公にした同年、『社會民約論』をも公にして、政治上の自由平等説を唱へたが、やがてこれが佛蘭西大革命の導火線となつたと言はれてゐる。

この二書の爲め、彼は迫害を受けて、パリを追はれ、流浪の身となつて、不偶の中に世を去つ

た。然し彼の主張は後代の教育學者に依りて實施され、改善され、多くの新學說、新主張を生むに至つた。

(類書) 邦譯としては本書の外に、改造文庫内山賢次氏譯エミールがある。小形本、二冊、定價八十錢

## 一七、愛の學校

(摘要) 教育の部 エドモンド・デア・アミーチス原著 三浦修善譯 誠文堂發行 全一冊 四六判  
 布裝 五五一頁 明治四十五年初版 昭和五年二月六十版 定價金三圓(半價提供中)

(解説)

一、本書の原名『クオレ』は、伊太利語で心の意味である。著者は、元と軍人で、伊太利統一戰爭後隱退して、専ら文筆に従事した。今年から數へて、二十六年前の、一九〇四年五月に、クオレ第三百版發行の祝賀會があつたとき、當時の伊太利文部大臣オルランド氏は、次の電報を著者に寄せた。「貴著『クオレ』によりて、我が國の美しさと、人世の詩趣とを、初めて味ふこ

とを覺えたる伊太利の、年若き人に代りて、茲に、御名譽と、御勤勞とに對し、熱誠なる祝辭を呈す」

二、本書は、伊太利の小學校生活に於ける、師弟間友人等の愛を、表現したもので、譯者が、情育小説と題してゐる通り、熱烈な、崇高な、愛情が、全卷にあふれてゐる。解説子が始めて讀んだ邦譯は、杉谷代水氏の、學童日誌といふ菊判上下二冊の本で、たしか春陽堂出版であつたと記憶する。勿論今は絶版である。その後英文『クオレ』を耽讀したが、明治四十五年、三浦氏譯の本書が初めて出た時、また全卷を讀み返して見て、新たな感興に打れた。今日、少年少女の讀物として、第一に推奨したい書物の一つは、本書である。愛子を持つ親の讀むべき書として、又本書を推奨するに躊躇しない。

三、本書は、三ヶ月餘の休暇が終つて、十月學校が初まる日から、翌年の七月、學校が終る日迄の、約一ヶ年間に亘る學校生活を、エリコといふ學童が、認めた日誌の形になつてゐる。學年が變つて、受持の先生が變つて舊師との別れ、新しい教師との對面に筆を初め、同窓の友人や、校長その他の先生や、四季の移り變りや、學校行事の數々を、それからそれと丹念に描寫

してゐる。その間に、父や母の教訓や、姉の手記などが、巧に織り込まれ、又受持教師が試みる、月並講話が、毎月一つ宛記されてゐる。師弟間の愛、友人間の愛、親子兄弟の愛、學級愛、學校愛、社會愛、燃えるが如き愛國の至情、犠牲の精神、要するに、人間生活の最も美しいものが、どの頁にも横溢してゐる。

四、月並講話九篇は、何れも少年を主材とした美しい物語である。

中にも『少年愛國家』、『少年筆耕』、『母を尋ねて三千里』の三篇は最も讀者を感激させる。卷頭の徳富蘆花先生の序文、又讀者の心を動かす文章である。

著者は自序に言ふ、『或る人が、今日の教育を評して、かう云つた。池が掘られた。其の形深さ、石垣の築き方など、巧に計畫された、立派な、恰好のよい池が出来た。そして、其のへりには、芝生とか、樹木が植ゑられた。けれども水がまだたゞへられない。情が、たゞへられないのだ。従つて、教育の中心生命が、まだ充たされない。此の中心が充たされたあかつきでなければ、我邦の教育は、本當に生命を有するものとはなり得ない』と、但し、この中心生命を充たすべき役を、學校教師だけに強いてはならない。理解ある父兄の力にも、俟たねばなら

ぬ。殊に母性愛に燃える母親の至情に大に俟たねばならぬ。

## 一八、全譯古事記

(摘要) 國文學の部 植松安、大塚龍夫共著 廣文堂發行 全一冊 菊判 布裝 五八六頁

索引五六頁 大正十四年十月出版 定價四圓五〇錢

(解説)

一、古事記は、日本書紀、萬葉集と共に、日本古代の最も重要な文献の一つであつて、古代の文學であり、歴史であり、神話である。又言語資料でもある。殊に古事記は、建國の大本と、國家の展開とを、明かにしたもので、眞に帝國を理解し、國民精神の由來を會得する爲めに、我々が必ず讀まねばならぬ聖典である。

二、古事記は我が國の歴史中、最古のもので、元明天皇の和銅五年に選ばれ、我が國の開闢より、人皇第三十四代推古天皇までの歴史を書いたものである。此より先、天武天皇の世、稗田阿禮なるものがあつた。人となり聰明で、天皇の御信任殊の外厚く、在來の史傳を一切口づか

ら授けた。古事記は即ち、阿禮が頭腦の寶庫を三卷に展開したもので、其の編者は、當朝第一の碩學大安磨、その成りしは前述の如く、和銅五年であつた。本書は、一種變則な漢文で書かれてあるが、當時漢學の渡來後、時を経て、之が運用も、以前に比しては、著しく進歩してゐるが、全然彼の國の訓によらんには、その發表に隔靴搔痒の憾みがあり、全く音によらむには用字が煩瑣で、記事が冗長に失するを免れないと、其の選者もなけいてゐる。そこで、音訓雜へ用ひて、必ずしも一方に偏せず、或る場合は全く音を用ひ、或る場合には全く字訓によつてゐる。かやうに雜然として統一なき法を、臨機に應用して、簡古率直に寫したのが古事記の特徴である。

三、古事記の内容は、神代史を上巻とし、神武帝より應神帝までを中巻とし、仁德帝より推古帝までを下巻としてある。その記事は政治を主としたもの、物語を主としたものなどがあるが全編を通じて皇室の御系譜が中心となつてゐる。

四、古事記は、日本書紀と併せ稱せられてゐるが、古事記が重んぜられ、かつその研究が始めらるゝに至つたのは、徳川時代に、新しい國學が起きる様になつてから後で、その以前に於て



は、古事記は殆んど學者間にも問題になつてゐなかつたのである。徳川期の註釋書としては、先づ加茂眞淵の『古事記頭書』三冊があり、次で田安宗武の『古事記頭書』、『古事記詳解』五冊がある。これに次いだものが、即ち本居宣長の『古事記傳』であつて、不朽の名著たるは勿論、同時に國學の根柢を確立した點に於て最も貴重な著述である。

然しそれは、全四十九冊よりなり、その内容は頗る廣汎、専門家でなければ、容易に手をつけることは出来ない、其の後古事記の研究は、日に日に進んだが、明治、大正の世に至つては更に外國語又は外國の事情から説かうとする學者もあらはるゝに至つて、その研究は益々盛大に向ふ有様である。

五、古事記は、大体が漢文で書いてあるので、國民的讀物としては、やゝ困難のやうにも思はれるが、今茲に紹介する植松氏の古事記全釋は、從來のそれと頗る趣を異にし、普通教育を了へた人ならば、さほど難解ではあるまいと思ふ、本書の体裁を見るに、四段に分ちて、最上段には、今日の普通の知識では解釋に苦しむと思はれる語句を、主として宣長、守部、篤胤の註を参考して、平易に註解し、第二段には、古事記の原文をそのまま掲げてある。第三段は、第

二段の原文をそのままに譯してある。

第四段は、所謂口語譯で、古事記を今日の言葉で述べると、先づこんな風なものといふことを示してある。恐らくは、女學生にも容易に了解されることと思ふ。

本書の外に、敷田年治の古事記標註、富士谷御杖の古事記燈、俗譯には澁川玄耳氏や鈴木三重吉氏の古事記物語などがあるが、植松氏の本書が最も平明で讀みやすいと思ふ。(藤岡教諭)

## 一九、増訂萬葉集選釋

(摘要) 國文學の部

佐々木信綱著

明治書院發行

全一冊

四六判

布裝

四七四頁

附録索引研究書目解題六八頁

大正五年十二月出版

定價三圓二〇錢

(解説)

一、奈良朝は、和歌の最も盛んに行はれた時代で、貴賤貧富の別なく、即ち上は、天皇より、下は庶民に至るまで、皆歌を詠んだのであるが、その歌の秀逸の、纂輯されたのが、萬葉集である。萬葉集の編纂された時代は明かに傳はつてゐないが、多分、奈良朝の末に成つたとの説

に一致してゐる。其の選者は、古くは、橘諸兄が勅を奉じたものといひ、諸兄及大伴家持といひ、更に家持の私選といひ、諸説まち／＼である。

二、萬葉集は、二十卷より成り、歌の種類は、長歌、短歌、旋頭歌の三種から成立ち、その數は長歌二百六十二首、短歌四千七百七十三首、旋頭歌六十一首、合せて四千四百九十六首である。年代は、仁徳天皇より、淳仁天皇の實字三年まで、四百四十六年に亘つてゐるが、集中の歌は概ね藤原朝の持統文武の御代より、奈良朝の元明以後淳仁に至る、七十餘年間のものである。作者は、上は天皇、皇后、皇族大官より、下は、庶民、遊女等に亘り、あらゆる階級の人々を網羅してゐる。その中、男子五百六十一人、女子七十人であるが、中にも、有名なのは、柿本人麿、山邊赤人、山上憶良、大伴旅人、笠金村等で女流作家としては、額田王、譽謝女王、石川郎女、大伴阪上郎女等である。

三、此の集では、歌を、雜歌、相聞、換歌、譬喻歌、四季雜歌、四季相聞の、六部に分類し、不完全ながらも、後世歌集の、四季、戀、雜、哀傷等の部類別の基礎をなしてゐる。右の中に、相聞と云ふものは、廣義の戀歌で、單に、男女間のみでなく、父子、兄弟、朋友、相互の

音信、消息等を含めたもので、譬喻歌といふも、要するに、おとづれを物に托し、景に擬したものの、換歌は、死者を弔ふ哀傷の歌である。茲に一言すべきは、集中の短歌と、反歌との、區別である。反は反覆の義、即ち長歌の大意を、更に歌ひかへすか、若しくは、長歌の意の盡さない所を、もう一度歌ひ足すためのものである。即ち、長歌に附屬した短歌は、反歌で、獨立せる三十一文字の歌は、短歌となすべきである。

四、萬葉集に詠まれた歌は、後世に見るやうな、特別な歌題といふものはない。その歌はれた題材を、地理的にいへば、大和をはじめ、近畿を中心として、諸國の地名風土は、凡て歌はれてゐる。物質的にいへば、鳥獸、魚介、草木の類から、衣服、器物に至るまで、凡て取り扱はれてゐる。

五、萬葉集の歌の特色は、その思想、言葉、調子の各方面に亘つて、自然、朴實、雄健なる點に在るが、その代表的作者は、前述の通りである。特に、特色を發揮してゐるのは、長歌に於ける抒情詩人として人麿、短歌に於ける自然詩人としての赤人、及び教訓詩人としての憶良、旅人、家持である。

六、萬葉集中には、純真なる夫婦愛を歌つたものが、數多あるが、今茲に妻の眞心を現はした長短の一例を示すと、『つきねふ山背路を、人づまの馬より行くに、おの夫の徒歩より行けば見るごとに音のみし泣かゆ、そこもふに心しいたし、たらちねの母が形見と、わが持たるまそみ鏡に、あきつひれ負ひ並めもちて、馬かへわが夫』。仲間の商人どもは、いづれも、馬で、遠い山城に向つて、出かけるのであるが、夫には、馬買ふ餘裕がない。夫の出で立ちを、門に送り出したうら若い妻は、その手に、古い鏡と薄い巾とを捧けてゐる。妻は、この貴い二品を取出し、『これを金に換へてなりと馬を買はれよ』と勸めるのであつた。何と美しい、濃やかな愛情ではなからうか。

七、萬葉集に關する參考書は、古來數十種の多きに及び、その解題書すら、百を以て數へられる程である。然し、何れも専門的であつて、單に萬葉集を味ふと云ふ點から言へば、從來の訓詁・註釋方面のみの參考書では、如何かと思はれる。

佐々木信綱氏著萬葉集選擇は、萬葉集選擇としての、面白みを解し、また味はふといふことを、目的として、著されたものである。本書に選出された歌の數は、長歌、短歌、旋頭歌、合

せて四百三十二首、萬葉集に於ける總數約四千五百首のほと十分の一で代表的作品は、殆んどすべて收めてある。本書に收められた長短歌はすべて、わかり易く書き改められ、欄外には、寛永本によつて、題詞及び原歌が擧げられてある。 (藤岡教諭)

## 二〇、枕草子評釋

(摘要) 國文學の部 金子元臣著 明治書院發行 上下二卷 菊判 布裝 上卷五三八頁

下卷五六〇頁 索引三一頁 大正十三年六月出版 定價四圓

(解説)

一、枕草子は、かの源氏物語と共に、我が邦の文化の爛熟した藤原氏全盛時代の産物である。國實的文學である。かの源氏物語が、假作小説であると異り、悉く事實に即した叙事と感想とを以てみたされた隨筆であるから、假にも曖昧朦朧の言がない。

二、枕草子の著者が清少納言であることはいふまでもないが、著者は、當時有名な歌人であつた清原元輔の女で、傳習的に才藻が豊富であつた。彼は歌の方面にはそれほど得意ではなく、

歌といへばつとめて避けてゐたやうに思はれる。しかし、文章の方面に於ては、古今獨歩ともいふ可き卓抜の才があつた。當時の女流で彼に對するたゞ一人は、源氏物語の著者紫式部のみである。さて枕草子は、史的事實を記載するを以て目的としてゐるが、また一方これに反して叙事に執せず、直ちに自己の感想を刻明に表白してゐるものがある。草子全篇の過半は、この感想の赤裸々な描寫であるといつてよい。これには實在の人物、また四季をり／＼のうつり變りから、地理的叙景を主としたものもある。最も多いのは、『山は、原は、淵は、海は、森は湯は、修法は、など列叙したたぐひである。』著者の才藻は、隨處に現はれてゐるが、殊に『心ゆくもの』、『あてなるもの』などの『ものは』の條下に於て、最も明確に知られる。而して讀者の心を最も強く引くものは、その自然の景風に及ぶところにある。觀察の周到を以てして、しかも簡潔な語、目前に彷彿として見るやうに綴つてゐる。

三、本書に關する参考書は、數多あるが、金子元臣氏の枕草子詳解上下二卷は、最も親切である。その解釋は丁寧然かも綿密、その批評は、著名の心血を傾注したもので、本書の内容を十分に紹介し知悉せしむるに足る。口譯は、一讀してその文意を領得するに便利ならしめ、考異

は普通流布本(慶安板本)、春曙抄本その他の諸本を參酌してあるが、なるべく文學を改易しない方針をとつてある。

繪畫は、古文學研究上最も重要であるが、本書には附圖十數葉の外に、必要に應じて註譯中所々に挿入してある。本文中會話には殊に『』を施して地の文と區別し、第三者の談話の語は更に『』を施して區分し、又地の文に話者の明記なき場合は、これを細字に標記して一見識別し易からしめてある。

(藤岡教諭)

## 一一一、新譯源氏物語

(摘要) 國文學の部 與謝野昂子著 大鐘閣發行 上下二冊 菊判 布裝 上卷九二二頁

下卷八九七頁 大正十五年二月出版 定價各四圓二五錢

(解説)

一、平安朝に於ける、藤原氏專權時代の、宮廷生活、公卿生活の跡を尋ねるに、文官は民情を知らず、武官は武事を習はず、滿廷、悉く是れ宮内官、悉くこれ風流歌人であつた。即ち、宮

廷の男女は、春花秋月の詠、詩歌管絃の遊を、日課とするの姿であつた。されば、文筆に通ずる才子佳人も自然に輩出し、殊に、中宮乃至女御、更衣は、君寵を争ひ、才藝ある女房を用ひて、その羽翼となすに至つたので、女流文學者の多き、古今を通じて、此の時より甚だしきはなく、和泉式部、赤染衛門、清少納言、紫式部等、枚擧するに遑がない。

就中、小説の方面に於ては、紫式部の源氏物語を以て、稀世の傑作となす。

二、紫式部は、藤原爲時の季女で、兄には惟規、惟光、定暹の三人がある。式部は、幼にして聰明敏才、博く和漢古今の學を究め、又佛學を修めた。其の後、藤原宣孝に嫁し、二女を生んだが、不幸にして夫に早く死別した。未亡人になつてからの式部は、身を持すること頗る嚴格方正、しかも、あれほどの才學あるに拘らず、至つて謙遜辭讓であつた。當時朝廷に於ては、文學を好ませ給ふことが殊の外厚く、式部は中宮上東門院の御召しに應じ、入つて奉侍した。恰も、今日の高等家庭教師のやうな格で、支那の白氏文集や、我が日本書記の類を、進講し奉つた。

三、源氏物語五十四帖は、その脚色より見て、之を二部に分つことが出来る。前四十四帖は、

當時の理想的貴公子である光源氏君を中心として、それに配するに、模範的淑女紫上を始めとして、數多の婦女を以てし、概して、圓滿なるその生涯を描き、後十帖、即ち宇治十帖は、源氏君の子、薫大將を主人公として、その失意の境遇を寫し、華美にして賑やかな前篇と、沈鬱にして淋しい後篇とを、相對して、巧に全部の趣向を成してゐる。

作中に現はるゝ人物は、主人公光源氏を始めとして、約三百名、主要なる人物だけでも、三十餘人、その中最も主要なる人物は、とかく個性まで描き出され、而して時代の面影は生けるが如く、作中に浮動してゐる。

その作意に就いては、古來學者間に種々議論せられ、佛教乃至儒教的見地より、或は因果應報の理を示し、或は勸善懲惡の意を寓した理想小説といひ、又は、たゞ物のあはれを知らしむる寫實小説であると説かれてゐるが、當時の貴族社會の生活を直寫しつゝ、自己の女性觀を發表し、事實の間に、理想を含有せしめたものと觀るのが、穩當であらうと思ふ。

四、かくてこの書は、著作の當時直ちに、上流社會に歎賞せられ、遠き田舎までも持て囃され、鎌倉時代以降に於ては、大に世に行はれて、その註釋書の如きも、夥しい數に上つてゐる。且

つその後世の文藝及び社會百般の事象に影響せしことの大なるは、平安朝末期の小説を始め、鎌倉、室町時代に於ける物語、お伽草子、謡曲に此の書の系統を引いてゐるものが頗る多く、江戸時代に於ても、小説戯曲等に屢々應用され、また詩歌繪畫の題目、風流、玩具の稱呼となるに至つたのである。

五、源氏物語は、頗る浩瀚な本であるが、我が國文學史上の一大産物であるのみならず、實に世界的の傑作である。従つて、本書は、鎌倉時代以來、多くの學者によつて盛んに研究せられ其の註釋書の如きも多く世に出てゐる。然し頗る浩瀚で、且つ難解な文章であるから、専門家でない限り、其の讀解は容易でない。與謝野晶子氏は、この名著を廣く世に普及せんがため、多大の努力と犠牲とを拂つて、この難解な本書を現代語に譯されたのである。

原文の絶妙な筆致を、研究興味することは勿論結構であるが、これは専門家でないとい困難である。一般人士が、この名著を、全体として、其の豊滿な美を享樂せんとするには、この新釋は頗る便利であらうと思ふ。

(藤岡教諭)

## 一二一、更級日記新註

(摘要) 國文學の部

玉井幸助著

青英書院發行

全一冊

菊判

布裝

二三七頁

附録二五頁

大正十五年四月五月初版

定價一圓八〇錢

(解説)

一、平安朝時代に、多くの女流文學者が現はれて、夫々、特色ある作品を残したことは、我が國文學史上の大きな誇りである。彼の源氏物語、枕草子、和泉式部日記、讃岐典侍日記等は、いづれも當時女流の手になつたものであるが、我が國文學を語る上に、更級日記は、源氏物語枕草子と共に、是非とも味はねばならない大切な作品である。

二、更級日記の著者は、菅公五世の孫である菅原孝標の女である。著者は、文學の血統を受けてゐたのみでなく、その縁者には、文學上優れた人々が多くあつたが、このことは、作者がその天分を伸す上に、與つて大に力があつたのである。本書は、彼が十二才の時、父が上總介となつて、赴任するに隨つて、東下りした時に始まり、晩年、夫との死別に至る、大凡四十年間の、喜怒哀樂の縮寫である。作者は、幼少の頃から、文學を熱愛し、彼が十二の時、父に伴は

れて上總に下り、徒然なる夜物語に、姉や繼母が源氏物語などの話をするのを聞いて、早くも文學の世界に心を奪はれるやうになつた。その後といふものは、その物語を、心ゆくまで讀みたいとの一念から、子供心にも、等身の薬師如來を部屋の一隅に安置して、朝夕おいのりしたほどであつた。彼の女の念願は、遂にむくひられる時が來た。其の後、京へ上つて、源氏物語五十餘卷を、叔母から貰つて歸り、夜晝のさかいたく愛讀した。

三、作者は、頗る幻想的な女で、常に未來を夢みて、現在を忘れてゐた。更級日記の中には、多くの夢の話が出てゐるが、そのうちの大多數は、彼女自身の夢である。未婚時代の作者の生活は、殆んど夢であつた。然もそれは、決して現實的な、虚榮の夢ではなかつた。結婚して母となつてからは、やゝ現實にめざめて來た。然しそれは、全生活の變化ではなかつた。彼女は母として、我が子を、養育せねばならない境遇に置かれたので、未婚時代の時のやうに、只管夢の世界にさまよふことは出來なかつた。晩年、夫に死別してからは、再び幼想の世界にさまよふやうになつた。

四、作者は又一面に、自我の強い女性であつたが、清少納言のやうに傲慢ではなかつた。彼は

心に強い我を抱きながら、家庭の事情にほだされて、従順な生活をつづけた。彼は孝心厚く、母性愛に富み、しかも夫に對して、貞淑な女性であつた。姉の遺した二人の幼女を、生みの子の如く愛撫した。その温かな心、我が國女性が持ちほこりとする美しい犠牲的精神は、作者に於て、最も多く認める事が出来る。かくも作者が、自己の避け難い運命の前に、従順であつたのは、彼の腦裏深く、あこがれの世界があつたからである。その理想郷にあこがれ、その恍惚たる心境の中に融け去つて、自我を歿し、運命を忘れることが出來た。

五、更級日記は、作者が五十一才で夫に死別した後、靜かにその一生を想ひ起して、先づ十二の時の初の記事から、筆を起したものである。日記のうちには、八十八首の和歌が取り入れてあるがそのうち六十餘首は、作者自身の歌である。この點から見ると、更級日記は、作者の歌を、その詠みいでた年月の順序に排列して、これに長い手記を附けた、一種の家集とも見ることが出来る。かく更級日記は、作者が晩年に筆を執つたものであるから、若い頃の事柄には、多少の誤謬があるのは免れない。本日記はその内容の上から、次の四つに區別される。即ち

一、上總から京都への旅日記

- 二、歸京以後、宮仕までの家庭生活
- 三、宮仕に關すること
- 四、結婚以後の生活

標註解釋ものゝ中、叢書には群書類從紀行部、文學全集本、國文大觀本などがある。單行本としては、佐々木信綱氏の校註、關根正直氏の略解、大塚彦太郎氏の講義などがあるが、玉井幸助氏の更級日記新註が、凡ゆる點から見ても、最も便利のやうに思はれる。

本註釋は、定家郷の寫本を本文とし、假名遣送假名、漢字の用法はすべて、今日の例に改めて、整理し、全文を六十八段に分けて、各段に標題を與へて、讀者の便に供へてある。

本書註釋の体裁は、まづ語句を取り出して、初にこれを平易な言語で言ひかへ、又は簡明に解註し、次に語法的、又は、考證的な詳しい説明をしてある。本書の序説は、本文を読むための豫備智識として、必要な事項を記したものである。

附録索引は、和歌、地名、人物、語句の四部に分ちてある。

(藤岡教諭)

## 一三三、徒然草評釋

(摘要) 國文學の部

内海弘藏著

明治書院發行

全一冊

四六判

模造布裝

三六六頁

明治四十四年九月初版

昭和四年二月八十八版

定價一圓五〇錢

(解説)

一、徒然草は、室町時代に於ける隨筆中、最も優れたもので、その行文は、流麗で、優に當代文壇の珍とするに足る。其の著者兼好は、大職冠鎌足の後裔、姓は卜部にて、吉田の庶流である。後宇多院の御代、北面に仕へて、左兵衛佐に任ぜられ、院崩御の後、遷世して、修學院や横川や、吉田や、又は人跡絶えてなき、木曾山中の棧道を渡りて、暫くの庵を結んだこともあった。斯くして、世が亂れて、兵火東西に起るの時、靜かに文選をひもどき、莊子に耽つてゐたが、その際に成つたのが、即ち、徒然草である。徒然草は、二百四十三段から成つてゐて、それに序段を加へると、二百四十四段になる。一行の短きより、數十行の長きまで、長短さまざまで、或は世俗を憤り、或は生死を觀じ、又は次序に感じ、風景を模し、更に人情を説き、私見を述べしなど、實に多方面に涉つてゐるが、その中心思想は、どこまでも、離俗悟道とい



ふことになる。その内容より見れば、大多数のものが、一個の實踐倫理説をなしてゐるが、然もそれは、彼の趣味性からにじみ出た感想であつて、決して無味乾燥な、お談義的のものではない。

二、彼は平安朝時代の風潮を受けて、古尊今卑、都尊田卑、官尊民卑の傾向があつた。しかしそれは、高尚な趣味性からの思想である。徒然草にあらはれた記事の大部分は、殿上のものであり、都のことであり、貴顯紳士のことであり若しくはそれ等を背景にしてゐる。田圃の道、山里の寺、さうした記事の中にも動もすれば都人があらはれ、都戀しの思があふれてゐる。然し一面に於ては、都會の輕率な今めかしさを、極端に嫌厭してゐる。奢侈贅澤を排し、權門勢家に、阿附する者の態度を、退けてゐる。彼の作を通じて見ると、相當深く厭世主義に傾いてゐるやうである。勿論、彼の根本動機が、世の無常を深く感じたからであるので、この世の凡てを厭うたかも知れないが、然し必ずしも、所謂悲觀の意味の厭世思想ではなく、無常なればこそ、そこに言ひ難い情味を見出したのである。即ち厭世は、凡人の味ひ得ぬ趣味ではあるまいか。次に徒然草の文章について考ふるに、一体この時代は、和漢調和体の文章の開けた時代

で、この書の文章も亦、その例にもれないのであるが、これは、當時の軍記物の如き、調和体よりは、更に進んだ調和が完成されてゐる。そしてどこまでも、純國文脈が流れ、純國語の意趣が、確實に用ひられてゐる。而して、本書の性質上、そこには、壯大雄渾といふやうな趣はないが、その叙述は、細微優麗を極めてゐる。

三、右のやうな特徴のある事であるから、古くから、世間一般に廣く愛讀されて、今日に至つてゐるのであるが、それが後世の文學に、影響した事は、非常なものである。殊に徳川時代の文學は、多分にその影響を受けてゐる。彼の枕草子から徒然草へ、徒然草から俳諧へと、それが我が俳句文學の直系だともいはれてゐるほどである。

四、徒然草の註釋書は、非常に澤山ある。或は考證を主としたもの、或は評論を主としたもの又は語句の解釋を主としたものなど、徳川時代に出たものが、數十種、明治、大正、昭和にかけて出たものも亦、これに劣らないのである。

茲に紹介する内海弘藏氏の徒然草評釋は、その本文が正確であることと、その解釋が忠實であることが特徴である。文本が出版されたのは、明治四十四年の九月であつたが、今日まで版

を重ねること既に八十八に及んでゐるのを見ても、如何に本文が世間から歓迎されてゐるかわかる。語句の解釋は、すべてこれを上欄に於てし、その大意と評釋とは、これを本文のあとに掲げてある。出典や引用の解釋は、本書が小冊子である關係上、一々丁寧細密ではない。然し單語の意趣については、出來得るかぎり細かに解いてある。

(藤岡教諭)

## 二四、謡曲物語

(摘要) 國文學の部

和田萬吉著

富山房發行

全一冊

菊中裁小判

布裝

一〇二六頁

大正十二年八月初版 定價四圓

(解説)

一、時代の精神を、最もよく現はした文學は、大凡の場合、其の時代の、最も優れた文學である。謡曲は、室町時代の思潮を、最も良く代表した文學で、足利三代將軍義滿の保護で、觀阿彌の子、世阿彌といふ秀才の、獻身的努力によつて大成したもので、今日に傳はつてゐる重なる曲章が、二百番内外である。室町時代は、鎌倉時代と同じく、武家の天下であり、其の社會

道徳は、武士道を中心として、簡素を主とし、感情を抑へ、武張つたことに興味を持つてゐたが、世の定まるにつれて、漸時、鎌倉式の堅實一點張り、雅致に乏しいのが嫌やになり、これと共に、平安朝文藝の、優美さが、懐しくなして來た。即ち、華麗を簡樸で統べ、簡樸に華麗を含める、一種淋しみのある不思議な美を求むる風が生じた。これが此の時代の、中心趣味であり、其の趣味を、最もよく現はしたものが、即ち謡曲である。

二、謡曲の主なるもので、現存してゐるのは、前述の如く内外各百篇、合せて二百番あるが、その作者については、古來種々の議論があつて、普通作者と云はるゝ觀阿彌、世阿彌等は、たゞ曲譜を作つただけで、文章の作者は當代の文人、歌人、就中五山あたりの學者であらうと、説をなすものがある。

三、謡曲は狂言と共に、劇文學の一種であり、又我が國に於ける、最初の劇文學である。何等模倣すべき典型も、殆んどなかつた當代に於て、文章、音楽、舞踊、繪畫等の諸藝術を引き纏めて、あの美しい調和をあらはし、品位あり意義ある、綜合藝術を完成したのは、實に驚嘆に値するのである。その題材は、和漢天竺の三國に跨り、神代の昔より、眼前の活社會に及び、

上帝王后妃より、下、賤民に至り、鬼神より、人間を経て、動物無生物に及び性質に於ては、神、男女性、狂、鬼の五方面をかね、喜怒哀樂愛惡欲、仁義忠孝變無常のさまざまな人生を寫してゐる。謡曲の脚色の中心は、二段組織に在る。例へば或る行脚僧が、名所舊跡を尋ねて、さる古戦場に行くと、一人の老翁があらはれて、委しく名勝の謂はれを教へ、我れこそは、此處に討死した、某の幽霊なり、あと吊ひてたび給へと、言つて消え失せる。やがて僧の念佛讀經する間に、幽霊に現はれた名將が、在世の時の姿を現じて、討死した合戦の模様を演じて見せるといふ工合である。謡曲を其の内容により分類すれば、神事に關するもの、人事に關するものがある。又他の分類によれば、靈物(戀愛を主としたもの)、修羅物(武勇を主としたもの)狂女物語(狂女を主人公としたもの)、現世物(人事に關するもの)、古代物(精靈もの)とするものもある。其の流派にも、觀世、實生、金春、喜多、金剛の五座あつて、文詞も、流派によつて多少の異同がある。謡曲は、明治の初年は、一時衰へてゐたといはれてゐるが、近年再び勃興し、都鄙共に、上流の娯樂として流行してゐる。又近時の衛生家は謡曲を以て、一種の腹式呼吸法であると、推賞してゐる向きもあるほどである。

四、謡曲に關する参考書類は、頗る多くあるが、各曲の趣向と、略筋を見るには、和田萬吉氏の謡曲物語が、頗る便利である。本書に收むる所のものは、凡そ百五十篇、能樂五流に通じて現今最も廣く行はるゝものを選択してある。その文詞は觀世流の定本を基礎とし、同流に存せずして、他流に在るものは之を其の流の定本に、採つてある。本書は主として、謡曲を學ばんとする人の、豫習資料たらんことを期してゐるが、謡曲に志すと否とに拘らず、凡そ能樂を觀んとする人、又古傳説が如何に劇詩化せられたかを知る人には、頗る便利な書である。文章も洗練されて雅致を帯び、單に、文學の讀物としても相當の價值を有する。(藤岡教諭)

## 一二五、奥の細道

(摘要) 國文學の部 鳥野幸次著 明治書院發行 全一冊 四六判 紙裝 本文附録とも一

〇七頁 大正十五年十一月出版 定價六五錢

(解説)

一、「奥の細道」は、徳川時代の俳聖、松尾芭蕉の紀行文である。松尾芭蕉、實の名は忠左工門

伊賀上野藤堂家の臣で、九歳の時、藤堂良精の長子良忠に近侍してゐたが、良忠が卒したのでこれを追慕するの餘り、遁世の志を懐いて家を出で、京都に行き、北村季吟に和歌俳諧を學んだ。次に西國を遍歴し、江戸に来て、天和元年深川に庵を結び、芭蕉を植ゑたので芭蕉庵と號した。

彼は書を修め、門人の許六に得る所が多かつた。又早く、佛頂和尚に參禪した。常に西行や宗祇を敬慕してゐたが、彼の遁世の生活と、參禪とが根柢をなして、その俳諧は閑寂の特質を持つてゐる。彼以前の俳諧は、所謂酒前酒後の戯れで、ひたすら云ひまはしの巧や、文辭の妙を競ひ、又は淺薄な滑稽を弄び、内容の空虚なものが多かつた。彼は俳諧の正道は、作家の貴い體驗の發露でなくてはならぬ、眞生命のひびきでなくてはならぬと主張し、俳諧の大革新を試みた。それで彼の創始した俳風を、蕉風または正風といつてゐる。

元禄七年大阪に遊んで、十月十二日歿、年五十一、近江義仲寺に葬つた。門人甚だ多く、世にはゆる蕉門十哲は、殊に名高い俳人である。この蕉風から江戸風と、上方風とが分れた。その著には、『野ざらし紀行』『笈之小文』『奥の細道』『嵯峨日記』、門人の編んだ『俳諧七

部集』を始めとし、多くの書がある。

二、芭蕉の俳風に就いて特記すべきは、其の詩材範圍の、廣汎なると、其の作句態度の、眞面目なことにある。従來の俳風は、其の形式に、内容に、常に古典雅語に囚はれ、兎角因襲的であつたが、彼はあらゆる詩趣をとらへて、洩す所のない態度を以て、雅語、漢語、佛語、俗語を用ひて、歌想、詩想、史實、現實、人事、自然、主觀、客觀と、あらゆる方面に向つて、その詩庫を開放した。又従來の俳諧宗匠は、營利の奴隸となつて、上流の門弟に扈從し、其の吟詠又間に合せ、場ふさぎものか多かつたが、彼は一吟にも尙、自己の全生命を傾注してゐる。芭蕉の詠んだ數句を、列擧すると、

古池や蛙とびこむ水の音

田一枚植ゑて立去る柳かな

花の雲錦は上野か淺草か

荒海や佐波に横たふ天の川

住みつかぬ旅の心や置こたつ

夏草やつはものどもが夢のあと

草臥れて宿かる頃や藤の花

やがて死ぬ氣色は見えす蟬の聲

石山の石より白し秋の風

三、『奥の細道』は芭蕉の紀行中最長篇であり、その眞面目な態度の最も躍如たるものである。芭蕉がこの長途の艱難な旅を思ひ立つたのは、元禄二年三月のことで、芭蕉はもう四十六といふ老境に入つてゐた。其の道行の梗概を述べると、全年の三月二十七日に江戸を立つて、先づ日光にまゐり、那須の原を越して黒羽に寄り、那須の温泉に殺生石を見、それから白河の關を越して、須賀川、福島、白石、岩沼と奥州街道をたどり、仙台に着いたのは五月四日である。八日に仙台を立つて鹽釜にとまり、そこから平泉に出ようとして、道を誤つて、石の巻に出てしまつた。北の方はそこを終點として、岩出山まで引返し、今日の陸羽東線の道に添うて鳴子の湯をすぎて、出羽の國に入り、それから、日本海に沿うて暑熱を冒しつゝ歸りついたのである。

凡そ俳文とは、俳句の心持ちでつくつた散文で簡潔と、奇警と、輕快と、洒脱と、自然人事の罪なき矛盾を諷するのが其の特徴である。『奥の細道』の文章に於ても、普通の人が數言を費す所を、一語にして盡し、句格に捉はれずして、簡約を尙ぶため、文が緊張して内容に深さを増してゐることを味はねばならない。云ふまでもないが、かゝる種類の文を読む時には、人物地理に重きを置かず、どこまでも懐古的氣分で、洒脱的氣風を感得するやうに工夫すべきである。

四、『奥の細道』の参考書には、明治以後のものに、木村架空氏の『新釋奥の細道』、荻原井泉水氏の『奥の細道新釋』等があるが、鳥野幸次氏の「校註奥の細道」は簡單で然かも要を得てゐる。附録として『芭蕉翁傳』と『芭蕉雜感』の二篇が收めてある。前者は芭蕉の事歴を記したもので、後者は作者鳥野氏が天津の義仲寺や、幻住庵に行つた時の隨筆に、其の他のものを綴り合せたもので、芭蕉研究上有益で、しかも趣味のある文である。

(藤岡教諭)

## 二六、新國文學史

(摘要) 國文學の部 五十嵐力著 早稻田大學出版部發行 全一冊 菊判 背皮布裝七八五頁

明治四十五年四月出版 定價四圓

(解説)

一、國民性の自覺と言ふことが一國の消長に如何に深くあるかは今更言ふまでもない。我が國に於て國語教育、國史教育を重んずる理由は種々あらうが、その主要なるものは自國の國民性、國民精神に自覺をもたせるためではあるまいか。この國民性の自覺といふ上に最も役立つものは國文學である。この國文學を國史と相提携させ、相助けしめて、これを全國民の間に普及してゆくことによつて、始めて國民性の自覺が徹底出来るのである。

國文學とは國民自身が描いた自家の影像そのものである。自己の傳記そのものである。されば、國民生活、國民精神の真相を見詰るには是非とも國文學を究めねばならない。その眞の姿を見詰るといふことが、我々日本國民としての自覺を得る第一歩である。

二、さて本書は、著者が早稻田大學の文學科で試みた講義の控本と、『高等國民教育』、『早稻

田講演』、『早稻田文學』等に掲げた論稿を本とし、之に手を入れて纏めたものである。『國文學の味はひを具体的に描くこと』、これが著者の第一に志した所である。これまでの國文學史には、知識的理解を目的として、表面的形式的の説明を事とする傾向があつた。著書は之れに對し、讀者の鑑賞を目的として、情味を傳へることを心掛けてゐる。古今の文學を讀んで得た感じを、そのままに寫し傳へようと力めてゐる。

三、著者は本書に於て、各時代を二部に分ち、第一部に於ては、その時代の文學の大勢を大づかみに概説し、第二部に於ては、代表的の中心文學を詳しく叙すると云ふ方式をとつてゐる。

通常、日本文學の發展を劃して、上古、中古、近古、現代の四期とし、或は上古、奈良朝、平安朝、鎌倉時代、南北朝時代、足利時代、徳川時代、明治時代の數期に分けてゐるが、本書は、特色の著しい明治時代の文學、殊に、日露戰爭後の最近文學を一方に置き、奈良朝以來徳川時代までの文學を一括して之に對せしめてゐる。故に本書に於ては、小分けした各時代の文學の叙説に進む前に、明治の文學と、明治以前の文學と、此の大別けの二群團について、重要な特色を説いてゐる。明治を境とした二文學團の概説が済んだ後に時代わけの研究に進み、我

が過去の文學史を古代、平安朝、鎌倉時代、室町時代、徳川時代の五期に分ち、更に徳川時代を元祿期、文化文政期の二期に分ち、その各々について、先づ一般の概説をなし、次に時代を代表すべき主要なる著書又は作家を取り出して、悉しく叙説評論してある。

要するに、本書は、最も特色ある國文學史で、著者は、現代の教養ある多數の同胞と共に、吾等の祖先の活きた情の發露した文學を、活かして、心ゆくばかり味ひたいと願つてゐる。

(藤岡教諭)

## 二七、縮 一葉全集

(摘要) 國文學の部 樋口一葉著 博文館發行 全一冊 四六判 布裝 一二五六頁

大正十一年六月出版 定價三圓八〇錢

(解説)

一、日清戦争の行はれた明治二十七八年頃を界として、従來の通俗なる歴史小説、傳奇小説の類を歡迎してゐた時勢は、茲に一轉して、二層斬新強烈なる、しかも實質ある或物を要求する

に至つた。即ち、その聲に應じて生れたのが、所謂觀念小説、深刻小説又は悲慘小説など呼ばれる小説である。泉鏡花、川上眉山、廣津柳浪等はそれ等の代表作家で、悲慘なる運命に弄ばさるゝ主人公を捉へて、深刻なる描寫を試み、現實に觸れて、社會力の抑壓乃至暗黒面に對する一種の人生觀を現はさんとした。然し、外面的の悲慘なる境地を描いただけで、概して深き内面的の心理描寫に及ぶことはなかつた。その間にあつて、觀察を心理狀態の方面に向けて、生命ある作物を残した者に、樋口一葉女史がある。

一葉は實に、明治文壇唯一の女流作家で、その作家としての閱歴は、明治二十五年に始まりて、二十九年に病歿するまで、僅々數年に過ぎないが、彼の悲慘なる短き生涯より得た體驗は同性の上に、深甚なる同情を喚び起し、薄倖なる女性の爲に、萬斛の涙を揮ふに至つたのである、即ち彼の遺した二十餘篇の作は特に女性の活寫に優れ、構想巧みにして、行文また暢達である。

二、樋口一葉女史、名は夏子、東京の生れである、十七年の春より歌人和田義雄の下に歌文を學び、十九年八月、歌人中島歌子の門に入る。二十四年、半井桃水氏の門に入り、二十年三月

半井氏等の同人雑誌「武藏野」に載すべき「闇櫻」を草した。これが一葉女史の處女作と謂はれてゐる。その後「都の花」といふ雑誌に、「うもれ木」を載せたが、この作あたりより女史の小説が體をなし、二十七年二月頃から専ら「文學界」なる雑誌に執筆してゐたが、その作品は何れも當時の文學界に稱せらるゝに至つたのである。二十七年五月、女史終焉の地である本郷區丸山福山町に居を移した。女史の諸作「やみ夜」、「行く雲」、「たけくらべ」、「にっこりえ」、「十三夜」、「わかれ道」等はすべてこの家で成つたのである。三十八年の秋、「にっこりえ」が「文藝俱樂部」に現はるゝや、大に世の注意を引き、「文學界」に連載した「たけくらべ」が「文藝俱樂部」に再載せらるゝに至つて、女史の文名は凄じき勢にて世にあらはれ、忽ち當時の中心作家の列に加はつたのである。二十九年春の頃より病を得、夏に入りて漸く重く、十一月二十三日溘焉として逝つた。享年僅かに二十五。

三、本書に收むる所は、小説は以上掲げた代表的なものを始めとして、すべて二十五篇、それから明治二十四年四月十一日より、二十九年七月二十二日に至る間の日記が載せられてある。其の他書簡文範、隨筆等頗る廣范なもので、一二五六頁に亘る大きな本である。(藤岡教諭)

## 二八、幸田露伴篇

(明治大正文學全集第六卷)

(摘要)

國文學の部

幸田露伴著

春陽堂發行

全一冊

四六判

布裝

六六二頁

昭和三年一月出版

定價一圓

(解説)

一、明治の中期における、我が國の思想界には、かの歐化主義に對する、一種の國粹運動が起り、古代の文化を、復活せんとする機運が、漸く盛なるに至つたが、此の時に乘じて、文壇に於ても、徳川時代の小説、特に西鶴の研究が勃興した。その影響を受けて、小説界に貢献したのが、彼の硯友社の一派である、幸田露伴は、硯友社の中堅である紅葉と、並び稱せられ、實に明治の中期における、我が文壇の權威である。紅葉は、その寫實の緻密と、文章の技巧とに於て、一般の人氣は遙かに露伴を凌駕してゐたが、少數の識者は、露伴を、より以上尊敬してゐたやうである。紅葉の文は、其の形式の美を優れるとなすが、その寫實は、外面的、小主觀的、空想的で、少しも讀者内心の琴線に觸れず、單に作者自分ばかりの着想を表はす寫實的形式を採つたのに過ぎない。其の人物の性格は、類型的で、眞の意味に於ける個性の發見がな





見るに至つて、衆人始めて、十兵衛の天才に感じ、感歎してやまなかつた。といふ江戸つ兒の意志で、藝術の讚美と、理想の憧憬とを、ほのめかしたもので、彼の作風の代表的作品と見られるものである。

(藤岡教諭)

## 二九、吾輩は猫である

(摘要) 國文學の部 夏目漱石著 大倉書店發行 全一冊 四六半截型 布裝 七五一頁  
明治四十四年七月出版 定價二圓二〇錢

(解説)

一、十八世紀末から、十九世紀に亘りて、歐洲に於ては、自然科学勃興の結果 空想的的人生觀 抽象的哲學思想は、實證的、具体的科學思想の勢力に壓倒せられ、自然科学の精神及方法を、文學の上に活用する自然主義的文藝の發達を見るに至つたが、これ等、世紀末の海外文藝は、我が明治文壇の先進の手によつて、盛んに我が國に輸入された。特に三十七八年の日露戰役後の本邦文學界は、自然主義文學の大隆盛を見るに至つた。

この時に當つて、反自然主義の旗幟を翻す一派が起つた。それは、正岡子規等の寫生文より發足したもので、夏目漱石はその中心である。漱石は東大英文科を卒業してから、直ちに松山に赴任し、それから第五高等學校の教授として、數年間熊本に居たこともある。其の後、英國に留學し、歸朝後、東京に住むやうになつた。彼は夙に、反自然主義の旗幟を翻し、明治三十八年、『吾輩は猫である』を雑誌ホトトギスに連載して、文壇に重きをなすに至つた。其の後、漾虛集(三十九年)、虞美人草(四十年)、三四郎(四十一年)、それから(四十三年)、彼岸過ぎまで(四十五年)、の如き創作を、次から次と公にした。彼は、明治の俳聖である正岡子規の流れを汲んで、俳味禪味に立脚した所謂低徊趣味を愛し、而して、その表現法は、説明的方式となりて、あくまで技巧を重んじたため、時に理窟に墮し、煩瑣に流るゝ缺點がないでもないが、その細緻な心理解剖と、深奥な哲理批判とは、頗る異彩を放ち、特に在來の國文學に缺けてゐたユーモアに富んでゐるのは、他に類がないのである。

二、『吾輩は猫である』は、初めて漱石を世間的に有名にした作品で、然かも此の作品が、漱石の特色を最も顯著に現してゐる。元來『猫』は、最初のもので、読み切りにする積りで、書

かれたのであるが、一度、此の一篇が誌上に發表されると、學生を初めとして一般社會、殊に智識階級方面から賞讃を受け、又編輯者の熱心な勧誘があつたので、第二を書き、第三を書き、到頭、第十一まで書き續けたのである。従つて、本書は全十一章からなり立つてゐるが、上篇の序文に作者が、『此の書は趣向もなく、構造もなく、尾頭の心元なき海鼠の様な文章であるから、たとひ、此一巻が消えてなくなつた所で、一向差し支へない』と云つてゐるやうに、章の途中で切りさへしなれば、章と章とは、何所で切つても構はない筈である。猫の上篇が出版されて見ると、非常な賣れ方であつたが、今日でも、漱石の數ある著作中、一番よく出るのが『猫』で、世間でも漱石と云へば、すぐ猫を思うといつた工合に、廣く讀まれてゐる。それから中卷下卷と三冊になつて出で、明治四十四年の七月になつて、合冊の縮刷本に變つた。

三、さて本書に書かれた内容は、漱石の宅に飼はれてゐる一匹の猫の眼に映じた世相である。それは、漱石自身の學問であり、見識であり、趣味であり、哲學であり、人生觀であり、日常生活である。本書には到る所、滑稽味が溢れてゐるので、漱石は、眞面目な問題をも、不眞面目に受取つて了ふ滑稽作家と、思ふものがあるかも知れないが、それは皮相の觀で、その奥に

深く潜んでゐる、漱石の眞面目な氣分を、味はなくてはならない。『猫』の外に、漱石の傑作は數多あるが、猫が出版されて十年ほどして公にされた『道草』は、彼の長篇小説中の代表的傑作である。漱石は多くの小品も殘してゐるが、『カーライル博物館』、『文鳥』、『永日小品』、『ケーベル先生』、『硝子戸の中』などは、其の代表的なもので、感想文と云ふよりも、寧ろ、最も詩の形式に近い散文と云つた方が、適當であらう。漱石が俳句や書や繪を良くすることは、周知の通りで、今更めて云ふまでもない。

序に、昭和五年十月、岩波書店から出た新裝版は、四六判、四七一頁で活字も大きく、讀みよい。表紙裝幀漱石筆猫の畫コロタイプ刷、特價一圓。(藤岡教諭)

## 三〇、縮刷 獨歩全集

(摘要) 國文學の部 國木田獨歩著 博文館發行 全一冊 三六版 布裝 一三八三頁

大正九年十二月初版 定價三圓八〇錢

(解説)

一、漱石の條に述べた如く、十八世紀より、十九世紀にかけて、歐州の天地に於ては、自然主義的文藝の勃興を見たが、明治時代の後半期に入りこれ等、海外文藝の潮流は、森鷗外、姉崎嘲風、田山花袋等の手によつて、盛に我が文壇に、輸入されるに到つた。特に三十七八年の戦役を経て、やがて、人生のための藝術を一標目とする自然主義文學の隆盛を見るに到つた。國木田獨歩は、實に、その先達となつた第一人者で『武藏野』、『牛肉と馬鈴薯』、『酒中日記』、『女難』の如き、新鮮味の豊かな品を、遂次發表した。

二、歐州に於ては、早くも、十九世紀の初頭より、各國の文壇に自然主義の傾向著しく、彼のゾラ、モウアバツサン、フロオベル、ハウプトマン等に到つて、その全盛を極めた。自然主義の特長たるや、形式に於ては、從來の修辭的華麗を排して、技巧なき技巧を、眞の技巧なりとし、思想に於ては遺傳と境遇によりて生ずる個性を描いて、科學的眞實を得ることに努めた。その極、好んで、人生の病的性格を描き、主人公も、主要事件もない、斷片的描寫を試みて、得々たる者さへあつた。本邦に於ては、自然主義文學の勃興につれ、風教に害ありとの非難が高まつたが、時代好尚の傾くところ、滔々風をなして、明治四十年前後には、此の派の勢力は

その極に達するに到つた。而して獨歩は、その代表的作家として、嶄然群をぬいてゐた。

三、獨歩の性格と、その作品に就いて、相馬御風氏は、次の如く論じてゐる。

『獨歩は、世の所謂強い人ではなかつた。彼は、決して、意志の力で押し通した人ではなかつた。彼は、たゞ純眞な情熱によつて、動いて行つた。その弱さが、同時に、獨歩の強さであつた。獨歩はつひに悟らなかつた。情熱的なキリスト教的信教から出發して、彼は最後に、果なき生の苦悶、悲痛なる懷疑の底をはいた強烈な生の要求を以て、彼は人生のあらゆる苦しみにぶつかつて行つた。そこに彼の藝術が生れた。藝術から宗教へでなくして、宗教から藝術へが、彼の歩みであつた。宗教の殿堂から出て彼は、藝術の曠野へと進んだ。そして、そこでついに彼は倒れた。夢を失つたロマンチストの藝術……その悲壯な基調を持つ新現實主義として、獨歩の作品は、歴史的にも不朽の意義をもつ。而も、彼の藝術に一貫して、永遠に光輝を失はぬであらうところの生命は、彼その人の個性が醸し出した詩である。苦しみながらも惱みながらも、ついに聊かも汚されなかつた清い若さが、彼の詩に於て、不滅に輝くであらうと』。

明治文壇の一大明星として輝いた獨歩に對する評論として、最も當を得て居る。

四、縮刷獨歩全集全一冊は、主として田山録彌、前田晁の兩氏が、編輯の任に當つたもので、獨歩の小説及び新休詩を輯めたものである。獨歩の作品は、明治三十年五月、日光に寄寓した時、脱稿せる『源をぢ』を處女作とし、明治四十一年一月大久保の寓居に於て執筆した『二老人』が最終の作である。

附録として、精密なる年譜が録されてゐるが、彼の經歷と、その作品の順序を知るためには頗る便利である。  
(藤岡教諭)

## 三二、無憂華

(摘要) 國文學の部 九條武子著 實業之日本社發行 全一冊 布裝 四六判 三四五頁

昭和二年七月出版 定價二圓

(解説)

一、無憂華は、我が國女性の典型として、あまねく女性の欽慕的である、一代の麗人九條武

子夫人の名著である。本書の世に出づるや、近來の好著として一世の歡迎を受け、その名忽ち内外に喧傳せらるゝに至り、近くは演劇映畫にまで進出し、全國津々浦々に至るまですばらしい人氣である。

著者はその序文に、『父が逝いてこと廿五年になつた。私のをさない日から、すでに指示してくれられた道を、私はつゝましい氣もちで今日まで、あやまらず進んで來たのであつた。今この書を廟前にさゝけて、亡き父と語りたと思ふ』と述べてゐる。即ち本書は亡父への謝恩のために物した手向けである。又同じ序の一節に、『風に吹きよせられた、落葉のひと片ごとにも、思ひ思ひのなごりはこもる。この書は、芽ぐみ、そだち、かつ散つた、私の心の落葉をかきあつめたに過ぎない』と言つてゐる如く、本書は著者の心像である。その言ふ所まことに美しくまことに尊く、古來の聖賢の書に比して毫も遜色ないと、絶讃する人が多い程である。

二、著者の一生はさして永くなかつた。寧ろ短きに過ぎた。地上の生涯は四十二年であつた。然し、その内容に於ては極めて豊富であり、讀へるべきものゝ多い一生であつた。信仰、貞淑

慈愛、才藻、理智、麗貌、まことに世に稀なる日本女性の典型として永へに傳へらるべき婦人であつた。

夫人は京都西本願寺の法主であつた大谷光尊師の女で、明治二十年十月二十日の出世であるかくて夫人は伯爵家の令嬢として、更に西本願寺の姫君としてはぐくまれたのであるが、流石に双葉の頃より香しかつた。その上、天分豊かな姫は、理解あるお附添ひのもとにその高潔な人格的感化を、幼き日に、十分に受けたのである。二十二才の時、九條公爵の御分家たる良致男爵との結婚が成立し、二人は直ちに携へて英國に渡つた。然るに、夫人は自分さへ夢にも想つてゐなかつた前後十年にわたる孤獨操守の生活を餘儀なくされた。この長き離愁の十年を、夫人がいかに寂しく、なほいかに雄々しく耐へ忍んだのであらうか。世にも清らかな撓みなき情操の流れ、それは何よりも夫人の歌によりて度ましまかに現はれてゐる。この十年の永き間夫人は閑雅な朝夕を送つたのではなく、佛教婦人會の本部長として、或は地方の巡回傳道に、更に續いて内外より壓迫し來りし難局の裁決に、それこそまさしく大いなる受難苦闘の十年であつたのだ。

十年の孤獨留學の間、良致男爵もまた操守を尊く保ち、一貫して研學に全精力を傾け、大正九年の冬、英國からの歸朝があつた。かくして十年操守の寂しき思出を後に、夫人は男爵と共に東京築地の本願寺にて再び新たな家庭生活に入つた。男爵は正金銀行に勤め、夫人は今こそ一家の主婦として新たな道程に立つに至つた。

大正十二年九月一日の關東大震災に、夫人は都人士の例に漏れず、無一物になつた罹災者の一人であつた。夫人は我が身の災害を顧みるの暇なく、全國に三千餘りの分會と、五十萬の會員をもつ佛教婦人會の手を通じて、幼き兒童の着物を約十萬枚全國より集め、夫人自ら第一線に立つて、あまねく罹災者に配布した。

三、夫人の性格の氣崇さ、それはひとへに信仰の泉より湧き出た宗教的情操のいたすところである。その崇き淑徳を慕ふ各地の人々より招かれて、北は樺太より西は九州に、殆ど全國の婦人會へ講演に出張してゐる。『信仰は人生の遁脱ではなく、光明への没入であり、生命そのものへの飛躍である。救ひの光の輝くところ、恵みのまゝに素直に生きてゆく信への旅立ちを讚美しよう』と。これが夫人の宗教觀である。

かくも信仰、貞淑、慈愛、才藻、麗貌の権化とも讃ふべき我が日本女性の典型である夫人は昭和三年の春、四十二歳のうら若き身を以て、浄土へ静かに歸り、今は夫人の生立ちの地である京都東山の太谷祖廟に静かに眠つてゐる。

四、本書には無憂華、歸命、ちぎれ雲、歌日記、洛北の秋の五篇が收められ、いづれも夫人の尊き心像である。

尙、夫人の歌集『薰染』を紹介する。實業之日本社出版、四六判、紙装、二五五頁、昭和三年十一月初版、定價一圓八〇錢。

夫人の書翰文を、佐々木信綱博士の編輯した『九條武子夫人書簡集』一卷をも、併せて紹介する。實業之日本社出版、四六判、布装、三一〇頁、昭和四年四月初版、定價一圓五〇錢。

夫人の傳記としては、山中峰太郎著『九條武子夫人』がよい。大日本雄辯會出版、四六判、紙装、四〇六頁、昭和五年一月初版、定價二圓。

(藤岡教諭)

### 三二一、希臘神話及北歐神話

(摘要) 外國文學の部 杉谷代水 中島孤島編著 富山房發行 全一冊 菊牛裁 布装

本文五〇〇頁 解説二〇頁 大正八年七月初版 定價二圓二〇錢

(解説)

一、何れの民族も原始時代に於ては、此の世界を一の活動と觀た。彼等は天上の日月星辰も、地上の山川草木も、悉く人間と等しく人格を具へ、人間と等しく、意志により働くと考へた。原始民族は、その特異の想像力を以て、種々の神話を構成したのである。殊に希臘人は、想像力に富んだ民族である。春光和ける日、彼等は、美しい花、亭々たる樹、涼々たる流を眺めては、是れ皆或偉大なるものが、その中に存在し、恐らくこの美しきものゝ中に神々が宿つてゐると考へた。又高いオリンパス山の頂には、最も偉大な神々が住つてゐて、天地を統べてゐると考へた。

二、その神々の首神は、ヂュピタアで高い玉座に居り、天地を主宰し、怒るときは雷火を發した。ヂュピタアの弟に、ネプチューンと云ふ海神があつた。その穩かなときは、船舶自由に航

行する事が出来たが、一旦怒るときは、その勢凄く巨瀾山をなすと云ふ有様であつた。

春の曙に紫雲棚引くときは、日の神アポロは常に驢馬を御し、東より西に轉じてゐるとなし、アポロの妹をジュノーと云ひ、女子の運命を護る女神であつた。マアズは軍神、マアキユリーは商人の守護神で、冠と斧とに翼を具へ、東西に飛翔すること夏雲の様であつた。ヴァルカンは鍛冶の神で、常に火山の頂に鍛爐を設けて精妙な器を造り、又デユピタアの命を受けて雷火を製した。

此の外數多の神々があり、オリンパス山上の宮殿に住ひ、雲中から下界を俯瞰し、時としては都府や田野に馳驅し、或は海洋を渡り、空中を飛びて、首神の命を奉じてゐたと傳へてゐる。

斯の様な想像は、印度にも北歐にも其の他の民族の間にも傳へられる神話であるが、希臘の多神説ほど、典雅で、優美なものは少ない。

三、南歐の諸邦——希臘、羅馬等は、美しい地中海に面し、氣候暖く、天は朗かに、野も山も青々とした國である。之に反して北歐——瑞典、那威、アイスランド等所謂スカンヂナビヤ地方に定住せるアリヤン人種の一支部の傳へる神話は、又特異の地位にある。その神話は、『エ

ツダ』及び『サガ』と稱する記録に依つて今日に傳つたのである。

四、神話の傳つた跡を繙ねるに、初め一地方の傳説として口から口へと傳承せられ、次第に發達して一の系統を作り、或は宗教的儀式中に保存せられ、或は彈唱詩人に口誦せられ、第三段に至つて文學を以て、記録せられたるものが多い。

五、西歐文學を味ふ者は、必ず一度希臘神話等に遡らねばならぬ。神話と聖書とは、その二大源泉をなしてゐるものである。殺風景な物質萬能の忙しい今の時代に、暫く功利を談ずることを忘れ、往古の民が自由にして恭々しい想像を逞うした跡を繙ねるは、興味あることで、同時に益する所も多大であらう。

本書は、もとポールルドウキンの希臘古譯を、故杉谷代水氏が譯補して、『希臘神話』と題して明治四十二年五月初版を出したものを、中島孤島氏が改訂増補し、更に『北歐神話』を加へたもので、文章明快、挿圖も豊富で、類書中隨一である。その解説も孤島氏の筆になつた有益の文字で、讀者を益する所尠くない。

類書には、野上彌生氏の『傳説の時代』(岩波書院定價三圓五〇錢)がある。之はバルフィンチ



の原文『エイヂ・オブ・フェアブル』の全譯で、記文正確明快の好著である。その他に、木村鷹太郎氏の『希臘羅馬神話』がある。氏はかゝる神話等に對しては一見識を有してゐる。(五十嵐教諭)

## 三三二、リヤ王

(摘要) 外國文學の部 坪内逍遙譯 早稻田大學出版部發行 全一冊 四六版 布裝 二七  
四頁 卷頭一四頁 明治四十五年四月初版 定價二圓五〇錢

(解説)

一、英國のシエクスピヤが、シエクスピヤの英國か、とまで云はれてゐる世界最大の劇詩人ウキリアム・シエクスピヤは、故郷ストラッドフォードを出奔して倫敦に出て、俳優となり、次いで劇作家となつた。彼の作『ハムレット』、『リヤ王』、『マクベス』等、三十五篇の戯曲は、獨り英吉利人の誇りであるばかりでなく、全世界の寶である。彼は人情の機微を捉へ、千種萬様の性格を躍動せしめてゐる。各篇に現はれた人物は、一人として類型なく、幾百千人すべて、夫々特異性を持つてゐる點は、實に驚嘆すべきものである。沙翁を稱して、萬魂詩人と謂ふは

宜なる哉である。十歳の少年より八十歳の老翁まで、年齢、知識、經驗、境遇に應じて、それ相當の興味を感じる點は、恐らく沙翁の作を措いては、他に類がないであらう。英國の文豪カーライルは、其著『英雄崇拜論』中に、彼を以て印度にも代へ難い寶と賞め、又十才にしてシエクスピヤを賞讃するが、年齢を重ねるに従ひ、益々彼を賞讃し、益々彼を了解して、終に百歳に至るも變らないと云つてゐる。

二、シエクスピヤの翻譯は、我國に行はれてゐるものが數種あるが、例へば、古くは淺野、戸澤兩氏のもの、新しきは久米正雄のもの、小山内薫氏のもの等があるが、坪内逍遙博士の全譯に如くものはない。博士は早大の講壇に、沙翁物を講ずること二十有餘年、加ふるに和漢洋の學に通じ、劇の精通家として、文筆の人として、實に推蔽百練の筆を驅り、遂に全集翻譯の大事業を完成した。之に對して、日本の讀書界は、滿腔の謝意を表すべき義務を負つてゐる。因みに、大正十二年春、英國皇太子殿下御來朝の際、全集中第一篇より第二十篇まで記念品として早大より殿下に奉呈してゐる。

三、(梗概)ブリテン王リヤは、高齡の爲め、其領地を三人の娘、ゴネリル、リーガン、コーデ

リヤに分配の意を洩す。正直で、實意の深い、三番目の娘コーデリヤは、姉達の様に口先ばかりのお世辭を云はず、又大袈裟な誓もせず、終に父王の怒を買ひ領土は少しも與へられない。その後間もなく、佛蘭西王と結婚する。他の姉娘の二人は、父王の老後を養ふ約束で、國土を等分して貰ふけれども、兩人はその約束を守らず、父王の供奉員を滅じたり、其の他、種々の悪計をめぐらして、リヤ王を追ひ出す。リヤ王は宿るべき所もなく、終に、荒野を迷ひ出で、大暴風雨に遭ふ。従者はケント伯と道化者とだけである。氣が狂つたりリヤ王は、グロースタ伯にも、好意を持つ様になり、爲めにリーガンの夫コーンウォール公は、伯に對する刑罰として、伯の兩眼をえぐり取る。グロースターは自殺しようとするが、誤解の爲めに虐待した長子エドガーのために救はれる。兎角する間に、コーデリヤは姉の奸策と、父の困難とを聞いて、老父を助ける爲めに、兵を率ゐて来る。愈々會戰となり、佛軍武運拙く敗軍し、コーデリヤとリヤ王は捕虜となる。コーデリヤは絞殺され、リヤ王は悲痛に堪へずして悶死する。ゴネリルは妹リーガンに對する嫉妬心から妹を毒殺し、後自らも刃に伏す、と云ふ筋である。要するに此劇は、五大悲劇中に於て、最も胸の裂けさうな思ひのするもので、リヤ王が、姉娘達の虚偽

の誓約に對する輕信に始まり、王の性格が其家一門の破滅を生む次第を叙してゐる。又一方、孝女コーデリヤの心情の優しさは、谷間の百合に比すべきものがある。 (五十嵐教諭)

### 三四、ヴェニス商人

(摘要) 外國文學の部

坪内逍遙譯

早稻田大學出版部發行

全一冊

四六判

布裝

二〇四頁

券頭二〇頁

大正三年六月初版

定價二圓五〇錢

(解説)

一、これは、沙翁が、三十二歳の時の著作で、彼の第二期喜劇時代に屬する作である。喜劇中で最も有名な、最も成功したる作の一つである。極めて不自然な傳説を、殆んど其儘に取り入れて、然も事件の發展、人物の性格描寫は、虚と實との間を巧に量し、少しも破綻せしめぬ許りでなく、此等の人物は、今尚ほ活けるが如く、殆んど吾々と時を同うして生息せるが如き感がある。沙翁劇の生命の永久な理由は蓋し茲に在るのではあるまいか。我國へは、「リヤ王」と共に、早くから知られ、井上勤氏の「人肉質入裁判」と云ふ標題で、公にされたのは明治十六年

である。

二、(梗概)、昔ヴェニスに、アントニオと云ふ富裕で、善良な商人があつた。彼は澤山の船舶を持つてゐて、遠くの國々と通商貿易をしてゐた。彼にはパッサニオといふ友達があつた。彼は、若い富裕なポオシヤ姫に、結婚を申込んであつて、アントニオに借財を頼んだ。處が此時アントニオの持船は、皆航海中で、之に應ずることが出来なかつた。そこでアントニオは、強慾な高利貸の猶太人シャイロツクから借財して、パッサニオに融通した。アントニオが、シャイロツクから借金する際、一定の期日に返済し、若し出来ぬ時は、己の胸の肉一ポンドを、罰金として提供する事を約束した。さて、パッサニオは、ポオシヤの邸宅に赴き、豫てポオシヤの父が、遺言中の言葉により夫を選定すべき方法とした、三つの函の中の、鉛の函を選んだ。それには、(吾を選ぶ者には、其の有する總額を、他にあたふるか、若しくは危うせざるべからず)とあつた。そこで彼は、結婚の承諾を得た。叶へた戀の喜も束の間、アントニオは負債を返すことが出来ず、猶太人から胸の肉一ポンドの要求を受けたとの噂を聞いて、兩人の心は鉛の様に重くなつた。その事件は、ヴェニス公爵の前に持ち出された。ヴェニス公は、いろ／＼

と調停の勞を執られたが、胸に一物あるシャイロツクは、肯き入れず、ついに法廷に於いて審理する事になつた。ポオシヤは、裁判官に紛して法廷に現はれ、先づシャイロツクに向つて、(慈悲は春の小雨の自らにして地を潤す)と、情理を盡して慈悲を説く。シャイロツクは、尙ほも肯き入れぬ。そこでこの若い裁判官は、法律による旨を宣し、アントニオに向ひ胸をひらく用意せよと命ずる。(ダニエル様の再来だ……若いには似合はん恐れ入つた賢明な裁判官様だ)と叫びつゝシャイロツクは、相手のアントニオに向ひ、『宣告だ！覺悟しろ』と立ち上る。こゝに於て機智に富めるポオシヤは、證書の『唯肉一ポンドだけ』の言葉を楯に取つて、切取る時、一滴の血をも流してはならぬと、シャイロツクに嚴命して、アントニオを救ひ、法律の定むる所によつて、猶太人シャイロツクの財産を沒收して了ふ。この法廷場こそ、此劇の最高潮(クライマックス)である。此劇は、この他に、シャイロツクの娘ジェシヤが、基督教徒ロレンツと相愛して走る一條、ポオシヤ家の三つの函と、其の戀物語等が織り混せてある。

三、全篇、和かな情愛に充ちた氣分を湛へた中に、冷たい鋭い強い風が、シャイロツクを圍んで吹いてゐる。ポオシヤは、沙翁の描ける、最も高尚の性格の一人であり、滿延、激昂の極點

に達した論争の中に、現はれ、冷靜な心を保ち、且つ機智縱横、神の如き判決の手際は、男子も及ばぬ所である。アントニオは、家富んで、然も品性高潔で、又友俠の氣厚きは、賞すべく老猶本人シャイロツクの、老猶貪慾は憎むべきよりも、寧ろ憐むべきものがある。要するに、老猶本人が悲痛の涙を絞る毎に、氣味よけに笑ひ得る喜劇で、吾々に、色々の人生の問題を提供してゐる。

(五十嵐教諭)

## 三五、ハムレット物語 マクベス物語

(摘要) 外國文學の部 横山有策編 婦人之友社發行 全一冊 四六判 布裝 一七二頁  
沙翁劇全部の梗概及小傳九三頁 昭和四年九月出版 定價一圓五〇錢

(解説)

一、「ハムレット」及び「マクベス」は、「オセロ」、「リヤ王」、「ロミオとジュリエット」と共に、シエタスピアの五大悲劇の一である。原作は、三百年餘年前の英語で書かれ、原文のまゝで味

ふことは困難である。散文に書き改めたものに、チャールズ、ラムの「テールズ、アラム、シエタスピヤ」(沙翁物語)がある。従来我が國に行はれたものは、大抵之を翻譯したものが、又は翻案したものである。本書は、早大教授横山有策氏の筆になつたもので、最も新らしみのある沙翁物語で、類書中の白眉である。卷末の、「沙翁劇全部の梗概」及び「シエタスピア小傳」には氏が嘗て沙翁三百年祭の際、早稲田文學誌上を飾つた貴重な文字で断學愛好者にとりて、此の上ない手引である。

二、「ハムレット梗概」

殺されたデンマーク王の亡靈が、夜々城頭に現れて、王子、ハムレットに現在王位を奪ひ取り、且つ先王の妃を妻とせる、ハムレットの叔父、クロードイアスに對する復讐をすゝめる。復讐を實行するのは、實に至難な事である。故に、ハムレットは、この企を隠す爲めに、偽つて狂人となる。この變化を最初に氣附くのは、王子の愛人オフィリヤ(侍従長の娘)である。王子は、偶々族役者の一行を引見して劇を宮廷で演ぜしめる。その筋は、善良な先王が世を去り邪悪な新王が位に即く顛末を仕組んだものである。演劇中にハムレットは、王の顔色の變する

を見、亡靈の言葉の通りであることを知る。

彼の母なる王妃も亦、この劇に心亂され、彼を呼び寄せて非難する、が王子は却つて、この非難に報ひるに非難を以てして、母にその罪を悟らしめる。

國王クローディアスは、ハムレットの追放と、殺害とを企てる。けれども、その結果は、思はずの結果を招く、即ち、ハムレットは、英國に渡る途中から歸宅して、オフィリヤが父の死と愛人に別れた悲みとの餘り、發狂して死んだことを知る。オフィリヤの兄レリアティーズは其の父と妹の爲め、復讐を試み、ハムレットを殺さうとする。王は之を知つて、兩人をして劍闘の試合をさせる。表面は試合であるが、レリアティーズをして、ハムレットを殺さしめようとするのである。レリアティーズは、目的を達する。併し同時に、彼自身も斃れ、國王も、ハムレットの毒を塗つた刃に突き刺される。王妃は、國王が、ハムレットに飲ませようとした毒杯を、誤つて傾けて死ぬ。かくて王子は父の約束を履行し、満足して死んで行く。

### 三、(マクベス梗概)

スコットランドの大將マクベスは、凱旋の歸路、三人の魔女に遭ふ。彼等は、マクベスに、

スコットランドの王冠を約する。この豫言は、マクベスと其の夫人とをして、國王ダンカンの身に危害を加へる企を抱かせる。國王は、マクベスの城に赴かれて弑せられた。その二王子は國外に逃れた。そこでマクベスは、罪を二人の従者と二王子とに歸す。蓋し、自らに疑のかゝることを、懸念したからである。斯くてマクベスは、王冠を戴く、新王マクベスは、部下をして將軍バンコウを殺させる。バンコウの亡靈は、マクベスの催せし祝宴の席上に現はれ来る。マクベスは魔女等を訪ひ、更に豫言を聞いて、自分が魔法の力を受けてゐると思はせられる。故に先王の味方にして、彼に反抗の帥を起さうとしてゐる敵の徒黨に對して、彼は悲しい戰爭を挑む。敵將マクダフ、遂にマクベスと會戦する。自ら魔力を得てゐると思つたのは全く間違で、マクベスはマクダフと單騎相戦つて斃れる。

四、原作の翻譯として、左の二書は名著である。

○坪内逍遙譯 「ハムレット」、「マクベス」 定價各金貳圓五〇錢 早稻田大學出版部

○森 鷗外譯 「マクベス」 定價金貳圓五〇錢 警 醒 社

これは獨文譯より重譯せるもの、譯文正確、且つ巧妙を極め前書と共に併せ讀むべきもの。

尙ほチャールズ、ラムの「テールズ、フラム、シエクスピヤ」を譯せるものには、次のものがある。

○小松武治譯「沙翁物語集」 大 鐙 閣 金貳圓五〇錢

○（見靜）櫻譯「新譯沙翁物語」 文 獻 書 院 金四圓 （五十嵐教諭）

## 三六、ドン・キホーテ

（摘要） 外國文學の部 セルヴァンテス原著 片上伸譯 新潮社發行（世界文學全集第四篇） 全一冊

四六判 脊布裝 五〇六頁 昭和二年五月出版 定價一圓

（解説）

一、英國の沙翁が、老成期の劇詩を、盛に書いてゐる頃、スペインではセルヴァンテスが、世界の奇書といはれる、彼一代の傑作、ドン・キホーテを書いてゐた。

沙翁が死んだのは、一六一六年の四月二十三日であるが、其の全年全月全日に、セルヴァン

テスも他界したとは、實に奇縁である。

沙翁の作品が不朽であるは、言を俟たないが、廣く讀まれた點では、ドン・キホーテは遠くその上に出てゐる。聖書以外では、これ程廣く讀まれた書はないと、云はれてゐる。此作の前半は、一六〇五年に、又後半は、一六一五年に出たが、忽ち英、佛、獨、伊の各國語に譯され今日では、七百種の譯書が出てゐると云ふ。此作には、ユーモアが溢れてゐる。古來文學に描かれた人物の數は、多いが、ドン・キホーテ位滑稽な人物はない。ロシアの農民といへば、無智で、吞氣屋の標本視されてゐるが、今から七十年前、そのロシアの農民の間にさへ、ドン・キホーテといふ名が、滑稽な人物の異名として通用してゐたと、ツルゲネフといふロシアの文豪が云うてゐる。

二、（梗概）、西洋武士道の花であつた勇ましい騎士も、時代が變るにつれて、忘れられてしまつた。處が、スペインに、昔の騎士に心酔した醉狂な田舎紳士があつた。彼は武者修業を思ひ立ち、ドン・キホーテと名乗り、甲冑に身を固め、驚馬ロシナンテに跨り、一簾の騎士氣取りで、出立つたところが、昔の騎士には、必ず尊崇してゐる貴婦人があつて、その人の爲めには

身も魂も捧げたのであるが、ドン・キホーテにも、斯様な貴婦人がなくてはならぬ。彼は、相識の田舎娘を、貴婦人とあがめた。又正式に、騎士の位を、受けねばならぬ。そこで、最初に宿泊した旅館の主人に請ひ、衆人嘲笑の下に、滑稽極まる叙爵の式を受けて、騎士の資格を得たと喜び、只管騎士の俠氣を示さうとした。普通の旅客を見ても、危難の身に迫れると誤認し大風車の建てるを見て、巨人我れに敵するものと考へ、之に對つて突撃を試みて、大失策を演じた。後に到り、サンチョ・パンザといふお目出たい男を僕として、諸處を放浪し、或時は遠島征伐を試み、或時は、狂人扱されて、監禁の身となり、獨り威張りの冒険を、盛に試みたが、結局、郷里に歸つて、病床に臥し、狂熱が冷めて、無意義な騎士生活の非を悟り、常識の紳士として永眠する。

三、以上は、全篇の大義である、ドン・キホーテは過去の空想に生きて、現實を眼中に置かない馬鹿馬鹿しい人間で、彼の一舉手一投足は笑はずには居られぬが、而かも、一身の利害を度外視して、義の爲めに弱きを扶ける騎士道の精神には、讀者は一掬の涙なしには讀過出来ぬ。彼はまことに、愛すべき純良な人間である。原作は、中古のスペイン語で書いてあるので、原

文について味ふ事は不可能に近い。本書は全篇の前半を譯者片上氏が、英文譯書から重譯したものである。本邦で出版されたドン・キホーテの譯書は、古くは博文館出版松居松葉氏の純奇翁物語を始めとし、他に二、三種あるが何れも全譯ではなく、抄譯若しくは書き直しである。往年、文部省の事業として、泰西文學の名作を翻譯出版する計畫があつた時、委員の一人島村抱月氏が、ドン・キホーテを擔當する事となり、島村氏の監修の下に、この翻譯を試みたのが片山氏であつた。片上氏は大正四年この事業を完成して、出版に附したが、その後二回の改訂を経て、世界文學全集中に加へたものが本書である。譯者は原文特有の風格を保たんと、つとめて、平明な調子に譯出した。今は、島村氏も、片上氏も、故人となり、本書はこの人達の記念となつた。

### 三七、ミルトン 失樂園物語

(摘要)

外國文學の部

中山昌樹著

婦人之友社發行

全一冊

四六判

布裝

二六二頁

大正十五年四月初版 定價一圓五〇錢

(解説)

一、三千年にわたる泰西文化は、幾多のすぐれた詩人を輩出した。就中、不朽の大宗教的詩人を、二人まで出してゐる。それは、云ふまでもなく、伊太利のダンテと、英吉利のミルトンとである。前者は、その「神曲」のうちに、人間經驗の、最も美しいものと、最も聖きものとを具現し、後者は、「失樂園」のうちに、執拗窮りない悪魔的意志と、之に對する又窮りない神の愛と、而してその間に挟まれた人類の運命と、墮落と、救済とを、取扱ひ、聖書及聖書に關する傳説がその基調になつてゐる。我々は、ミルトンの雄大なる構想と、深奥な學識と、練熟した手腕には、今更乍ら敬意を表さずにはゐられない。

原作失樂園は、十二篇から成つて居り、一六五八年、ミルトンが五十才の時に書き初め、一六六三年に完成した。後改訂を加へて、一六六七年、彼が五十九歳の時に出版された。彼が心血を注いで書いた此の大詩篇も、當時僅か五磅にしかならなかつたのである。

二、『梗概』、世界開闢以前、神の存在と榮光とを、根本から覆してしまはうと云ふ非望を抱い

たサタンと、其一味の墮落した天使等は、天國を追はれ、燃える海岸に集つて、神々に對抗して、天國を奪ふ計略を謀つた。神が新に創造した世界を襲撃して、神の寵兒人間の始祖アダムとエバを誘惑して、神に背かせて、間接に、而も最も有効に、神への復讐をすることを主張した。其の一味の者は、皆この提議に賛成した。併し、この至難な任務を、誰が引受けるかが問題となり、結局サタンは姿を變へて、エデンの園に忍び込み、アダムとエバの様子をうかがふことに努めた。これより先、神はアダムとエバが、悪魔の誘惑の手に墮落することを慮り、假令、人間が、一度墮落しても、恵みを與ふべき事を側の神の子——基督——に告げる。一方サタンは、エバの夢に、先づ誘惑を試みつゝあつたのを、樂園の門を守るガブリエルに發見されて、樂園を逃ける、神は天使ラファエルを遣して、豫め警告を與へる。

ラファエルは、アダムの間に應じ、その敵の本性を明らかに告げる。悪魔等と天使達との戦況を、ラファエルは細かに説く。

神の子メツシャが、三日目に魔群を一蹴して、天の城壁から、地獄の底に、悉く彼等を追ひ落す。アダムは、樂園に就いての種々の印象や、エバとの楽しい思ひ出等を、神へ感謝して、



天使ラファエルに語り聞かす、ラファエルは、アダムに訓誡を與へて去る。悪魔はあらゆる機會を利用して、誘惑を試み、終にエバは、その誘惑に落ちて、智慧の木の実を先づ喰ひ、アダムにその次第を語る。アダムは、エバの救ひ難き罪を犯したのを知り、愛する妻故に、死なば諸共と思ひ、自らも、禁斷の實を喰ふ。サタンは陰謀の成功を、薄氣味悪く笑ふ。神は、人間の己み難き罪を憫み、メツシヤを送つて、この違犯者を審判かせる。罪と死とはサタンと共に人間の世界に入り込む。勝ち誇つたサタンは伏魔殿に歸る。メツシヤの斡施で、神はアダムとエバとの懺悔を聴く。けれども、樂園に留まることは許されない。一隊の天使と共に、ミカエルを遣つて、兩人を樂園から、追放の命令を傳へる。エバは、痛々しく嘆き悲しむ、ミカエルは、救世主基督の出現に依つて、人間の罪は淨めらるべきことを語る、天使達はアダムと、エバとを、エデンの園の東の門の所につれて行き、遂に彼等兩人を樂園から追放して、消え失せてしまつた。二人は今しがたまで、己の幸福の住居であつたバラダイスが、焰の劍によつて護られてゐるのを眺めた。そして彼等の前には、廣い世界が擴がつて、何處に彼等の慰ひの場所を見出すべきか。二人は手を携へて、孤獨の道へとさすらつて行つた。

復樂園は、失樂園の續篇である。原作は一六七一年の作で、四卷より成つてゐる。キリストが、悪魔サタンの誘惑に勝ち、悪魔は地獄に逃れ、天使達多數現はれて、キリストを美しい露に連れ行いて、その勝利を祝福する。かくして、アダムとエバとの罪によつて失はれた樂園はキリストの力によつて回復されたのである。(馬太傳四章參照)尙、本書に加へてある「コウマス」は、假面劇の形を以て、貞操、敬虔の心、寛容、勇氣等の美德を頌詠したものである。ミルトンが二十五才の時の作である。

三、本書の外に繁野天來氏著「ミルトンの失樂園物語」(富山房發行世界通俗文學の一篇)がある。繁野氏は、ミルトンを深く研究した人で、新潮社發行世界文學全集中の同氏の失樂園の全譯は、坪内博士の折紙付だけあつて、類書中の白眉である。(五十嵐教諭)

## 三八、ロビンソン漂流記

(摘要) 外國文學の部　ダニエル・デフォー原著　平田禿木譯　富山房發行　全一冊　五六判  
脊布裝　本文四二八頁　序文一六頁　挿畫三色版五葉　三色刷凸版三葉　石版四葉

大正六年十二月初版 定價二圓八〇錢

## (解説)

一、十七世紀から十八世紀にかけて盛に文筆を揮つた英國文壇の才人ダニエル・デフォーが、五十八才の時書き上げた探險小説がロビンソン・クルーソー漂流記である。この作は、一水夫が孤島に幾年かを送つた實談から思ひ付いたもので、如何にも眞實らしく、又頗る面白く書かれてゐるので、今日なほ『ガリヴァ巡島記』(スウキフトの傑作)と共に、少年時代の愛讀書になつてゐる。この作はいたく人氣に投じ、デフォーの『ロビンソン漂流記』でなくて、『ロビンソン漂流記』のデフォーともいへる程、彼はこの作に依つて文名を上げたのである。

二、この物語が英國の少年少女を引付ける力は、すばらしい。さながら、母親の膝の上で聴き初めた桃太郎のお伽噺が、日本の少年少女を引付けるのと同様である。従つて桃太郎の話を知らぬ日本の子供がなほ同様に、ロビンソンの話を知らぬ英國の子供はない。元より幼稚な通俗な物語で、文藝上の作品として見れば價值は低いけれども、少年期の讀物としては極めて特色のあるものである。殊にロビンソンが絶海の孤島に於ける孤獨生活の淋しみや、生活の必要に

迫られて生れた獨創工夫の力や、神を慕ふ心のきざしや、絶大の忍耐と勇氣、希望と感謝、義侠心の發露、人間愛などは、聞いて面白く、讀んで興が付き、且つ修養上に資するところ頗る大である。一体ロビンソンは、英國魂の男であつた、英國民性を充分發揮した快男子であつた。だから子女にこの一巻を讀ませることは、英國民を知らせる上に偉大な効力がある。家庭文庫として缺くことの出來ぬ讀物である。

三、(梗概) ロビンソン・クルーソーは相當の家庭に人となつた青年であつたが、世界を股にかけて飛び歩かうなどと突飛な考を起し、船乗りになることを望んだが、昔氣質かたきの兩親はどうしても許さぬので、とうとう逃亡して船乗りになつた。ところが船が難破して仲間皆死んでしまひ、彼のみ不思議に助かつて離れ小島に漂着した。幸なことには難破した本船が海岸近く漂着してゐたので、筏を造つて、本船から食料品や、衣類や、鐵砲を運び、岩壁の下に住居を構へて孤獨生活を始めた、彼はこの島の王であり同時に人民であり、主人であり同時に僕であり大工と左官と農夫と漁夫と獵人と裁縫師とを一人で兼ねた。友としては船から連れてきた犬と猫と一羽の鸚鵡があるばかり。この島で幾星霜を送つた。その間にはひどい病氣もした。人の

顔を見ることなく、人の聲を聞くことの出来ぬのが何より寂しかった。聖書を読んだり、鵓と問答したりして慰めを求めた。骨を折つて造つたボートで島めぐりをした。色々の冒険を試みたが、この島についてから二十五年目に、始めて人影を見た。人の肉を食ふ恐しい蠻人共がこの島に上陸して、若い男を殺さうとするのを見て、蠻人共を打倒して若者を救つた。若者はロビンソンの義侠心に感激して、彼の僕となつた。二人は大の仲よしになつた。始めて孤獨生活の寂しみから逃れた。それから又二年の月日がたつと、人を食ふ蠻人が又上陸して一人の白人を殺さうとした。主従は蠻人共を打殺してこの白人を救ひ、偶然僕である若者の父をも救ふことになつた。それから暫くすると、今度は、英吉利の船が一艘近づいてきた。それは船長に叛逆を企てた水夫等が、船長を陸上に連れてきて殺し、船を奪ひ取る策略をめぐらしたのである。ロビンソンは悪漢共を殺して船長を救ひ、その船に便乗して英國に歸つた。國を出てから三十五年目であつた。

四、本書の譯者平田禎木氏は、英文學に精通し幾多の著書がある。本書の譯文はすらくと讀み心地がよい。數多の挿畫は何れも清楚で、裝釘又頗る美しい。

### 三九、噫 無 情

(摘要) 外國文學の部

キクトル・ユーゴー原著

黒岩涙香譯

明文館發行

全一冊

三五判

模造布裝

六三二頁

大正四年九月縮刷初版

昭和二年三月百六十五版

定價二圓四〇錢

(解説)

一、原著者ユーゴーは、佛蘭西の多恨多涙の文學者であつたが、四十四歳の時、國事に悲憤慷慨の餘り、文筆を棄て、政界に身を投じた。ナポレオン三世のクーデター(非常武斷政策)に對し、猛烈な攻撃をしたのが因で、國外に逃亡したが、その永い流浪の年月の間に、五年間の冥想と思索で成つたのが此の物語である。即ちユーゴーが、五十幾歳になつてからの作であつて彼の澤山な著作中、最も成熟したものである。

二、此の物語は原名をレ・ミゼラブルといふ。一八一五年から、一八三二年にかけての、佛蘭西の裏面史とも云ふべきである。ウオーターローの戦敗から出發して、一八三二年の革命まで社會組織の缺陷、人間の無智、貧困、饑渴、誘惑、墮落などの様々な社會相、かくて遂に自由の叫び、正義の争ひの起る経路を赤裸々に描き出したものである。當時のフランスの下層階級が

苛酷な制度や習慣の爲めに、如何にどん底生活に墮し、如何に凄惨を極めたか、實に驚歎する程である。この物語を讀んで、吾々は、この様な社會、この様な時代に生れなかつたことを、衷心から仕合せであると思ふ。同時に、この様なあさましい世の中をば、此の地球上の何處にも永久に現出させぬやうにせねばならぬと感ずる。これが人間としてのお互の義務であると思ふ。この意味で、この様な物語も讀んで置く必要を感ずる。

三、(梗概) 時は一八一五年十月初旬、ウォータローの敗戦の悲報が、頻りに傳はる、或る日の夕ぐれ、フランスの東南端の、ダインといふ田舎町を、つかれきつた旅人が、よろ／＼と歩いてゐた。ポロを着て、泥靴をはいて、深く被つた古帽子の下には、鬚が柔ウ／＼と伸びてゐた。どこの宿屋でも泊めてくれない。餓えと疲れで、町外れの路傍の石の上に横はつてゐると、教會から出て來た親切な老婦人に、教會裏の家を教へて貰つた。其の家は、七十五年の長い生活を、神に捧げた高僧ミリエルの質素な住居であつた。

さて此の旅人は、ジャン・バルジャンである。元々彼は、無教育な一青年であつたが、姉の子供達の餓えを見兼ねて、パンの一片を盗んだ爲めに、十九年間の牢獄生活を送らなければなら

らなかつた。四日前に、ツーロンの牢獄を出てきたが、誰も相手にしない。この日も、朝から何にも食べない。野良犬よりもあさましい身の上である。高僧は彼を兄弟としてもてなした。この家のたつた一つの寶である銀の燭臺を立て、銀の皿で食事を共にした。地獄で佛とは全くこの事である。その夜ジャン・バルジャンは生れて始めて、柔かな床の上に寝た。夜中に眼をさますと、悪心がむら／＼と起り、銀の皿を盗んで逃亡した。夜が明けると間もなく、憲兵につかまつて高僧の家に、ひきたてられた。高僧は、咎めないのみか、銀の燭臺まで彼に與へて眞人間になれと言つて、懇々と諭した。ジャン・バルジャンは郊外に出たが、こゝで又子供の銀貨をごまかした。所が、泣き悲しむ子供の聲は、いつまでも彼の身に残つた。流星の悪黨も始めて悔悟の涙を流した。夜中にミリエル僧正の門前にきて、心からの懺悔をして立去つた。斯様にして彼は、彼の生涯の最大苦悶の第一回目である神と悪魔との戦ひに勝つた。

四、ミリエル僧正の高徳は、ジャン・バルジャンをすつかり改心させた。彼は勇ましくも、贖罪の生活に入つた。その年の暮れ、モントリール市に、一人の旅人がきて寶石の模造品の製法を授けたが、それが因で、この市は非常な繁榮を來たした。この旅人は、市民の爲めに、私財

を投じて、色々有益な事業を行つた。市民は彼を徳とし、再三彼が辭退するのをきかず、遂に彼を市長にした。さて彼こそは誰あらう、ジャン・バルジャンその人であつた。

五、モントリールから、ウォーターローへ通ずる道の中程のモント・ファメルといふ小さな町に、軍曹旅館といふ宿屋があつた。主人のテナルデーは軍曹であつたが、ウォーターローの激戦の日、死傷者のポケットから金品を盗んだ奴で、一佐官のポケットに手を入れた時、死んだと見えた佐官が、息を吹きかへして、此奴を命の恩人と考へ違ひして、禮を言ふたところから軍曹旅館といふ看板をかけて、悪事を重ねてゐた。こゝに、ファンテーヌといふ不幸な女工が私生兒のコゼットを連れて、通りかゝり、旅館の主婦に、子供を月六法で預つて呉れと頼む。強慾の主人のテナルデーは、七法で半年分の前金をとつて預ることゝなつた。ファンテーヌはモントリールの市長直營の工場に働いて、日々送金してゐたが、軍曹旅館の夫婦は、コゼットを虐待するのみか、養育料を、七法から十法、十五法とせり上げ、はては、コゼットが病氣だからと欺いて、八十法の大金を送れと言つて來た。この間に、ファンテーヌは誤解の爲めに、工場から解雇され、手仕事で生計を立て、食ふものも、着るものも、極端に節約し、わが金髪

をさへ、惜しげもなく賣つて、我が子のために送金したが、八十法の要求を受けて、途方にくれた。思案のはて、わが美しい前齒を、抜いて賣つて、テナルデーに送金した。テナルデーからは、更に百法の要求がくる。彼女は過勞の餘、肺病になる。遂には醜業婦に墮落して、警官に捕はれる。この時偶然慈悲深い市長の手に救はれる。病院に收容されて、手厚い看護を受ける身となつた。

六、然しファンテーヌの病氣は、日に日に重くなる。頻りに、コゼットに會ひたがる。市長はテナルデーに手紙をやつて、コゼットを引取らうと談判したが悪黨のテナルデーは、なか／＼應ぜぬ。結局、市長自ら出張して連れ歸る手筈をした。所が、法律一點張りで、血も涙もないジケベルといふ警官が、最初から、市長の身の上を、怪しいと睨んでゐたが、此の男が、蛇のやうに執念深く、市長につき纏ふてゐた。こゝに又市長の上に一大事が起つた。それは今度、破獄囚で稀代の悪漢のジャン・バルジャンなる者が、他所で捕へられ、明日は愈々、その裁判の確定する日である、といふ事がわかつた。市長が黙つてさへ居れば、此奴が身代りになつて死刑に處せられて、濟んでしまふ。けれども許さぬのは、市長の良心である。市長はわが身の

上よりも、寧ろ哀れなフアンテレーヌ母子の事が、瞬時も心から離れぬ。彼は一夜を苦悶の中に明かした。良心と誘惑とのこの戦ひ、これぞ彼が生涯の最大苦悶の、第二回目であつた。終に市長は、堅い決心をして、一日に五十里走る馬車を雇つて裁判所に自首した。次の日五十里走つて、モントリールに歸つて、フアンテレーヌの病床を訪れると、病人は、はや瀕死の容体で頻りに我子の名を呼んでゐる。其處へジケベルが來て、市長を捕縛する。フアンテレーヌは絶望して死んでしまふ。

七、再び牢獄生活が初まつた。然し彼は巧みに獄を脱して、フアンテレーヌとの生前の誓を守つて、娘コゼットをテナルデーの手から取り返した。又、モントリールの市長時代に貯へた、七十萬法の金も巧妙な方法で藏つてあつた。彼はコゼットを連れて、パリの闇黒のうちに身を隠した。其處には、あらゆる事變が渦を卷いて、彼を取卷いた。警官の追跡、女修道院の生活、墓穴への冒險、悪漢の陥弄など想像もつかぬ程の恐ろしい經驗を重ね、絶大な人間力を盡してあらゆる困難を切りぬいた。

この間に、コゼットは成長して美しい娘になつた。ジャン・バルジャンは彼女を娘と呼び、

彼女は彼を父と呼んだ。コゼットは、眞の父にもまして彼に親しんだ。ジャンは、六十才の白頭翁になつたが、この年まで、まだ女性といふものを知らなかつた。彼はコゼットを授けられて、始めて、人生の温か味を知つた。枯木のやうな寂しい心の底に、神々しい愛の芽が育つてゆく。ジャンが、も一つの楽しみは慈善である。外出する時は、必ず小銀貨を用意して、貧民に施しをした。

八、然し、この楽しい日は、永くは續かなかつた。マリウスといふ青年がコゼットの愛人となつた。ジャンが掌中の珠は、無慘やマリウスのものになつた。これに氣付いたジャンは、大苦悶をし、遂に身邊の不安を感じて、娘を連れて英國へ逃れようと決心した。マリウスは、祖父が彼とコゼットとの結婚を許さぬので、絶望の極、一八三二年に勃發した革命軍に身を投じて死なうとする。マリウスを死なせて、自分がコゼットの愛を獨占することは、神のやうな高潔な心のジャンに出来ない。彼の心中には、第三回目の大苦悶が起つた。彼は終に、己れを棄て、マリウスを生かし、コゼットの將來を幸福にする事が、彼女を最も深く愛する所以だと達觀した。そこで、ジャンもマリウスの後を追つて革命軍に投じた。彼は瀕死のマリウスを背負つ

て、下水道の中を通り、底無沼を渡つて、祖父の家に送り届ける。半年の後、マリウスとコゼットは結婚した。ジャンの生涯中の、第四回目の大苦悶がきた。

それは、娘の將來の爲めに、自分の素性を愛婿に打明けねばならぬ一條である。彼は遂に告白した。冷遇された。そして寂しく死んでゆく。この時、マリウスは始めて、ジャンが自分の命の親であつた事を知り、彼の絶大の愛に感泣して、コゼットと共に、彼の臨終時に駆けつける。ジャンは二人の頭に手を置いて、神々しい笑顔で大往生を遂げた。

いつとはなく、彼の墓石に、こんな文字を書きつけた者があつた。

彼れ眠る、憂き節繁く生きたれど彼れ死しぬ。

最と愛しの者を失ひて、されど恨みず、安らけく、日の往くあとに、夜の來ること。

九、この物語の全譯には新潮社から出た世界文學全集中の、豊島與志雄氏の三冊ものがある。勿論、原著に忠實な譯本であるが、余り長いので、全巻を通讀するには、相當の時間と、精力とを要する。黒岩氏譯の本書は、寧ろ抄譯ともいふべきものであるが、譯者は、原著を十二分に讀みこなした後に、筆を執つたのだから、原著者の精神は、却て本書中に躍動してゐる。し

て又、譯文には、讀者の心をぐんぐん引付けて行く、偉大な力がこもつてゐる。本書は、黒岩氏一代の名譯であるばかりでなく、又明治年間の名譯の一であるを疑はぬ。解説子は子供の時分に、この物語が萬朝報の紙上に連載されるのを拾ひ讀みして、多大の感興を得たが、今日讀み返して見ても同様である。

この物語の中心人物ジャン・バルジャンは、絶大な人生の苦悶と奮闘して、最後の勝利を得た偉人である、贖罪生活に入つた後の彼は、神の業のやうな正しい、美しい、強い、そして寂しい一生を送つた。

社會の暗黒面を縦横に描出して、深刻な生活苦を赤裸々にさらけ出した物語の中に、一道の光明を投げるものは、ジャン・バルジャンその人の神々しい人格の輝きである。

## 四〇、ファウスト

(摘要) 外國文學の部 ゲーテ原著 森林太郎譯 富山房發行 全一冊 三五判 背皮布裝  
六八二頁 大正六年十一月初版 定價三圓二〇錢

## (解説)

一、「フアウスト」は、中世紀の有名な傳説を題材にしたもので、ゲーテが二十四歳から、死の前年の八十二歳まで、凡そ六十年間、青年壯年老年の三つの人生を経て完成した、世界に誇るべき不朽の名作で、彼の全生涯の生活、経験、學術、思想、情熱、即ち、彼の全人格は、この中に、明確に、遺憾なく、鑄込まれてゐる。ストリンドベルグの如きは『フアウスト』は、ゲーテの自叙傳であり、藝術の型に鑄直されたゲーテの日記である』、とさへ云つてゐる。而して本篇の主人公フアウストの、生涯を通じて現れてゐる最後まで努めて止まぬ活動性こそ、實にゲーテの所謂、「努めて止まぬものは神これを救ふ」と云ふ觀念の表示に外ならぬ。ゲーテの魂の發展は、この作の中に明かに跡づけられるが、「人はこの作を読むこによつて、自己の心の成長をはかることが出来る」。とも云はれてゐる程である。

二、(梗概) 「フアウスト」は二部の悲壯劇に分たれてゐる。先づ「天上の序言」で、神と悪魔メフィストフェレスとの問答があり、メフィストフェレスは人間界のフアウストを墮落させることを誓ふが、神は「よろしい、やつてみよ、併しいつかお前は、その不可能なることを知るぞ

善い人間は、よしや暗黒な内の促しに動かされてゐても、始終正しい道を忘れてはゐないものだから」と云ふ天上の序言中には、この戯曲の根本思想が横つてゐる。フアウストは、永い歲月、浮世の快樂を余所に、書齋に引籠り、哲學、醫學、神學等、あらゆる學問の研究に没頭してみたが、結局、心の満足を得ることが出来ず絶望の餘り、毒杯を仰がうとまで思ひつめる。この時に、メフィストフェレスが現はれ、彼の誘惑にとりかゝるが、その効がない。遂に妖女の魔藥を飲ませ、彼に青春の情が旺盛となるのをみて、マルガレエテと云ふ處女を近づける。フアウストは、彼女の清淨な姿を見て、愛戀禁することが出来ぬ。やがて彼は彼女の愛を得たが、肉慾の快樂に身も世も忘れ、次第に墮落の淵に陥つた。遂に、フアウストは、彼女の母と兄を殺害するに到り、一旦、メフィストフェレスと共にその地を立退く。一方、マルガレエテは、不義の罪に日夜煩悶する折から、罪の結晶たる子供を分娩したが、遂に發狂して我兒を殺し、冷い牢獄に放りこまれる。さて一度遁れたフアウストは、愛人を慕ふの餘り、牢獄に彼女を救ひに来るが、彼女は、今迄の罪滅しに、深く罰を受けると言ひ張り、フアウストの手を振り離す。メフィストフェレスは、フアウストを引立て、牢獄を去る。が、その時、懺悔により神



に心救はれたマルガレエテが、流石に愛戀の情にひかれて、『ハイインリツヒさんく』と叫ぶ聲が、遠く消え去る様に聞え、こゝに第一部は終つてゐる。第二部では、悪魔はファウストを大宇宙に導き、(第一部では小宇宙をみせたが)先づ手始めに、宮廷に入りこむが、こゝではからずも、ヘレネの出現を見、その美にうたれて彼が、思はず彼女の身体に觸れようとする、突如爆發起り、ヘレネの姿は消え、ファウストは、そこに昏倒する。その後、幾多の曲折を経てファウストとヘレネは結婚生活に入り、一子を擧げたが、その悦びも束の間、その子の形体の消失するに及んで、愛の絆をきられたヘレネの肉体も亦、消え失せて了ふ。さて、再び下界に戻つたファウストは、今度は、新國土建設の大事業を志す。中途、憂の魔女に息を吹きつけられて、盲目となるが、百折不撓の勇猛心を奮ひ起し、事業の遂行に向つて精進する。そして遂に、彼は高い理想に向つて努力する刹那の美を感じ、自己が世に残した痕は、永久に亡びないと信じ、その最高の瞬間を味ふと同時に、息をひきとる。さて、悪魔はファウストの靈を、自己の手に入れようとするが、その時、天使の群が降つて、悪魔の群と激しく戦ひ、ファウストの不滅の靈をのせて天に昇る。天使は、「絶えず努めて止まざるものを、神はこれを救ふ」と歌

ひ、既に悔罪女として神籠に浴してゐるマルガレエテは、マリヤの云ひつけで、雲の上に、再會の愛人ファウストを迎へる。

三、尙、森氏譯のファウストは、岩波書店からも、岩波文庫として出版されてゐるが、これは一部と二部が別冊になつてゐて、前者は六十錢、後者は八十錢。價格の低廉な點で、一般むきである。又新潮社發行の世界文學全集第七卷に、泰豐吉氏譯の「ファウスト」があるが、氏一流の平明暢達な譯文で普通の脚本体に書いてあるので、讀み易く、理解もし易い。その他類書としては「ファウスト」、松山悦三譯、イデテ書院發行、定價二圓二十錢、「ファウスト物語」茅野蕭々譯、岩波書店發行、定價二圓、等がある。

#### 四一、オルレアンの乙女

(摘要)

外國文學の部

シルレル原作

佐藤通次譯

岩波書店發行

全一冊

四六判

布裝

三五二頁

大正十五年十月初版

定價二圓

(解説)

一、原作者シルレルは、ゲーテと並んで、ドイツ文壇の双壁と稱せられた。劇作家としては、ギリシヤのソフォークレスや、英吉利のシェクスピアと、肩を並べるとさへ言はれてゐる。この幕は、彼の九大劇詩中第一の傑作とされてゐる、彼と親交のあつたゲーテは、この作の原稿を讀んだ時「他に比べやうのない美しさだ」と激賞した。果然、この作がドイツの各地で實演されると、素的な人気を博し、ベルリンでは四十年間に四百五十回も演ぜられた程である。

二、この作は、英佛兩國間に起つた百年戦役の後半を彩るジャンヌ・ダルクの史實に基いたものである。ジャンヌ・ダルク(一四一二年生一四三一年死)は、フランスの東北境邊の、ドンレミといふ里の農家に生まれた羊飼の少女であつたが、幼時から信仰の念が厚かつた。當時、フランスは、頻りに英軍に破られて、今にも亡びそうになつた。彼女は十三歳の頃から、不思議にも屢々神の示現を感じ、天使の聲を聞いたが、今や、神の命を奉じ、祖國を救ふ爲に起つた。十八歳の時フランスの太子チャールス七世に謁見し、其の授けた軍兵を率ゐ、甲冑に身を固めキリスト及び聖母を描いた旗をひるがへし、英軍を破つてオルレアン城の圍みを解いた。遂に佛軍は英軍を驅逐し、太子はランス市に入つて即位の大禮を挙げた。その後ジャンヌ・ダルク

は續いて戦功を立てたが、不幸にして英軍の虜となり、遂に邪教者なりとの宣告を受けて、ルーアン市場で焼き殺された。

これが史實であるが、シルレルはこれに種々變改を加へて、立派な悲劇を作り上げた。例へば、戯曲の外形に統一をつける爲めに、數年又は數十年を隔てた出來事をも短日月に縮め、少女の死後の事件をも生前に繰上げたりして、一篇の筋の完結を圖つた。又內的統一の爲めに、主人公ヨハンナ(ジャンヌ・ダルクのドイツ名)の精神の變りゆく様、即ち、彼女の起信、靈感、疑惑、克服、淨化の過程を描く上に、幾多の獨創、工夫をこらした。蓋し、史實が詩となるには、之を理想化せねばならぬのであるから、この點は詩人の自由に任せねばならぬ。

### 三、(梗概) 序幕 乙女の家郷 四場

豪農チボオ(乙女の父)が姉妹二人の縁談の整つたことを喜ぶと同時に末娘ヨハンナに人間味のないことを歎く。まさしく娘には、魔がさしたのではなからうか、やがて娘は魔の虜となつて、この父を悲しませることになりはせぬかと心配する。平素心から乙女を敬慕して居たレエモンといふ青年が、頻りに父親に乙女の辯解をする。ところへ近隣の農夫が町から歸つてきて

敵の英軍が破竹の勢で押寄せオアリアンを圍んだと話し、不思議の兜を手に入れた始終を語る。ヨハンナは、農夫の手から兜を取り、國王を助けて國難を救はねばならぬと叫び、郷土の山々に告別して立去る。

第一幕 フランス王の陣營 十一場

フランス王カール(チャールスのドイツ名)の弱腰に、元帥は愛想をつかして立去つた。フランス側の大立者デュノア伯が國王に苦諫する。そこへオアリアンの市民が王の救助を求めに来る。内には軍隊が離反せんとしてゐる。眞に内憂外患交々に來つた。王は絶望する。王妃アグネスは赤誠を披瀝して王を激勵する。王はすべてを運命に任かせて、船に乗つてロアールの對岸に逃亡を圖る。デュノア伯も見限をつけて去る。そこへ不思議な乙女の力で味方が大勝利を得たといふ注進が來る。王とデュノア伯が和す。乙女が入場する。そして靈感に依つて國王を救ひにきた顛末を語る。王も人々も驚歎する。

第二幕 英軍の陣營 戰場 十場

英軍の大將タルボットとフランスから寢返りを打つて英軍の味方するブルグンド公が、敗軍

が本で口論する。公は立腹して立去らうとする。これも英軍に味方する太后イザボオ(フランス王の母)が、兩人に和睦をさせる。今度はタルボットとブルグンド公が一緒になつて、太后に喧嘩を賣つて遂に太后を追出す。英軍は今日の敗戦の恥辱を雪ぐ爲め進撃する。英軍は乙女の神々しい姿を見て頼ひ上つて逃げる。タルボットは味方の弱虫を斬つて、頽勢の挽回に力める。英軍の若侍モントゴメリイは乙女に憐みを求めたが、許されず、戦つて死ぬ。次ぎて乙女はブルグンド公に廻り會ひ、眞心を以て公を説き伏せ前非を悔いさせる。

第三幕 マルヌ河畔 フランス王の陣營 十一場

デュノア伯、將官ラ・イールの兩人、互に乙女を得んと争ふ。ブルグンド公國王に對面して悔悟の狀を示す。ヨハンナのとりなしで、公は父の仇チュ・シヤテル(將軍)と和睦する。人々乙女の高潔な心情を讚美する。とりわけ乙女を争ふデュノア伯とラ・イールの兩人は王の裁量に任せようとする。王妃も大僧正も國王もヨハンナの心を動かさうと様々に助言する。だが靈感の宿る乙女は、そんな考は露程もなく、きつぱり斷る。敵はマルヌ河を越えたといふ。乙女は感奮して駆け出す。英軍の大將タルボット傷き倒れる。黒装の騎士乙女と渡り會ふ。ヨハン

ナ身体の自由を失ふ。騎士消失す。生残つた英將ライオネル、乙女と戦ふ。乙女、ライオネルを殺すに忍びず、心ならずも情をかけて逃がす。乙女も傷いて味方に助けられる。

第四幕 戴冠式 場

十三場

フランスで戴冠式が挙げられようとする。フランスは國を擧げて戦勝に歡喜する。乙女ヨハンナのみは憂愁にくれる。ライオネルと渡會つた時、不思議にも、正義に勇む神の力が失せて人間界の情愛の爲めに、敵を殺すことが出来なかつた悔恨が乙女を苦める。今更、國難を救ふ爲めに選ばれた身を悲しく思ふ。王妃アグネスが乙女を慰める。式の用意が出来たので、人々乙女を捜す。氣の進まぬ乙女に旗を持たせて式場にせき立てる。この時今日の盛典觀に遙々郷里から出て來た乙女の二人の姉が、行列に加る妹の姿を見る、やがて乙女が式場を逃れ出て、姉達に會ひ以前のやさしい慎ましい娘になつて、姉達を喜ばせる。

場面變つて王冠を戴いた國王は人民の群に挨拶し、乙女の功績を讃へる。この時乙女の父親が現れる。乙女はなつかしがつて父よと呼ぶ。だが父親は所構はず、娘を罵つて、惡魔に魂を賣渡した痴者だとわめく。人々は色々とりなし、乙女に、身の潔白を宣べよと勸める。だが乙

女は沈黙を續ける。烈しい雷鳴がして一同退く。最後迄乙女を信じたチユノア伯がヨハンナに手を求むるが應じない。乙女が在郷當時深く乙女を信じてゐた青年レエモンが現れて乙女を助け去る。

第五幕 人里離れた森林

十四場

レエモンは始めて乙女の潔白を知る。そして彼は先きに恐ろしい罪を著せられながら乙女が黙つて居ることを歎く。やがて乙女は英軍に捕へられる。先きに乙女から命を助けられたライオネルは、今や乙女の命を助けて我がものにしようとする。フランス軍は乙女を失つてから頻りに敗戦する。レエモンが現れて乙女の潔白を誓ふ。フランス軍は之に力を得て、乙女を救はんと進撃する。ライオネルは出て應戦する。一度ライオネルの情けに心動きかけた乙女は、直ぐ氣を取直して、鎖に縛られた身で佛軍を激勵する。やがて佛軍が崩れかゝる。國王が虜になる。乙女の祈りは神を動かした。鎖を切つて電光の早業で、逃足ついに佛軍を盛返させる。英軍は大敗して太后は虜となる。國王は助かつた。だがヨハンナは傷き倒れた。が忽ち眼を開いて我身の潔白を證し、旗を取つてすつくと立ち天を仰ぐ。かくて旗を取落し、その上にうつ

ぶせになる。

西、ジャンヌ・ダルクを題材とした詩人は、シルレルの外に沙翁、ヴォルテール、バーナード・ショウの三人がある。沙翁は、彼女の敵たる英國人の立場から、彼女を魔女として『ヘンリー六世』中に登場させた。ヴォルテールは同國人であるが、宗教的靈感を嘲つて、彼女を滑稽化した。ショウは、彼れ一流の辛辣な人世觀に依つて、彼女及びその周圍に鋭利な解剖を試みた。しかし、純粹に彼女の神々しい姿、美しい姿を表現したのは、シルレルであつた。

佐藤氏の譯文極めて流暢である。原作は音律上の美を以て聞えてゐるが、譯者はその調子を移す點にも相當成功してゐる。

## 四二、アンクルト ムスケビン 奴隸トム

(摘要) 外國文學の部 ストウ夫人原著 永代美知代譯 誠文堂發行 全一冊 四六判  
布裝 六二六頁 大正十二年十二月初版 定價三圓 (半價提供中)

(解説)

一、今を去ること六十有餘年の昔、米國では奴隸解放を中心として、南北戦争が起つた。正義人道の上から奴隸解放を叫んだ北方は、難戰苦闘の末、遂に奴隸制度を是認した優勢な南方を壓服したが、さてその功績を論ずるなら、一婦人のペンの力が、名將グラント將軍麾下十萬の兵の働きよりも、一層大きかつたと言はれて居る。さてその一婦人とは、ハリエツト・ピーチヤー・ストウ夫人であつて、彼女のペンの所産がこの作である。女史の父は、有名な神學者レーマン・ピーチャーであつて、父母ともに立派な家系の人であつた。彼女は幼時から讀書を好み、頭腦がすぐれて居たが、當時の婦人として、家柄も、教育も、才能も彼女程揃つた人は稀であると言はれて居た。そして同胞愛の信仰から、當時悲惨な境遇にあつた奴隸に對し、強い同情心を有つた。女史のこの名著が、當時の人心に正義の念を振ひ起させる力のあつたのは、偶然でない。實にこの稀有の好題材が、女史といふこの上ない好適な作家を得た結果と見られる。

二、(梗概) 處は北米ケンタッキー州、當時富豪や地主は、黒人を婢僕や勞働者に使つて居た

が、此地方の地主達は、奴隷達に對して至極寛大であつた。さて此處に、天性正直で、信仰心が深く、勞働を厭はず、主家の爲めにまめ／＼して働くトムといふ老爺があつた。この物語はこの男の悲惨な運命と、その周圍を寫したものである。トム爺の最初の主人は、セルビーといふ、善良な、親切な、寛大な人であつた。トム爺と妻のクロウ婆とは、主人の邸宅の近くの綺麗な小さい家に住んで、長年幸福に暮して居た。トムは終日野良仕事をし、クロウは主人の家の臺所で働いたが、晩方になると二人とも子供の居るわが家に歸つて、皆で楽しく過した。ところが主人は、奴隷達には親切な人であつたが、家計が拙で、可成の借金をして首が廻らず到頭人買のハレーといふ男に、永年使つた奴隷を借金の代償として、引渡すことになつた。物語は、この嫌やな人買ひがやつてきて、平靜なセルビー家の内部に、暗い不安な影を投げたのに始まる。賣渡されることになつたのは、夫人の氣に入りの腰元エリザといふ女のひとり子のハリ坊と、それからトム爺とであつた。ハリ坊の母のエリザは主人夫婦の密談を立聞きして、自分の子の悲惨な運命を知り、矢も楯もたまらない。エリザの夫は、別居して他に奉公して居たが、これより先き、暴逆な主人の處置に憤激して、こつそりと妻子に別れを告げて、カナダ

に逃亡したのだ。して又今、彼女は愛子と別れねばならぬ。エリザは、愛子を連れて逃亡することに決心し、同じ悲運を負ふトムの門を叩いて告別する。眞夜中のことである。すべての秘密を知つたトム夫婦の驚きと歎き！クロウ婆は頗りにトムにも逃亡を勧める。

然し神を信ずることのあつたトム爺は、頭を振つた。かくてエリザは、子供を抱いて出て行つた。朝になつて、エリザの脱走を知つた人買ハレーは、その後を追掛けた。エリザは、オハイオ河のほとりまで逃げたが折柄の増水に、渡りかねて居るところを追詰められた。その瞬間彼女はわが子を抱き上げるが早いか、飛鳥の様に、河筋に浮流する氷塊の上を、神のやうな早業で、飛び越え乗り越えて、足を血で眞赤にしたのも無我夢中で、彼岸に達した。そして、慈悲深い一家の人々の保護を受けて、安全に魔の手を逃るゝを得た。

話變つて、トム爺はクロウ婆や二人の子供に永久の別れを告げて、人買ひに連れられて行つた。エリザに逃げられて憤怒したハレーは、今度は用心厳しく、トムを縛つて、馬車に乗せて行く。

セルビー家の息子で、一番トムに親しみのある、ジョーチといふ青年が、あとを追つて来て

途中で追付き、トムに別れを惜む、そして必ず金を拵へてトムを請戻に行く約束する。一切を神に任せたトム爺は、妻子との悲しい別れも、若主人との別離も、人買の非道な虐待も、すべてを堪へた。

かくてトムは、ハレーに連れられて、船でミシシッピ河を南下した。勤勞を厭はぬトム爺は船中で水夫達を助けて、よく働いたので誰にも好かれた。人情味のないハレーさへ彼を信用しかけた。この船には、天使のやうに神々しくて、可愛いエバンゼリンといふ五、六歳の少女が父に伴はれて乗つてゐた。トム爺はいつしか此の少女と仲良しになつた。ゆくりなくも、少女が船の揺れで海中に落ちたのを、トムが機敏に飛込んで、救ひ上げたのが縁となり、トムは少女の父に買取られることとなる。トムの二度目の主人は、ニュー・オリエンズに高莊な邸宅を構へてゐた。夫人は病身で、我儘な性で、氣むづかしかつた。家事は主人の従姉オフエリヤといふ婦人が切廻すことになつた、この婦人は几張面な人で、亂れたこの家の中をよく引締めて行つたが、元より奴隷賣買には反對であつけれども、どうしても黒人が嫌ひであつた。ところが、主人はトプシイといふ黒人の小娘を買取つて、オフエリヤの手許で教化することにし

た。野性の強い、そして従順性を缺いたトプシイは、オフエリヤの手にあはなかつた。然し、天使の様な少女エバの愛は、いつとはなしに、トプシイを感化した。トムは、此の一家からよい待遇を受けた。主人からはスツカリ信用された。エバとは大の仲よしになつて、何不足なく暮したが、家郷を思ふ情に堪へず、始めて文信した。思ひやりの深いエバはトムの心中に同情し父に迫つてトムを自由の身にすることを納得させた。といふのはエバは近來段々と身体が衰へて、もはやこの世に長くは生きられないことを自覺したからである。

果してエバの病は次第に重もり、遂に一家の悲みの中に死んだ。主人は、娘が生前に、約束した通り、トムを自由にして家郷に歸す考で居たが、その履行前に、急病で娘の後を追つた。かくてトムは、外の僕達と一緒に、奴隷に厚意を持たぬ未亡人の意志で、他へ賣拂はれることになつた。オフエリヤは、トムの爲めに未亡人に歎願したが、甲斐がなかつた。そこでオフエリヤは、トム爺が又賣られることになつた始末を、爺の家郷へ文信した。翌日、トムは、市場に賣り出された。三度目の主人となつた人は、實に残酷極まる農場主であつた。トムは穢い部屋に、五六人の仲間と雜居し、毎日家畜のやうに畑に追ひやられて、綿花を摘取つた。

トムは、此處でも仕事に精出して一心に働いた。彼は憐むべき一老婦人の境遇に同情して、ひそかに、この婦人の仕事を助けてやつたのを、監督に見付つて散々な目にあつた。然し、トムの正義を愛する強い意志は、主人の暴行の爲めに些少もくじけなかつた。例の老婦人達は、逃亡を企て、成功した。然し、その爲めに、トムは、又ひどい折檻を受けた。義に強いトムは何としても、逃亡者に不利なことを言はなかつた。烈火のやうに怒つた主人は、猛然トム爺に一撃を加へたので、トムは氣を失つて、地面に倒れた。

話變つて先きに逃亡したエリザは、其後夫とめぐり會つたが、今やハリ坊を連れ、自由の天地であるカナダに落ちのび、自分達の幸福を神に感謝した。

トム爺の妻クロウは、これより先き、他へ奉公に出て、爺の身請けの金を造らうと、身を粉に碎いて勤勞をしてゐる。オフエリアの書いた手紙が、セルビー家に着いた。ジョーチは金を調へて、トム爺を買戻しに出發した。漸く幾ヶ月も捜し廻つて、例の農場に着くと、トムは半死半生の態で、穢い部屋の中に臥てゐた。舊主人の子息の顔を見ると、トムは力のない聲で、今や自分の身は、神様に買ひとられて、天國に連れ歸られるところであることを告げる。そし

て妻子のことをジョーチに託して、安らかに死んでゆく。ジョーチは感激に満ちて、今日から此地上より奴隸制度を一掃することに努力することを神に誓ふ。

三、この物語は初め、新聞小説として書かれたが、非常な好評を博したので、單行本として出版された。すると、その賣行は驚くべき程で、米國及び英國だけでも、忽ち百五十萬部を賣りつくしたといふ。其の後、四十箇國もの國語に翻譯されて、世界の隅々までゆき亘つた。元來この作は、時代の問題を捕へた一種の傾向文學、又は宣傳文學とも稱すべきもので、純文藝の立場から見れば、幾多の缺陷がある。然し、よしや時代は變つても、國は違つても、美しい愛の物語として、涙を以て、幾度となく、讀みかへされるに違いない。譯者永代女史の筆つかひ頗る巧妙で、字句も亦よく洗練されてゐる。

## 四二、サイラス・マアナ

(摘要) 外國文學の部 ジョオジ・エリオット原著 今泉浦治郎著 警醒社發行 全一冊

四六判 布裝 四五一頁 大正十二年五月初版 定價二圓五〇錢



## (解説)

一、紫式部が、「源氏物語」を書いた時代から、八百年も後れて、英吉利に、エヴァンズ嬢と云ふ女流文學者が出た。十九世紀の中頃である。エヴァンズ嬢は、ジョージ・エリオットといふ男の雅號を用ひて、男性の作かと思まがふ様な、理智と、情熱に溢れる數篇の寫實小説を公にして、一世を驚かせた。當時の英國文壇には、ドイツケンスや、サツカレイなどの、大家が光つてゐるが、この才女が巧妙精緻を極めた筆致には、流石の大家連も、遠く及ばなかつた。エリオットの大作は、ロモラであるが、布置構想の巧妙な點から見ても、又心理解剖の精緻な點から見ても、サイラス・マアナこそは、女史の完璧の傑作とされてゐる。この名著は、エリオットが四十三歳の時に起稿し、翌年書き上げたものである。

二、(梗概) サイラス・マアナが、レエプロオ村に来て住んでから、十五年になる。彼は、リネル織の職工であつた。朝から晩まで、せつせと機を織つた。妻もなければ、子もない。近所の人との交際もせず、出来る限りの儉約をして、金を貯めた。外には何の楽しみもない。只晩食後に、稼いだためた金貨や、銀貨を取出してさぐつて見たり、積上げて見たりして、悦に入る

のが至樂であつた。

いつしか、金の高は二千七百有餘圓に上つた、それを二つのなめし皮の袋に納めて、機の置いてある床下に入れて置いた。

三、さて、マアナが守錢奴となつたのには相當の理由があつた。彼は元來、正直者であつた。教育こそなかつたが、熱烈な信仰を抱いて、信者として模範的な生活をしてゐた。彼にはウィリアム・デインと云ふ親友があつた。又婚約をしたサラといふ婦人があつた。所が親友と頼んだウィリアムは、人を疑ふことの出来ぬ、生一本のサイラスを、陥れた。瀕死の老執事の看病に當つたサイラスに、老執事の保管してゐた金を盗んだと云ふ罪をなすりつけて、ウィリアムは、サラにサイラスとの婚約を破らせた。そしてウィリアムは、サラと結婚してしまつた。親友に賣られ、婚約の婦人に捨てられて、サイラスは、この世には神もなければ信もないと、恐ろしい絶望の淵に沈んで、教會をすて故郷をすててレエプロオ村に來たのだ。

四、サイラスが、食ふものも食はずに稼いだためたお金は、或る霧の深い夕、僅か半時間程彼が不在の間に、根こそぎ盗まれてしまつた。盗んだ奴は、此村で、名門の地主カスの次男坊であ

つた。カス家は、夫人が亡つてから、家に縮りがなく、長男も、次男も、放蕩した。長男のゴットフリは、弟のダンスタンに託して、愛馬を賣らせる。ダンスタンは、兄の馬を賣りに獵場へ行き、誤つて馬を芋刺しにした。

徒歩で歸宅の途中、ダンスタンは、サイラスを欺いて、金を借りようと、その家に立寄る。折柄サイラスは、外出してゐたので、ダンスタンは、種々勝手な理屈をつけて、金を盗んで立去つた。すると、外は霧が深いので、足元をふみはづし、直ぐ近くの石切坑の池に、おちて死んだ。

五、金を盗まれたサイラスは、再び絶望の淵に沈んだが、その年の大晦日の晩、不思議にも女兒を興へられた。これはゴットフリ・カスが關係した素性のよくない女の生んだ、私生兒である。この女は、大雪の中をカス家に押かけて住かうと、此村をうろついてゐる中に直ぐサイラスの家の近くで凍死した。子供は母の腕から逃れて、サイラス家からさす明りを追ふて、屋内に入り込んだのである。この刹那、サイラスの冷たい心の中には、愛が復活した。彼は、此幼兒を育て上げることを、終生の楽しみとした。又ドリと云ふ婦人が、サイラスに心からの同情

を寄せて、色々世話をする。幼兒は、實の父の如くサイラスに親んだ。かくてサイラスは、全く愛と信とに甦つた。それから又十六年たつた。石切坑の水がかれて、思ひがけなくも、ダンスタンの骸骨と共に、サイラスの盗まれた大金が、そつくりそのまゝに出た。年頃になつた養女は、ドリの息子と結婚した。サイラスは、明るい楽しい晩年を送つた。

六、エリオット女史の巧妙な筆致は、各頁に見ることが出来るが、殊に、優柔不斷なゴッドフリ・カスの性格、それからダンスタン・カスがサイラスの金を盗むまでの心理描寫の細かさ、金を盗まれて喪神状態のサイラスが、村の飲連の集合所の虹屋といふ居酒屋に飛込んで、折柄幽霊話をしてゐた定連をびつくりさせた滑稽味、又幼兒が大雪の中を、明りを慕つてサイラスの門口に這ひ寄る描寫の美しさ、此等の描寫には、女史獨特の手腕を見る。

七、原著の邦譯は、本書の外には、新潮社出版、飯田敏雄氏譯のがある。これは、明快な筆で読み易いが、原文の妙味は、寧ろ本書に現はれてゐる。本書の譯者は、先年物故した英文學の大家厨川白村博士の批正の下に、五回改譯を試みたといふ程、苦心の作である。

尚、譯文の下に附した註解は、原文と對照して、原著の妙味をさぐらうとする者のために便

利である。

原著の筋を、極めて平易に、且つ多趣味に書いたものに、松岡久子の著述がある。婦人之友社出版「ニコラス、ニツクルビ及びサイラス、マアナ」一巻である。

## 四四、小公子

(摘要) 外國文學の部

バアネット夫人原著

若松しづ子譯

博文館出版

全一冊

菊判

紙裝 三四二頁

附録小公子諸家評言一五頁

明治三十年一月初版

定價一圓

(解説)

一、本書は、亞米利加の女流文學者、バアネット夫人の著「リツル・ロード・フォントルロイ」を巖本善治氏夫人嘉志子女史が、譯出したものである。譯者は、明治二十三年から、二十五年にかけて、三年に亘つて、此の譯文を巖本善治氏の經營してゐた女學雜誌に發表した。若松しづ子とは、女史の雅名である。原著が、亞米利加で、大評判になつたのは、千八百八十五、六年の頃であるから、女史が此の譯文に、筆を染めたのは、それから、數年の後で、今から四十年も

前である。當時、小公子は純潔な讀物として、非常な好評を博した。これまで、泰西の女流作者の作品が、本邦に紹介されたことは、殆どなかつたが、此の名著が、然かも、一婦人の手に翻譯され、殊にその譯文が、流麗であつたので、女學雜誌の愛讀者は皆、驚嘆の眼を以て之を迎へた。

二、(梗概) 英吉利のドリンコート城に、たつた一人孤獨生活を送つてゐる、老侯爵があつた。長子も、次子も、死んでしまひ、三男のキャピテン・エロルは、米國に渡つて、亞米利加の一婦人と結婚したが、一人の子供を遺して死んでしまつた。此の子供は、セドリツクと云ふ名であるが、天性聰明で、純撲で、無邪氣であつたので、誰にも好かれた。所で、頑固で氣むづかしやの老侯爵は、亞米利加が大嫌ひなので、自然、亞米利加婦人を妻にした三男の仕打が、憎くゝて堪らなかつた。けれども今は、孫の外、家督を繼がせる者がないので、嫌やいやながらセドリツクを引取る事にきめた。

三、老侯爵の使者の辯護士が、亞米利加へやつてきて來意を傳へる。母子の身の上には、一大變化が起つた。セドリツクの一番仲よしは、角の乾物屋のホツプスであつた。この男は元々、

華族が大嫌ひであつたので、セドリツクの口から、侯爵になると云ふのを聞いて仰天した。

でも一部始終が解つてからは、余り愚痴をこぼさなかつた。それからドイツといふ靴磨きが、セドリツクの親友であつた。此の人達に別れを告げて、母子は英國に渡る。セドリツクは直ぐ、侯爵邸に乗り込んで、祖父の許に暮すことになつたが、彼が「最愛の人」と口癖に呼んだ母親とは、別居せねばならなくなつた。溫和で、無邪氣な上に、聰明で、氣が利くセドリツクは、直ぐ老侯爵が好きになつた。酒風症になやんで、よく歩けない祖父を、小さい肩により掛からせて食堂に連れて行つた。その翌日は祖父に、ベースボールの遊び方を教へた。追々と領内の困る人達に、慈善を施すことを勧めた。利己的で頑固で冷酷な侯爵の心が、段々と解けて來た。少年は老侯爵を、親切なお祖父さんだ、自分も祖父さんの様になりたいと心から賞める。この天真爛漫な一言が、永年周圍から、きはられ、恐れられてばかり居て、一人の味方もなく孤獨生活を續けて來た老侯爵の胸に、如何に響いたであらうか。天使の様なセドリツクは、一日と、老侯爵を感化した。老公爵の彼が母に對する感情も、段々と和いだ。

四、所がこゝに、思ひ掛けない一大事件が突發した。それは、先年、公爵の長男と結婚したと

稱する婦人が、男の子を連れてやつて來た。勿論、これは偽せ者で、公爵家の財産を、押領にかゝつたのである。偶然にも、セドリツクの親友靴磨きのドイツクが、この婦人の秘密を知つてゐた。この女は、ドイツクの兄のペンの妻で、一人の子まであつたが、逃亡して行方不明となつてゐた。ペンとドイツクは早速英國に渡つて、セドリツクの味方になる。女の奸計が破れて、セドリツクは確實に公爵フォントルロイになつた。やがて老侯爵は彼の母をも城中に引きとつた。後には乾物屋のホップスも英國へやつて來て永住することになつた。

五、要するに此の一篇は、純潔無垢の一少年が、頑迷固陋の老人の心を和らけ、善に導いた、美談である。將來の日本婦人たるものゝ使命は、各自が小公子の本領を、發揮するにある。

若松しづ子の、小公子の譯文は、二葉亭四迷の「浮雲」と並んで明治年間に於ける、翻譯界の双壁と稱せられてゐる。今を去る四十年前に、言文一致体を以て、斯様な名譯を試みたといふ事だけでも驚歎に價する。

六、本書の縮刷は、岩波文庫のと、改造文庫のとの二種ある。何れも菊判半截型の小本で、改造文庫の方は、二三三頁定價二十錢である。